
千年王国ものがたりエイシア創記

みづきゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千年王国ものがたりエイシア創記

【Zコード】

N7227W

【作者名】

みづきゆつ

【あらすじ】

あの日突然、海の向こうからやってきた侵略者により、エイシア島の一領地であるクリストンは占領されてしまう。領主家でたつた一人生き残った娘シェラは、敵国への護送中、謎の老人により救出される。そんなシェラの前に、一人の青年が現れた。彼の名はレックス。かつて、自分の父が島内で反乱を起こし、この島の宗主の座から追放した、十三年間行方不明の王子だった。

序（前書き）

はじめて投稿します。みづからいつかはつらつと書きました。みなこへお願ひします。

シェラが領主の娘として育つた国クリストンは、一年前に海の向こうからやってきた侵略者、バテントス帝国に占領された。シェラは、その時の戦いで、クリストン領主である兄ライアスと、もう一人の兄ジゼレを亡くしている。

シェラには、ライアスとジゼレ以外のきょうだいはない。シェラの父親である前領主は一年ほど前に病死し、母親もシェラが物心つく前に亡くなつており、二人の兄が戦死したあとは、領主家の間はシェラ一人だけとなつていた。

バテントス帝国は、たつた一人残つた領主家の娘シェラを、クリストンの新領主にしたあと、極秘裏にバテントス帝国へ護送する事にした。

帝国がクリストンを占領したとはいえ、クリストンの首都サラサをおさえ、シェラを人質に取つただけだったので、各地にちらばるクリストン国内の反バテントス勢力すべてをおさえこめたわけではない。帝国に護送する事にしたのも、シェラが反勢力に奪回されるのを警戒したからだつた。

護送日当日、シェラは睡眠薬を飲まれ、棺おけによく似た長い行李に入れられた。そして、運び屋に偽装した兵士達に守られた荷馬車に荷物同然に積まれたのである。

首都サラサから、バテントスの船があるクリストン北部の港までは、どんなに急いでも数日かかる。荷馬車で棺おけなどという、非常識な方法での護送になつたのも、あくまでもシェラの移動が反勢

力に知られないようにするためだつた。そして、そのために、首都サラサには、シエラの偽物まで用意しておいたのである。

シエラが、首都サラサを旅立ち幾日か過ぎ、睡眠薬と棺おけでの屈辱的な日々にもあきらめがついたころ、荷物輸送のための運び屋に化けたバテントス軍の隊商が、とつぜん何者かの襲撃をうけた。襲撃は、もうすぐ港だという隣国ゼルムに近い山間でおこつた。

シエラ護送のために選抜された少人数ながらの精銳部隊は、襲撃者達が使つた今まで見た事もない筒状の細長い武器によって、あつとう間に蹴散らされてしまい、睡眠薬でウトウトしているシエラを奪われ、それきり見つける事はできなかつた。

その後、バテントス軍は、サラサにいる偽物を本物のシエラ姫とし、そのまま何事も無かつたかのよう、占領政策を続けていた。

物語は、ここから始まる。

序（後書き）

全9章で構成されています。すべて完成済みですので、順次発表させていただきます。長い物語になりますので、最後までおつきあいいただけたら幸いです。この作品をお読みいただき、まことにありがとうございました。

一、クロストンの姫君（一）

おー、おー、ここ加減におあひよ。こつまで寝てこる。もづくべ
夜明けだぞ。

（おねがい、もづくし、もづくしだけ寝かせて。つかれていの、
といむ。）

つたぐ、いくら睡眠薬を飲まれていいからうて、よくやんなに
寝られるもんだよ。こりとひ、お前さんのせいで、昨日の晩からず
つと戸と中を逃げつけなした。

（眠りたい、すいと。）

ここ加減にじろつてんだ。本当につかれたのまじつだ。おひす
ぞもづ。

（バテントスにじついたの？ すいぶん早いのね。）

ドサツ！

シエラは、一発で戸とがさめた。つもつた枯葉の上に落とされたの
で、それほど痛くはなかつたが、眠つていたのをいきなり落とされ
たので、びっくりして心臓が飛び出しちゃうくなる。

ちゅうとあ、乱暴じゃなー。お姫様になんてことをするのよ。

黒髪の若い女が、中年の赤毛の男になつたのが見えた。

「シエラ様、大丈夫ですか。お怪我はありませんか。」

山の中だった。シエラは朝の冷たさにブルリとふるえる。季節は秋なので、山の明け方の寒さは身にこたえる。黒髪の女の笑顔が見えた。

「簡単な物しかありませんが、何かお食べになりますか。喉は渇いてはいませんか。」

「何も、何もいません。」Uは、バテントスですか。」

赤毛の中年男と黒髪の女は、顔を見合せた。中年男は、やれやれという顔をし、黒髪の女はやさしく笑う。

「Uは、クリストンの隣国ゼルムの山の中です。バテントスの船がとまっている港に着く前に、私達がシエラ様をおたすけしました。私はミランダ。Uの男は、」

マーブル。赤毛の男はめんべくもせうに答えた。そして、赤い髪と対照的な緑色の瞳でチラヒシエラを見たあと、黒髪の女に視線をうつした。

「ミランダ。この先に山小屋がある。少し休もう。国境を越えてしまえば、いくらバテントスでも追つてこない。夕方までにリクセンにつけば、グラセンのジジイも安心するはずだ。」

グラセン、シエラは聞き覚えがあつた。ベルセア国教会の偉いお坊様の名前だ。たしか、ライアス兄様がクリストンの領主になったとき、ベルセア国教会からお祝いにきてくれた人だったはず。

「グラセン様、グラセン様とおっしゃいましたね。私、その方を知つております。たすけてくださつたつて本当ですか。私、本当にたすかつたのですね。バテントスに行かなくてもいいんですね。」

赤毛の中年男は、あきれたように頭をかく。かくたびに、ボサボサとフケのような物が落ちてくるのを見ると、そうとハフロに入つてないようだ。

「歩けるなんら、ついてくるんだ。ついてこなけりや置き去りにするが。こちどり、世話になつてるグラセンのたのみでたすけたんだ。」

黒髪の女は、ムッとしたように男を見た。

「どうしても行きたいつてグラセン様にたのんだのは、あんたじやない。素人のあんたじや、足手まといだつて私は反対したのにね。」

「おれは、この銃の威力をためしたかつただけだ。グラセンが、バテントスの大砲をヒントに設計した新武器なのに使わないじや宝の持ち腐れだる。」

マーブルは、右手に持つている細長い筒状の道具をシエラの前にさしだした。シエラには、ただのへんてこな杖にしか見えない。

「ま、そういう事だ。いくぞ。おれは少し眠りたい。」

と聞こ、やつをと行つてしまつ。ミランダが、枯葉の上に座りっぱなしのシエラを立たせた。少し、フラフラする。ミランダは、シエラの服についている枯葉を払い落とした。

「シエラ様、すみません。乱暴者で。山小屋は、すぐですか？」

「あの、一人だけで？ 私を護衛してたバテントス軍は、少數ながらも精銳ばかりときいてましたから。」

ミランダが、クスリと笑う。

「他の者達は、まだここにいますよ。シエラ様の目に見えないだけです。一人だけでは無理ですよ。」

シエラは、周囲を見回した。カサカサという山の音しかきこえない。

「さあ、行きましょう。こんなところに長居は無用です。いろいろと疑問もあるでしょうけど、今は私達を信用してください。決して、悪いようにはしませんから。」

シエラには、ついて行くしかない。

ミランダは、詳しい事はリクセンで待つて居るグラセンにきけど言った。そして、山小屋で少し休んだあと、シエラは、なれない山を歩き、夕方にはリクセンという小さな町へと到着した。

町の食堂で三人は夕食を済ませたあと、シエラは小さな宿へと案内された。

宿の前でマーブルは用事があると言い、そのままどこかへ行ってしまう。シエラはミランダとともに宿のギシギシとした階段をのぼった。そして、たてつけの悪い扉を開くと、愛想のよい小柄な老人

が待つってくれた。

まちがない、ライアス兄様の領主就任のさいの老人だ。

シエラを見た老人は、すわっていたイスから立ち上がり、シエラの手をとった。

「おお、こんなに素敵なレディになられまして。いやはや、月田のたつのは早いものですね。」

老人はシエラを、自分がすわっていたイスにすわらせた。

「私を覚えておりますか？　お兄様のお祝いにベルセア国教会からかけつけたジジイです。」

「あ、あのその、はい、覚えています。グラセン様ですね。あの、あらがとうございました。私、バテントスなんかに行きたくなかったんです。」

「そうでしょうな。あそこは知らない異国の中です。シエラ様が行つてよい場所ではありません。お国があのようになりますて、さぞつらい思いをされたでしょう。ですがもう、何も心配はございません。すべて、このジジイにおまかせ下さい。」

老人は、うんうんと、うなずきながら言つ。シエラは部屋の片隅に、大きな青年がいる事に気がついた。

サラリとした金色の長い髪を、むぞりに頭の後ろでたばねている、緑色の瞳をしたかなりの美青年だ。グラセンは、

「レックス、『あいさつなれ』。クリストンの姫君ですぞ。」

レックスと呼ばれた青年は、ムッとしたように顔をそむけた。グラセンは、青年の態度にため息をつく。

「もひしわけばございません。この夏十八になり成人しましたが、このようにあいさつ一つできない世間知らずの若者として。レックス、こちらにきなさい。初対面の女性に対して失礼ですぞ。」

青年は、しぶしぶシホラにあいさつをした。が、すぐにバタンと扉をなじし、部屋から出て行ってしまう。ミランダは、あきれたようすに扉を見たあと、お茶をもつてきますと言ひ部屋から出て行つた。すぐに廊下から、どなりあつ声がきこえる。シホラは、グラセンを不安そうな目で見つめた。

「私は、これからどうなるのでしょうか。せめて、サイモンに連絡はとれませんか。サイモンは、長年領主家に仕えてくれた側近で、私にとつては肉親同然の人ですから。それに、サイモンの妻は、私の母の妹で、彼は私の叔父にもあたるんです。」

グラセンは、しぶい顔をした。

「サイモン様ですか。たしか、シエラ様の母君と、彼女の妹であるサイモン様の妻は、お二人とも、ベルセア国教会の総本山があるベルセア国の出身でしたな。」

ベルセア国教会の総本山は、同じ名前のベルセアという小さな国にある。その名のとおり教会が支配する国だ。グラセンはそこに住んでいる。シエラの母と叔父であるサイモンの妻も、ベルセアの僧

「格闘級の家の出だ。」

「グラセン様、たすけていたいたことには、とても感謝しております。叔父は、私がたすかつたことを知れば安心なさるでしょう。叔父もバテントスとの戦いの最中、看護兵として参戦していた叔母を失っています。叔父にとつても私は、今はただ一人の身内なのです。おねがいします。」

「もうしわけございません。サイモン様は、反バテントス勢力の一つとして、活動なさつているときにております。つまり、居場所は転々と変わつておられるはずです。連絡をとるなどとても無理です。それに下手にサイモン様をおさがししたら、シエラ様がこうして私の手元にいることが知られるとも限りません。バテントスは、シエラ様をさらつたのが誰か、まだ分からぬはずです。」

「今はシエラ様の安全が優先されます。まずは、このゼルムからベルセアへまいりましょう。その後の事は、そこでご相談します。」

「ベルセア国教会が私を守つてくれると?」

グラセンは、首をふつた。

「今日は私の独断です。教会は何も知りません。教会の内部には、この島、エイシア島へ攻めてきて、クリストンを占領したバテントスに対する恐怖心があります。」

もし、私がシエラ様を保護した事実が知られたら、シエラ様の安全どころか、私の身も危険になってしまいます。それどこか、ベルセア国教会がバテントスの敵とみなされてしまうかもしれません。

ですから、あくまでも私の独断なのです。ですが、『安心を。シエラ様は私の命にかえても守りぬいてみせます。』

「なぜ、そこまで私を？ グラセン様は、バテントスがこわくはないのですか？」

シエラには信じられなかつた。自分とほとんど縁のない老人、しかもただの僧侶が、危険をおかしてまで占領された国の姫をたすくる理由が。

グラセンは、深いため息をついた。

「彼らのねらいは、このハイシア島の全占領です。このハイシア島は、バテントスがある大陸よりも南に位置しており、食料にはこまりません。バテントスは山岳地帯が多く、冬が長いときいてあります。だから、豊かなこの島へとやってきたのでしき。」

「食料なら、お金をだして買えばいいでしきが。貿易なら、クリストンは歓迎します。なのに、どうして突然おそってきて、このような事をするのでしょうか。」

「貿易は相手のつじつじによります。確實な食料確保には、占領のほうがよいのです。特に急激な領土拡大をし、大陸の支配をもくろんでいるバテントスにとり、貿易などといつ考えは最初から無いのですよ。」

シエラは、うつむいてしまつた。グラセンは、

「クリストンが占領されたとき、この島の宗主であるダリウス王国

と、ここゼルム、そしてこの島のもう一つの国カイル、我がベルセアは対応を考えました。ですが、バテントスが持ち込んだ武器、大砲ですか、あれの威力に太刀打ちできる方法が見つからなかつたのです。

それに今は、かんじんのダリウス王国の王である、ダリウス王が不在の時期です。現在のダリウス王国には、ゼルムとカイルをまとめあげて、バテントスに対抗するだけの力はないのです。

古い伝説によると、かつて、この島は千年前に一度だけ、今と同じように大陸の異国人に支配された事がありました。そして、その支配から島を解放したのが、伝説の英雄、女王ミコティカでした。

ミコティカは、神から授かっただとされる神剣と、二つの首のある双頭の白竜と呼ばれるドラゴンを使い、この島を支配している異国人と戦い勝利し、ダリウス王家の始祖となり、千年の長きにわたる、安定した国をつくったと伝えられております。

そしてこの千年、どこからも占領されず、島内で小さな争いはおきていましたが、ダリウス王国を宗主とし、ゼルム、カイル、クリストン、それに宗教国家ベルセアの安定したこの島の統治は続いていました。

ですが今、また再び異国からの支配を受けようとしています。ミコティカ以前の時代にもどりつとしているのです。それだけは、防がなければなりません。」

シエラは、ぎゅっと手をにぎった。

「もうしわけございません。クリストンが占領されたのも、私がこ

うなつたのも、自業自得というものです。父が、亡き父が、十三年前、あのような事件をおこななれば、このような事態には、おちいらなかつたでしょ。父が、マルガリー・テ女王様を殺してしまつた事を大変つらく感じております。」

シエラの父、ドーリア公はダリウス王家の出身だった。代がとだえた領地の跡継ぎは、王家から出されるのは、この島の慣例となつていた。

十五年くらい前になるだろうか。当時のダリウス王が世継ぎをもうけないまま狩猟祭の落馬事故で亡くなり、次の王位を、亡くなつた王の弟でクリストンに養子に出されていたドーリア公か、妹のマルガリー・テ王女かで、ダリウスはもめていた。

慣例ならば、養子に出されたドーリア公よりも、ダリウスに残っているマルガリー・テ王女が女王で決まりだろう。だが、マルガリーテ王女は政治的能力が皆無の上に、性格もかなり身勝手で、しかも奔放なふるまいをしたあげく、低い身分の男と恋愛結婚をしており、女王とするには非常に問題がある王女だった。

おまけに、マルガリー・テ王女の母親は、正妻の侍女だった女だ。父王が、酒に酔つたせいで正妻と侍女を間違えたといつ、いわくつきの王女もある。対するドーリア公は、前王と同じ正妻を母としていた。こういう理由があつたので、養子に出されたドーリア公が、王候補に浮上したのである。

しかも、ドーリア公には、ライアスという優秀な跡継ぎがいた。ライアスは当時十三歳で、神童と呼ばれるほど、文武にすぐれた才能を持つ少年だった。おまけにライアスは、ダリウス王家の特徴である金髪と青い目をしており、非常に美しい容姿の持ち主でもあ

つた。

マルガリーテ王女にも、当時三歳か四歳かの男の子がいたが、父親の身分が低い上に、あのバカ王女から産まれた子だという理由で、たいして話題にもならず、王子という扱いもされていなかつた。

慣例をとるか例外をとるかで、ダリウスは一年近く議論を繰り返していた。一時は、ライアスという強力なカードがあるドーリア公で決まりかけた。だが、伝統を重視したベルセア国から横槍が入り、慣例通り、マルガリーテ王女が女王として即位する事で決着がついた。

そして、ドーリア公は、一年もたたずみダリウスへ兵をすすめ、王都マーレル・レイをおそつたのである。結果、マルガリーテ女王は、宮殿に火をはなち燃え尽き、マルガリーテ女王の夫と王子は行方不明になつてしまつた。

王都はドーリア公にふるえあがつた。このまま、ドーリア公が王として即位するのではないかとおそれていた。又は、ドーリア公を王としなかつたことで、どんな報復を受けるかとおびえてもいた。

が、ドーリア公は、女王の死を確認しただけで他には何もせず、王都マーレル・レイからあつさり兵をひきあげ、クリストンに引っ込んでしまつた。王都の略奪もせず、もう用は無いとばかりに帰つてしまつたのである。

その後、ダリウスは、ドーリア公の襲撃に対して沈黙を守つた。非常に憤つてはいたが、下手に騒ぎ立てて、せつかくクリストンに引っ込んでくれた災いを、ゆり動かしたくなかったからだ。

ダリウスは、ドーリア公をどうこうするよりも、王子を捜索する事に専念した。だが、何年たっても見つけられなかつた。しだいに、王子は人の記憶からうすれ、ダリウスも、これだけ捜索しても見つからないのであるならば、死んだかもしないと考え、捜索をやめたのである。

一、クロストンの姫君（2）

シーラは、

「私には、王子様が亡くなられたとは、とても思えません。きっと、どこかで生きていらっしゃると信じております。亡き兄ライアスも信じておつました。」

グラセンは、

「シーラ様、あなた様も王家につらなる人間でござります。バテントスは何も考えずに、あなた様を本国へ護送しようとしたのではありません。バテントスは、理論的に物事を考えます。もう、お分かりでしょう。」

シーラは首をふった。首の動きにあわせ、シーラの豊かな栗色の髪がゆれる。

「私は王になる気はございません。王家との縁は、父が反乱を起こした時点でなくなりました。私は罪人の娘です。グラセン様、私をベルセアに連れて行ってください。そこで、どうすればいいのか、いつしょに考えてくださいませんか。私にできることは何でもします。」

トントン、ミランダがお茶と菓子を運んできた。シーラは、さつきの青年が気になつた。

ミランダは、

「ああ、あのバカですか。マーブルをさがしてくると言つてましたよ。リクセンはせまい町ですから、すぐにもどつてきまますよ。」

「あの、レックスさんでしたっけ。マーブルさんと、ビーチ・リバーゲン関係でなのですか。瞳の色が同じですし、親子なのですか。」

シエラは、お茶を受け取つた。ミランダは、グラセンにもわたしあと、茶菓子を小皿にとりわける。

「親子に見えますか。まあ、見えるでしょうね。レックスの両親は亡くなつていいんです。それを独り者だつた叔父が引き取つて育てたんです。まあ、叔父と甥ですからね、瞳の色が同じでも当然ですよ。よく、まちがわれますしね。」

「あの、皆様、どういう方達なんですか。グラセン様はお坊様ですか、あなたは？ ふつうの人では救出なんてとても。」

グラセンは、

「ミランダは、それなりの訓練をつんだ女です。政治の世界は、いろいろとむずかしい事ばかりでしてね、ただの坊主では、やつていけないですよ。私は他に数人、ミランダのような者を使つています。ですから、シエラ様をこうして救出できたのですよ。」

「レックスさんもそうなんですか？ とてもそうは見えませんでしたけど。」

グラセンとミランダは意味ありげにほほえんだ。ミランダが答えた。

「レックスとマーブルは民間人です。ここいらの地理が詳しいので案内をたのんだんです。彼らは運び屋です。荷物運びのね。マーブルは、グラセン様のたくさんいらっしゃる知り合いの一人、ですかね。」

「じゃあ、素人さんですね。バテントス相手に、おやぢしくはなつたのでしょうか。」

「ああ見えて、けつこう腕がたつんですよ。運び屋は、時と場合によつては盗賊の出る危険な場所を通らなければなりません。高価な荷物も運びます。グラセン様はゼルムになると、いつも彼等の馬車に同乗させてもらつてゐるんです。」

グラセンは、ずずっと熱いお茶をすすつた。

「私は旅には、お金はかけませんよ。運び屋さんに荷物として、安く乗せてもらつてるだけです。」

シーラは小さく笑い、ミランダから茶菓子をもらつた。そつと口にふくむ。ほんのりと甘い素朴な味がした。シーラの目から急に涙がこぼれた。

「「めんなさい。悲しくないのにどうして。」

グラセンが、ハンカチをとりだした。

「お泣きなさい。無理をしなくてよいのですよ。ずっとがんばつてこられたのでしょうか。今は泣いてよいのですよ。」

「私、ダメですね。涙なんか、兄様達が亡くなられた時、なくなつ

てしまつたと思つてたのに。ライアス兄様が生きてさえいたなら、私なんかよりも、ずっとたよりになつたはずなのに。」

「亡くなられた人を考えても、どうじょりもあつませんよ。あなた様でよいのですよ。ありのままのあなた様で。ですから今はお泣きなさい。」

グラセンは、骨ばつた手でシエラの涙をハンカチでやさしくなでた。シエラは、まだ十七でしかない。少し泣いたあと、シエラはおちついた。

「グラセン様、私、王子様をさがしてみよつと思ひます。今、必要なのは、この島をまとめあげる王です。

ライアス兄様の話では、父は生前、王子様をさがしていたそうです。もちろん、悪い意味でです。父の跡をついだライアス兄様もさがしていましたけど、見つける事ができなかつたのです。

私なんかではとても無理だと思ひますが、ベルセアにつくまでの間、このゼルムをさがしてみよつと思ひます。ライアス兄様は、王子様は、ゼルムにいるのではないかと考えたようですから。

グラセンは、うなずいた。

「何もしないよりは、何か行動をおこしたほうがよいでしょう。ランダ、あれを。」

「ランダは、はいと返事をし、グラセンの荷物から何かをとりだした。布につつまれてゐるが、どうやら小さな片手剣のよつだ。グラセンは布をほどき、むき身のままの、銀色の剣をシエラにさしだ

した。

「これは宝剣です。ですが、武器としては小さく、まったく切れません。儀式用と考えてくださいわればけつ」」うです。」

シエラは、剣を、おそるおそる手にとった。銀でできていると思つたが、色合いが銀よりもずっと明るい。白金だった。そつと刃に指をあてる。

「切れない。すぐ切れそうなのに。宝剣とおっしゃいましたよね。これを私に？」

「それは、ダリウス王家の物です。伝説の女王ミゴティカが、エイシア解放のために、女神からたくされた神剣だとされています。数年前に、私がゼルムの古物商で見つけました。

どういう経緯で、ゼルムまで流れてきたのかはわかりません。ですが、これはまちがいなく本物です。いろいろと調べた結果、本物だと断定しました。

私もあなた同様、王子は生きていると信じております。王家の剣が焼け落ちず、こうして無事だったのならば、持ち主である王子もかならず生きているはずです。さがしてください、あなた御自身の目で。その目で見つけてください。」

シエラは、刀身をながめた。持つ手がほんのりと暖かいのは気のせいだわつ。

やつてみようと思つた。可能性があるのなら、ぎりぎりまで賭けてみよう。グラセンは、シエラの手をとつた。

「もう、お休みください。となりにお部屋を御用意しています。今夜は、ぐつすりとお休みください。ここ、ゼルム北部のリクセンからベルセアまでは、一ヶ月の長旅となりますからね。」

シーラは、剣を返そうとした。グラセンは、それをおじとじめる。

「あなた様が持つていてください。そして、王子を見つけたあとは、あなた様の手からそれを返してください。ドーリア公のまいた種は、そうしてでしか刈り取れませんから。」

シーラは、静かにうなずいた。

夜遅く宿へもどってきた金髪の青年レックスは、まんじりともしない夜を、ベッドで過ごしていた。

居酒屋にいるはずのマーブルは、町の居酒屋という居酒屋をさがしても見つからなかつた。たぶん、居酒屋で仲良くなつた女の家で朝まで過ごすつもりだらう。めずらしくない事だつた。

レックスの本名は、アレクシウス・ダリウス・レイと言つた。レイは、王都マーレル・レイにもあるように王家の称号だ。光とか栄光とかいう意味もあり、由緒ある王家への敬称にもなつている。

レックスは、十三年前に行方不明になつた、マルガリー・テ女王の息子だつたのである。

グラセンは、ダリウスから逃げてきた親子を、ずっとかくまつていた。マルガリー・テ女王とドーリア公との王位争いのとき、時のベ

ルセア法王を動かし横槍を入れさせ、マルガリー・テ王女を即位させたのは、このグラセンでもあった。

なぜ、マルガリー・テ王女だったか。グラセンは、学問や神秘術、占星術、その他諸々に通じており、いろいろ試した結果、ドーリア公よりもマルガリー・テ王女と判断したからである。

（大きな災いが、海を越えてこの島へとやってくる。その災いをしりぞけ、時代を変える英雄が、マルガリー・テ王女の子だ。この子を王にしよう。それに、マルガリー・テ女王は短命と出ている。この子が王となられる日は、そう遠くはない。）

グラセンが、マルガリー・テ王女を女王にしたのは、レックスを王にするためだつた。だから、問題のある王女でもかまわなかつた。真のねらいは、王女の息子にあつたのだから。

そして、グラセンの予言は当たつた。ドーリア公の反乱による女王の死と、バテントス帝国の襲来である。

レックスは、起き上がり宿の外へと出た。そして、宿の裏口から、せまい路地へと出て、「ロミ・ロミ」とした街角から天にかかる刃を見上げる。そして、ため息をついた。

逃亡生活が長かつたせいか、レックスには王都マーレル・レイで過ごした記憶がない。自分が王族だという自覚もない。勉強もきらいで、読み書きはほとんどできず、生活一般も父親にたよりきつていたので、世間の事は年齢のわりには分かつてはいなかつた。

レックスは、こんな自分では、王都へ帰つても、なんにもできないと考えていた。そんなレックスにグラセンは、賭けを持ち出した

のである。

「アレクス様、一つ、このジジイと賭けをなさいませんか。シエラ様がベルセアにつくまでに、アレクス様を行方不明の王子だとお分かりになられたら、すなおにシエラ様と御結婚し、マーレル・レイへとおもどりになられて下さい。

だが、お分かりになられなかつたら、シエラ様と御結婚するもマーレル・レイへもどられるのも、アレクス様の御判断におまかせします。」

ムカつく言い草だつたが、シエラが自分がそうだと見抜ける可能性は低い。なにせ今の自分は、下町の一般庶民と変わらないのだから。

（グラセンのやつ。ダリウスとクリストンの関係修復には、シエラと結婚するのが一番だと言ってたつけ。ほんと、身分の高いやつの結婚でやだな。何もかも政治がらみだもんな。）

結婚については抵抗はない。年齢的に当たり前の事だから。だが、いくら関係修復の為とは言え、さすがにいい気はしない。そして、父親のマーブルもある。だが、グラセンがこうと決めて、まちがいだつた事は、今まで一度もなかつた。

（けど、実際見たシエラは、かなりかわいいな。いや、かなりなんでものじゃない。上品でフンワリしていて、何かこう、守つてやりたいって気になつてしまつ。あんな女の子、はじめてだ。やられた。）

グラセンのしたたり顔が丑にうかび、レックスは思わず、近くの

「ゴミ箱を乱暴にこりとげました。くわつた魚の臭いがシンと鼻をつぶ。ふと氣がつくと、そばにシホラがいた。レックスは、びっくりして後ずさつをした。

「な、なんでゴミ。夜中だぞ。」

「君も夜中なのに、ここにいるじやないか。」

レックスは、シホラが王家の剣を持っているのに氣がついた。シホラは、

「これ？ グラセンからあずかつたんだよ。あとで君にわたせってや。なんなら、今わたしてもいいけど。」

レックスの頭から血がひいた。まさかもう？

シホラは、こわこわしてこる。

「くわいね。ゴミ箱にあたるもんじやないね。うわ、魚の内臓すてんのか。これ、塩きかせて発酵させれば、いい酒の珍味になるんだけどね。このあたりじや、ただのゴミか。もつたいないね。」

レックスは、違和感がした。グラセンの部屋で見たシホラとは、あきらかに様子がちがう。シホラは、

「氣がついたみたいだね。ぼくは、シホラじゃないよ。まあ、シホラって呼んでもいいけどね。ね、ぼくがだれか当ててみてよ。ぼくが君を一瞬で見抜いたよつこう。」

「一瞬、一瞬で見抜いたって言つのかよ。おれがだれか。」

「うん、わかった。だつて、ぼくはずつと君をさがしてたんだもの。『めんね、ぼくのバカな父親のせいで、君にこんな苦労をさせちゃつてさ。でも、安心して。ぼくが、君を立派な王様にして、マーレル・レイに帰してあげるから。』

「お前、だれだ？」

「わからないか。無理ないね。ぼくは生前、君と面識がなかつたから。」

「生前？ じいつ、憑き物か！ レックスは、ゾッとした。

「フフ、ぼくはライアス。シエラの兄さんだよ。バテントスに負けて死んじやつたね。ほら、あの大砲に当たっちゃつてさ。あつさり即死。苦しむ間もなくてさ。でも、すなおにあの世に逝けなかつたんだよ。

なんで逝けなかつたつて？ 君が気にかかつてたんだよ。どうしても君を見つけて、王様にしてあげたくてさ。別に父親の罪がどうこうじゃないよ。ぼくが、そうしたいと思つただけ。それで悪いと思つたけど、シエラに憑いたんだ。シエラはもちろん、ぼくの事は知らないよ。

内緒にしててくれるかな、みんなにさ。それに、グラセンは坊さんなんだから、ぼくがいるつて知つたら、イクソシズムしちゃうよね、たのむよ。ぼくは君の力になりたいんだ。」

いくらなんでも、これは怖い。レックスは、話の半分も耳に入ら

ない。ライアスは、困ったように首をかしげた。

「まあ、今晚はこれくらいで勘弁してあげるよ。初対面だしね。でも、なんで君が十三年も行方不明か理由がわかつて安心した。ドーリア公が死んで、ぼくの代になつても姿を見せなかつたのは、君がとてもマーレル・レイへ帰せる、いや王族にもどせるだけの王子様ではなかつたから。」

レックスは、カツとした。

「幽靈だからって、言つていい事と悪い事くらいはあるはずだ。全部、お前らのせいじゃないか。おれがこうなつたのも。どうせおれは、読み書きもできない、世間知らずの甘つたれたガキだ。」

「おれは、シエラと結婚なんかしない。マーレル・レイにも帰らない。」このゼルムでただの男として生きていぐ。だから、さつさと成仏した。お前の御執心の王子なんて、どこにもいないんだからな。」

ライアスは、ため息をついた。

「とりあえず、この剣はあずかつておくよ。シエラは、君に一眼惚れしたみたいだよ。あまり、冷たくしないでほしいな。妹が傷つくのは、これ以上見たくないからね。」

ライアスが持つ剣が、路地の影にもかかわらず、キラリと光ったような気がした。ライアスは、その場にレックスを残し、静かに宿へと入つていった。

一、ベルンの事件（一）

バテントス帝国に護送される途中、救出されたシェラは、グラセン、ミランダとともに、レックスとマーブルが運びの仕事に使っている幌付きの荷馬車で、ベルンという要塞の町へとやってきた。

ベルンは、要塞の名のとおり、ゼルム軍が駐留している。が、ベルンは、交通の便がよいことから、ゼルム北部の商取引の中継地としての役割も果たしていた。

「（）はもともと、クリストンの襲撃にそなえてつくられた場所だ。お姫様の国から、悪い軍隊がゼルムへやってきた時、迎え撃つためる。今は、クリストンのバテントス軍をにらんでいる最中だ。」

馬車をかりながら、マーブルは意地悪く言つ。マーブルのシェラへの態度は変わらない。冷たくよそよそしい。シエラがたすけてくれたお礼を言つても、銃の威力をためしたかつただけ、である。

レックスはマーブルのとなりの御者席で、長い金髪を風にゆらしてまま、だまつていた。おとといのリクセンでのあいさつ以来、レックスが言葉を口にしたのを、シエラはきいていない。

ベルンが近づくにつれ、マーブルはベルンの様子がいつもと違う事に気がついた。

ベルンは戦争のためにつくられているから、町の周囲を頑丈な壁でおおつている。何百年ものあいだ、壁の補強には念には念を入れ続けたせいで、今では鉄壁の防御を誇るまでになっていた。

出入り口の門も、街道のそっての南北一つだけで、その門には門番がいつもいる。その門が、いつもより監視がきびしい事に、マーブルは気がついたのである。

馬車に緊張が走った。シエラの逃亡が知られたのか？

門番の兵士は、

「顔見知りのあんたの身分証なんて、ほんとは必要ないんだけど、以前から、この近辺を荒らしていた盗賊を、やつと昨日になつて軍が取り締まつたんだ。なかなか、つかまらない盗賊だつたんだよ。」

盗賊の親玉は、なんとか生け捕りにして、軍の牢屋にブチこんでおいたけど、手下の何人かは逃がしちまつてね。明日の見せしめの公開処刑までに、逃げた手下が親玉を取り返しにベルンに侵入しないか監視してるんだ。」

兵士は、マーブルに身分証を返すついでに、荷台のシエラを見てニヤニヤした。

「かわいい娘さんをのせてるね。レックスの嫁さんかい。で、そつちの黒髪の美人は、あんたのアレかい。いいねえ、両方そろつておめでたいことで。」

「くだらねえこと言つてんじゃねえ。娘は、たしかにレックスの嫁だが、黒い方は、この馬車を足代わりにコキつかつて、荷台の坊さんの使用人なんだよ。この坊さん、あんたも見覚えがあるだろ。娘は、黒い方の遠縁なんだ。リクセンからもうつってきたんだよ。このままナルセラまで行つて、結婚式つて寸法さ。」

「ナルセラで結婚式ね。ゼルムの首都で式って、運び屋家業のあんたでなきやできないことだ。ついやましいね。そ、行つた行つた。
次！」

マーブルは、馬車と進めた。盜賊の親玉の公開処刑とはおだやかではないが、とりあえずホツとする。//ワンドガ、

「あいかわらず、口がうまいのね。シホラ様の事をきかれたら、どうしようかと思つてたけど。」

「軍がつるわいベルンなんぞ、ほととほ通りたくもなかつたんだが、シホラを安全にベルセアに連れて行くには、身分を偽装する必要がある。//の運び屋組合で、シホラを組合員に登録してもらひ。

「//の組合員は、おれのなじみで融通がきくんだ。他の町の組合で登録するよりも、あれこれ、きかれなくてすむ。シホラ、組合はもうすぐだ。適當な名前でも考えておけ。お前は書類に偽名を書いてだけでいい。こいつは、口をきくな。あとま、おれがやる。」

あいかわらず怖い口調のマーブルに、シホラは冷や汗をかいてしまう。シホラは、御者席のレックスを見た。レックスは、無言のまま座つていた。

グラセンが、やせじくシホラの肩をたたく。その時は、マーブルは気するなと言つている。だが、シホラは、やるせない気持ちになつた。自分は、マーブル同様、レックスにきらわれているのではないかと思つてしまつ。

ベルンは、壁の中の町らしく、道はどこもせまくせこましい。
「ちちやーちちやとした建物や人が、ひしめきあつて生活している感じ

だ。

「シエラ、組合で登録が終わつたら、ミランダと、この町を見ておけ。まだ夕方までには時間がある。あんた、今まで雲の上の生活だつたる。庶民の暮らしはどうこつものか知らなきやならない。

この町は東と西にわかれてる。ここの東だが、西は軍の町だ。一般人も出入りしているが、この町の住民でないお前は近づくな。ミランダ、宿はいつもの場所だ。夕飯は、すませてくるんだ。」

「うつさいわね。そんなに命令口調でなくともいいでしょ。私は、あんたの家来になつたおぼえはないんだからね。レックス、案内は、あんたがしてあげなさい。私は、あんた達を見失わないようについていくから。」

「なんでおれが。おれは組合で仕事があるんだよ。ナルラセまでの荷物を形だけでも積んどかなきや、あやしまれるだろ。」

レックスは、露骨にいやな顔をした。シエラは、泣きたくなつてしまつた。ミランダは、

「そんなの、マーブル一人で間に合います。あんた、組合にいたつて、めんどりな事務手続きはしないでしょ。」

「悪かったな。けど、案内はいやだからな。」

「バカ、偽装のためよ。シエラ様は、あんたの花嫁よ。カッブル演じなきや、あやしまれちゃうわ。」

レックスは、ムツとした。が、これ以上、下手に逆らつても、口

では//ランダに勝てない。

「わかったよ。カツプルでもなんでも演じてやる。けど、その分、割り増し請求してもいいんだよな。そのお姫様のベルセアまでの運び賃に足してな。」

シエラは、しゅんとなつてしまつた。//ランタは、困つた子、とつぶやく。

馬車は入り組んだ道を進み、組合に到着し、シエラはそのまま組合長に紹介され、マーブルの指示通り登録をすませたあと、レックスとともに組合から外へと追い払われてしまつた。

そのあと、マーブルは、ナルセラ行きの荷物を多少積み、荷馬車と馬を組合にあずけ、グラセンとともに宿へと徒步で向かつた。

道すがら、グラセンは、

「あなたのお気持ちはわかります。けど、それは父親の罪であつて、娘は関係ありません。ウォーレン。」

「ウォーレンは、やめてくれ。とつぐの昔に捨てた名前だ。ああ、頭じゃ分かつてゐるよ。けど、おれと息子を富殿から脱出させた時のマール（マルガリーテ）の顔が忘れられねえんだ。おれは、女王なんてやめておけと言つたんだよ。親子三人で静かに暮らそうつてな。なあ、グラセン、なんでマールなんか女王にしたんだ。バカだと分かつていてな。」

「なんども申し上げたでしょ。私は、時間の流れのなかで物事を決めています。今の最善ではなく、結果としてどの選択が最善であ

るか、さまざま角度から見極めているんです。

マルガリーテ様は、たしかにお氣の毒でしたけども、それも時間の流れのなかで起きた事。あなたには、まだ御理解できないですけども、いずれ、この選択が正しかったとわかる時が必ずくるはずです。」

マーブルは、うーんと背伸びをし首を「コキコキさせた。

「あいもかわらず、むずかしいお言葉として。おれにとつては今がすべてなんだよ。あの、たよりないレックスをどうやって一人前にするか。嫁をもらえば、大人になるんじゃないかと言つたのは、あんただぜ、グラセン。」

「シエラ様は、やはり気に入りませぬか。」

「おれの意見なんか、どうでもいいんだよ。あのバカが気に入ってくれて、シャンしてくれれば、それで上出来。あんた、わたしんだろ。あの剣を。」

グラセンは、うなずいた。

「シエラ様は、ミランダにあづけてしまいましたけどもね。」

「気がつくのかね。にぶい小娘にしか見えないが。」

「決意は固いようですよ。まあ、気がつかなくても、アレクス様のお気持ちが固まれば、それでうまくいきます。だから、ミランダも、アレクス様に案内するよつ言つたのです。」

マーブルは、ため息をついた。

「マールと初めて会ったのは、ダチの誕生パーティだつたな。お忍びで女友達ときてたんだよな。身分違いの大恋愛が始まつたんだよな。おれもいつたい、あの女のどこに惚れたんだが今になつてもさっぱりだが、気がついたらもう後戻りできなくなつていた。

マールの父親に、おれ達の関係がばれてしまい、しかも妊娠というオマケつきだつたから、大慌てで結婚させられたつけ。バカ王女が自由奔放したあげく妊娠して、身分の低い男と結婚したつて、マーレル・レイ中の笑いものになつたのが昨日の事のようだ。

でも、やつぱり王女様は王女様だつたな。つましい、マーレル・レイのおれの家じゃあ、しょせん收まりきれなかつた。女王になつて富殿に帰つて、大喜びしてたんだよな。ほんと、バカな女だ。」

それきり、マーブルは何も言わなくなつた。二人は、無言のまま宿へと向かつた。

一方、レックスはシエラとともに適当に町をブラついていた。町は、どこに行つても似たような景色で、あいかわらずゴミゴミとしている。

「あ、あの、レックスさん、どこに向かつているんですか。さつきから、同じ場所ばかり歩いているような気がします。」

「この町の景色は、どこもおんなじなんだよ。行きたい所があるのか。」

「教会は、ここから遠いですか？ 休憩をかねて、少しお祈りしたいです。」

ついてこい、それだけ言つと、レックスはさつさと行つてしまつ。シエラは、「ミミミ」とした町中を、レックスを見失わないよう必死でついていった。

そこは、小さなベルセア教会だつた。十人も入れば、満員になつてしまふ小さな教会である。今はだれもいない。

「おれの知つてゐる教会は、ここだけだ。ここは、いつもの宿が近いからな。おれは宿に向かう。夕飯は、ミランダと食えばいい。ミランダは、おれが消えれば、すぐに出でくるはずだ。」

シエラは、教会のイスにペタリとすわつた。すくつかれた。レックスは宿に向かうと言つたが、そのまま教会の壁に背をもたれ、ムツとしたように目をつぶる。シエラは、レックスを見つめた。

（よく見ると、この人すごい。背が高いだけじゃない。肩や胸の筋肉がすごい。運び屋さんは重労働だし、それでこんなにきたえられたのかな。力もそうとうあるはずだわ。ライアス兄様も、見た目はほつそりしてたけど、すごく強かつた。

けど、とてもきれいな顔をしてる。ライアス兄様ほどじゃないけど、目鼻立ちがきれい。髪の色も濃い金色だわ。兄様も金髪だつたけど、色なら、この人のほうがあざやかだわ。やだ、私、恋したのかな。ずっと気になつてるし。）

レックスがいつのまにか目をあけ、こちらをにらんでいる。シエラは、あわてて祭壇にむかい祈り始めた。レックスは、ふたたび目

を閉じた。

（何やつてんだ、おれ。なんで、祈りなんかにつきあつてんだ。一
人で飯食つて宿に向かうつもりだつたのによ。）

「じゃあ、ぼくとおしゃべりしようよ。シエラ、少し眠らせたから
40°。」

レックスは、ぎょっとして田を開けた。シエラが子犬みたいな
顔をして、自分を見上げてこむ。

「お前、また幽霊か。なんでシンセイな教会なんかに出てくるんだ。
こじは、神様のリヨーイキだらうー。」

「べつにいいじゃん。どいでだつた。でも君、リクセンとちがつ
て、今日は怖がらないね。」

「怖いにきまつてゐるだろ。幽霊だしな。」

「なんか、ヤケクソみたい。なんでそんなにイライラしてこゐの?..」

「なんであつて、お前、幽霊のクセにわからないのか。」

ライアスは、ため息をついた。

「君の本音なんて、バカでも分かるよ。シエラが気になつてしまつ
がない。けど、グラセンやマーブルのおもわくにはまるのもいやだ。
君は、十三年前の事なんて、たいして気にしてないだろ?..」

「おれが、なんでシエラが気になるんだ? たしかに、おれは十三

年前なんて、どうでもいい。おぼえてないんだからな。いらっしゃんのはな、おれは教会のふんいきがきらいなだけだ。」

「なら、さつさと出て行けばいい。ほんと、困った坊やだね。壁にようりかかつてないで、そこにイスにすわるわ。立ち話じゃあ、おちついて話なんかできないからね。」

レックスは、うながかつた。ライアスをじらうとしている。

「おれ達の話は、ミランダがどこができるてるぞ。お前が幽霊だと知られたら、グラセンにつつぬけになつて、イクソシズムだ。」

ライアスは、笑つた。

「ざんねん、彼女には、ぼく達の話は聞こえない。ここで何が起きてるのか、外部からは察知できない。ぼくが、結界を張つてるからね。」

ライアスに手に、一本の剣があらわれた。これはたしか、ミランダにあずけている王家の剣だ。

「おどろいた？ この剣はね、本物の神剣なんだよ。ぼくは君をさがすと同時に、この剣の行方もずっとさがしてたんだ。グラセンの方から持つてきてくれてありがたかつたね。」

「お前、魔法つかつたのか。いきなり、お前の手にあらわれたぞ。それに、神剣だつて？ ミュティカの神剣だつて伝えられているだけで、ミュティカが使つた本物がどうかもはつきりしないんだぞ。」

ライアスは、教会の天井画をながめた。翼のある白馬に騎乗した

女神がそこにいた。ライアスは、天井画を見上げながら、静かに口を開いた。

「天かける乙女、女神ミコティカ、または建国の英雄。千年前、大陸に支配されていたエイシアを、奇跡の剣と現王家の紋章となつて、いる一つの首を持つ巨大なドラゴン、双頭の白龍を使役し、大陸の支配を断ち切つた英雄と伝えられている。

現ダリウス王国は、彼女から始まつたとされ、彼女の子孫であるダリウス王家に、代々、この剣はうけつがれてきた。この剣は、エイシアの宗主である証だ。

だから、グラセンは、この剣をシエラにわたしたんだよ。クリストンが君からうばつたものを、君へと返すためにね。」

「おれは、王様にならないと言つたはずだ。」

「ミコティカは、今では伝説となつていて、その実在すらはつきりと分かつていいない。歴史にも教会の教義にも、そういう英雄がいたというだけで、それ以上の記録は無い。

けど、ミコティカは実在した人物だ。それに、この島は、千年前に大陸の支配から独立したんじゃない。もつと古い時代だ。千六百年、いや千五百年前だらうね。ぼくの記憶が正しければ、それくらいたつてているはずだ。

五百年単位で歴史が縮められてしまったのは、当時の記録がないまいだつたせいかも知れない。それとも、削除せざるをえない理由があつたかだ。今となつては調べるすべもないがね。」

「お前、何言つてんだ？歴史のお勉強なんて、おれはやだぜ。」

レックスは、うそやつったよ!口をとがらせた。

一、ベルンの事件（2）

ライアスは天井画から、祭壇にある一つの神像に視線をうつした。男女の神像だ。

「天空の神ダリウスと、大地の女神ベルセア。世界の創世神だ。神話では、一人の神は世界を創世するにあたり、それぞれ役割を分担したという。

ダリウスは空を創造し太陽と風を創り、天空の神となり、ベルセアは大地を創造したあと、大地の女神となつて、地に人を満たし人の母となつた。世界は、この二人の神から始まつたとされ、人の母である女神の名をもらいベルセア教会がつくられ、そこに天空の神ダリウスを奉つたとある。」

ライアスは、目をつぶり、両手でしっかりと剣をにぎりしめた。かすかに剣が光つている。

「だんだん思い出してきた。なぜ、ぼくが君に執着していたのかもね。この剣をにぎりしめていると、記憶の底にしづめられた古い記憶がよみがえつてくる。

建国の英雄ミコティカは、この一人の神から産まれた娘とされ、国教会では、ダリウス、ベルセアにつぐ地位を持つ女神であるが、現実には、ごくふつうの両親から、ふつうの娘として産まれたんだよ。

そして、女神ベルセアから、ミコティカ・ダリウス・レイ、つまり、栄光あるダリウス神の娘としての意味を持つ名をもらい、歴史

の表舞台に出てきたんだ。

ぼくが、ライアスとして生きる以前の記憶。彼女は、ミコティカには、人間の親と魂の親の双方がいた。この世的な家族の絆を持つ両親、そして、魂の親である存在。それが天空の神と大地の女神、ダリウスとベルセアだつたんだ。」

だまつて聞いていたレックスは、聞きつかれたように頭をかいた。

「何が魂の親だよ。人間だつたら、みんなそうじゃないか。世界と人間をつくつたんだからな。国教会でも、この世の人間はみんな、この世界を創造したダリウスとベルセアの子だつて教えてるんだしな。」

ライアスは、目をひらいた。

「ダリウスとベルセアも人として実在したんだよ。ミコティカよりも、もつと古い時代にね。ダリウスとベルセアは夫婦だつた。二人して、数百人の一族をひきつれ、この島へとやつてきた。そこから、この島の歴史が始まり、一時的に大陸の支配を受け、ミコティカが解放し今に至つた、と言うのが真相だよ。」

「しょせん神話だ。実在も真相も何もないさ。お前がそう信じたかつたら信じればいい。おれは坊主じやないし、教会もきらいだしな。とりあえず信者になつていてるけど、産まれた時に自動的に洗礼を受けさせられただけだ。もういいよ、話がずらされた。なんの話をしてたんだっけ。」

「この剣の真偽についてだよ。この剣は本物だよ。ミコティカが実際に使つた、本物の神剣なんだよ。この剣の本来の持ち主である、ミ

「コティカの事を話すついでに、君の歴史認識を調べただけ。グラセンは、最低限の知識は教えてたんだね。」

「おれの事、バカだと思つてんだる。」

「事実、バカじゃないか。こうして話していても、知性のカケラも感じられないし。」

レックスは、ムカツときたがこらえた。ライアスは、

「こ」の剣はね、魔法の剣なんだ。何せ、女神ベルセアがミコティカを守るために与えた神剣なんだしね。ちょっと持つてござりん。ふつう、剣は持つと冷たいよね。」

レックスは、さしだされた剣をしぶしぶに受けた。大柄なレックスが持つと、小さな剣はあるでオモチャだ。

「ほんのり、あつたかいな。お前がさつきから持つてたせいじゃないのか。」

「そう判断されても反論できないね。にぎりしめてたもんね。じゃあ、こ」のじょう。剣よ、熱くなれ。火のようになくなれ。」

ライアスがそう言つたとたん、レックスの持つている剣が、熱湯のようになくなり、思わず放り投げてしまつ。

「あつちい、ヤケドする。急に熱くなつたぞ。」

手をフーフーするレックスの前で、ライアスは床に転がつた剣を手にとつた。そして、レックスにさしだす。

「もう、熱くないよ。」

剣は、ヒンヤリしていた。ライアスは、

「なんども言つてゐる通り、本物の神剣だからだよ。まあ、知らなくとも無理ないよ。この剣が王家の剣となつてから、千年以上もたつてゐしね。けど、グラセンは、この剣の正体にすぐに気がついたよつだ。」

「しかし、シオラを救出できたのも、この剣でバテントスの動きを知る事ができたから。そして、君達がドーリア公から逃げ続けられたのも、この剣のおかげ。どうりで、あれだけさがしても、だれも君達親子を見つけられなかつたわけだよ。」

レックスは、剣を少しがめたあと、ライアスにわたした。

「グラセンが、その剣をよくいじくつてたのは知つてたが、そんな剣だつたなんて知らなかつたよ。本物かどうかはともかくとして、不思議な剣だつてのは分かつた。なあ、それ、おれでも使えるのか。」

「

「興味が出てきたの？ 今は使えないね。靈能力の持ち主でなければ使えないんだよ。グラセンが使えたのは、彼が強い法力を持つていたからだ。」

「じゃあ、なんでお前は使えるんだ。幽靈だからか。」

「幽靈だからじゃないよ。並の幽靈じゃあ、この剣はビクともしない。クリストンのライアスはね、靈能力を持ってたんだよ。びっく

りさせるとこじゃないから、本人はかくしてたけどもね。」「

「もういいよ。なんかつかれてきた。グラセンがなんでバテントスの動きを知ったのか、疑問に思つてたけど、そういうカラクリなら納得できる。前々から、不思議ジイサンだと感じていたけど、相手が坊さんだから、そういうモンだらうと思つてた。」

ライアスは、二口二口としている。レックスは、成仏できないほど不幸な死に方をした幽霊のくせに、なんでこんなに二口二口できるんだらうと不思議に思つた。

ライアスは、

「ね、女の子だきしめたことある？ シエラ、かわいいだらう。きゅーっとだきしめるとさ、かわいくてたまんなくなるんだよ。ぼくが許可するから、今だいて『じらん。』

「なんで、許可なんだよ。おれには、そんな気はない。それに、いくら女の子とはいえ、なんで中身がお前をだかなきやなんないんだ。」

「

「練習だよ、練習。シエラ相手じゃ、君はムスッとしたままじゃないか。あーあ、シエラ、かわいそう。マーブル同様、君にきらわれてると思ははじめてるし。」

レックスは、ライアスから顔をそらした。レックスは、女の子とつきあつた経験はない。どうやって、女の子と接したらいいのか分からぬし、第一、グラセンもおもわくもある。

ライアスは、

「とりあえず、だきしめてみて。一度、思いつきり近づいたら、少しばしは君のシーラへの気持ちもほぐれると思うよ。グラセンのおもわくなんて氣にするなよ。結婚相手を紹介されただけだと考えればいい。世間一般的の結婚もそんなもんだしさ。紹介されて、自分の意思でシーラを妻にすると決めれば、それでいいんだよ。」

「なんだやんなにうれしかんだ。お前も結婚は、グラセンとおんなじだひづ。」

「かもね。おんなじ」と考えてるしね。けど、ぼくは、君の意思を尊重する。いやなら強制はしない。けど、正しい方向へは導きたい。それが、ぼくがここに残った理由の一つだ。」

セツボを向いているレックスの前髪に、やさしい手がふれた。

「そんなに警戒しないで。ぼくは生きている人間ではない。君の前ではウソは言わないし、だましたりもしない。第一、幽霊がいくら君を応援したって、この世の人間は、ぼくを見ることができないから、だれからも感謝されたりしない。クリストンのライアスが生きていたら、君をたすけるメリットを考えたろうが、今のぼくはただの幽霊だ。」

レックスは、ライアスの手をはじいた。ライアスは、やさしく笑う。

「今日はこれでおしまいにあるよ。剣をもどして結界をとくよ。レックス、この剣はね、もともと、ぼくが持っていたんだ。生前、ずっとおがしていたと言つたわ。これは、ぼくの分身みたいな剣なんだ。手放したくないけど、今はしかたないね。ミランダのもとへ

「おかえり。」

ライアスの手から、剣が一つと消えた。

「呼べば、剣はすぐにでも、ぼくのもとへもどつてくるのを、ひとつして生前、気がつかなかつたのかな。これがあれば、もつと早く君を見つけられたかもしれない。つうん、バテントスなんかに負けなかつたかもしね。ぼくはね、死にたくなかつたんだよ。生きて、君の力になりましたかつた。」

ライアスは、祭壇にむかいで田を開けた。シエラが、ハッとしたよう

に田を開ける。

「やだ、私、いつのまに眠つていたの。」「めんなさい。ずいぶん、時間がたつたんじゃないかしら。」

「たいして時間がたつてないよ。眠つたら、宿へ行け。少し休んでから、夕食をとればいい。この町の店は、夜遅くまで営業しているからな。」

「う、ううん、平氣。ちょっとウトウトしただけだから。ミランダさんといつしょに夕食にしましょ。レックスさん、お腹すいてるでしょう。」

「いや、おれは宿に帰るよ。マーブルから、明日の仕事の話をきかなかきやならない。グラセントといつしょだから、まつすぐ宿にむかつたはずだ。」

シエラは、ちょっとがつかりした。ミランダは、教会の前で待っていた。

「ずいぶん、熱心にお祈りなさってたようですね。何をお祈りしてたんですか。」

「さがしている人が見つかりますように。でも、祈ってる最中、眠っちゃつたみたい。」

レックスは、ミランダが持つてている大きめの荷袋が気になつた。ミランダは、グラセンの荷物と自分の荷物をまとめて、一つの大きな袋に入れてある。この中に、例の剣が入つてゐるはずだ。

「ミランダ、荷物ん中、ちゃんとたしかめてんだろ? な。ジーサンの大重要なモン、あずかつてるんだる。」

「あれの事? 荷物あけるたびに確認してるわよ。それに、どうやって私の荷物を他人がさわれるの?」

ミランダは、何もするにしても隙のない女だ。貴重品をミランダにあずけておいて、盗まれたり無くしたりする事は無い。

シエラは、

「あれって、あの剣の事ですか。私、グラセン様からあずかつたんですけど、あのよつた大切な物をずっと持つてる自信がなくて、ミランダさんに持つてもうつ事にしたんです。レックスさん、あの剣の事は知つてますよね。」

「なんか、ごたいそうな物なんだ。おれは、ただの運び屋だ。客であるジーサンの荷物なんか興味ないね。」

「そうですか。あの、私もレックスさんにとって、お客、なんですね。」

ミランダが、レックスを見た。レックスは、そんなミランダをジロツシ、

「まあ、大切な客だな。マーブルが、好奇心でたすけに行くくらいだからな。ちゃんとベルセアまで送つてつてやるから安心しろ。」

シエラが、がっかりしたのは書くまでもない。ミランダが、もう少しやさしくしろと、レックスをついつく。レックスは、あとはミランダにまかせると言い、その場から退散するよう、宿へと直行してしまった。

マーブルが、宿にいた事はいたが、酒を持ちこじんでおり酔っぱらつていた。レックスは、あきれた。

「つたく、仕事があわつたとたん、酒か女かよ。他にする事は無いのかよ。」

「あー、他に何するつてんだよ。大人の男はな、仕事がキチッとおわつたらな、酒と女以外に興味もたなくていいんだよ。」

「あんたみたいな大人になるつもりはない。それより、あんた、マジでシエラって考えてるのかよ。ずっと、うらんでたんだろ。」

マーブルは、酒ビンごとグイとやつた。プハーッと酒臭い息をはく。

「お前の事は、グラセンにまかせてある。お前ももう十八だ。おれの出る幕はない。」

「あいつかわらはず、いい加減だな。その場その場で、適當な言い訳つくつて。この十三年、おれ達は、ジーサンがいなきや、まともに生きてこられなかつた。ジーサンにいやと言えないのは、頭があがんないからだろ。」

「けどな、いやなら、いやだとはつきり言えよ。こんな娘なんか、息子の嫁にする気はないってさ。それが言えないから、ねちねちシエラにあたつてんだろ。大人の男のする事じやないさ。」

マーブルが、カラの酒ビンをなげつけてきた。レックスは、あつさつ受け止める。

「青」オガ、一人前の口をきくな。ほんとにいやだったら、たすけになんか行かないさ。憎たらしいバテントスに、銃の威力を見せつけてやりたかったのは確かだが、それ以前に、お前の国を荒らしたやつらに腹がたつたんだよ。」

「おれは、ただの運び屋だ。」

「お前は、マールの息子だ。ガキは、親の仕事をつがなきやなんないんだよ。」

「なら、運び屋でいい。」

二人は、フンとそっぽをむいた。マーブルは、

「なあ、レックス。どうするにしても、お前がしつかりしなきやないんだよ。」

らんのは確かだ。おれも、もう四十五だ。いつまでも、親のスネかじつてんじやない。」

「わかつてゐよ。けど、今のおれにどうじろつてんだよ。運び屋はダメだと言つし、マーレル・レイもどつたつて、王様なんてできやしない。バテントスなんて、とても無理だ。」

マーブルは、頭をかいた。

「だよな。今のお前に王様なんてできっこない。面殿で暮らしていた事すら覚えてないもんな。最初のこりは、ドーリア公の追跡がしつこかつたし、身分を捨てての逃亡生活だけで精一杯だつたしな。

ドーリア公が運よく死んでくれたと安心しても、お前の反抗期がひどかつたし、とてもじやないが、マーレル・レイへもどせる状態じやなかつた。

運び屋も、グラセンの援助にたよるのにも嫌気がさして、逃げ回るついでに始めた仕事だったが、お前はそれにすっかりなじんじまつたし、今じやあ下町の男でしかない。

「だから、身分の高い女と結婚させようとしたくらんだのか。少しでも、もとももどすために。」

レックスは、あきれたように言ひ放つ。マーブルは、

「まあ、王様の嫁は、ベルセアの僧侶階級からもちらうのがふつうだよな。王様だけじゃがない、三国の領主もみんなそうだ。シエラの母親もそうだしな。グラセンがシエラをすすめたのは、クリストンとの関係修復だけが目的じゃあないはずだ。シエラが王位継承で

きるから、お前の嫁にしちまえと考えたかもしけんし、他にもあるかもしけん。」

レックスは、ライアスの幽霊を思った。

「もし、もしもだよ。もし、クリストンのライアスが生きていってさ。バテントスに護送されるのが、シホラじやなくライアスだつたら、グラセンはたすけたのかな。」

マーブルは、酔っぱらつた頭で少し考えた。

「お前の嫁にはできないな。けど、たすけたはずだ。ライアスもシホラとおんなじだしな。」

「ここへきたのが、シホラじやなくライアスだつたら？」

マーブルは、なんでそんなことをあへ、と皿線をする。そして、

「シホラよりは、たよりになるな。やつは、神童とまでウワサされた貴公子だ。お前の教育係りでも任命してやるかな。びじびしきたえてくれつて注文つけてな。」

マーブルは、あぐびをする。あと、一、三口飲んだら眠りてしまうだろう。そこの、組合から使いとていう男が部屋へ飛びこんできた。大変な事が起きたから、すぐに組合へきてくれと、半分眠りかけたマーブルを無理やり引つ張つてつた。

一、「ベルンの事件（3）

シエラとミランダは、マーブルと入れ違いにやつてきた。シエラは、両手にいい匂いのする包みをかかえている。ジリヤー、屋台で仕入れたようだ。ミランダは、

「マーブル、あわててジリヤーへ行つたの。窓あけてよ。この部屋酒臭い。」

部屋に入るなり、あきれたように室内を見回すミランダに、レックスは顔をしかめながら窓を開け、酒瓶をかたづけた。シエラは、包みをテーブルに置いた。

「グラセン様は、おとなりの部屋ですか。夕食を買つてきたので、みなさんで一緒にしましょう。レックスさん、マーブルさんはおそれなりますか。」

「組合に行つたんだよ。大変な事が起きたつてさ。マーブルのやつ、荷物を積むときに壊してしまつたかもな。」

ミランダが、グラセンを呼んできた。そのかん、シエラが包みをほどき、ミランダの荷物の中から皿などを取り出し分けていた。

「私、お水もつてきます。お水もひつには、宿の人と言えばいいんですね。」

「いえ、やらせてください。お世話をなつてこますから。」

「私が行きますわ。シエラ様は、すわつていてください。」

「いえ、やらせてください。お世話をなつてこますから。」

シエラは、そそくあと廊下へと出て行った。グラセンは、

「すいぶん、氣をつかわれていますな。まあ、だれかさん達の態度が冷たすぎますからね。」

「おれのせいだってのかよ。冷たいのはマーブルだろ。」

//ランダは、

「あんたも冷たいわよ。婚約者には、もつとやれこへしなきやね。」

「おー、だれが婚約者だ。おれは、シエラと結婚するなんて、ひとつとも思っていないぞ。」

「はいはい、ベルセアまでは、まだ一カ月あるわ。レックス、あんた、水をもつてくるのを手伝つてあげなさい。たぶん、裏の井戸に行けと言われてるはずよ。シエラ様、井戸の使い方わからないんじやなくて。」

「無理やつ一人きりにさせるな。くつつけようつたって、そつぱーかんぞ。おれは、おれの意思で物事を決める。」

レックスは、バタンと部屋を出て行った。

//ランダの予想通り、シエラは井戸の前に立つたつていた。井戸なんてさわった事がない。

(やつぱり、//ランダさんにたのめよかつた。私、なんにも知らないのね。でも、井戸つかえませんでしたって、お部屋にもどつて、

レックスさんに、なんにもできない女だと思われるのもいやだし。）

やつぱりもじるわ。見栄をはつたって、水はくめない。裏口へもどりのとしたシエラを、おそう者がいた。シエラは、軽く悲鳴をあげ、あつさりと何者かに、その場からつれさられてしまつ。

レックスが、裏口でシエラの悲鳴をきいたときには、シエラをかえた男は、風のようにその場から去つていつた。

「まさか、バテントスが？」

ミランダは、シエラに水をまかせたのが失敗だと思つた。一人にしてはいけなかつたのだ。グラセンは、

「いくらなんでも早すぎます。私達の足取りは、まだ彼らはつかんでいないはずです。このベルンの周囲に潜伏している私の部下達からは、バテントスを見かけたという情報はとどいておりませんからね。

しかもこのベルンは、出入り口を軍が見張つています。バテントスが、ベルンに入ろうにも、今日のようにはびしければ、顔立ちや肌の色がちがうバテントス兵など、あやしまれてしまうでしょう。ミランダ、剣を。少し調べてみます。」

グラセンは、剣を自分のひたいにあてた。そして、じばりく皿を閉じる。

「分かりました。シエラ様は今、北部の倉庫街へとむかっています。さらつた男は、ゼルム軍の兵士です。どうやら、シエラ様の正体を知つての犯行ではないらしい。田的には、運び屋組合にあるみたいで

す。何かを運んでほしくて、その取引材料ですね。」

レックスは、びっくりした。

「取引？ ゼルム軍が人をさらつてまで、なんの取引だよ。マーブルがさつき組合に行つたのもそれが原因か。」

グラセンは、意識を集中させた。

「あせらないでください。今、調べてますから。うーん、どうやら、運んでほしいのは、盗賊の親玉です。ゼルム軍の一部の兵士が、盗賊の親玉から買収され、軍の情報を流していたみたいです。親玉をベルンから脱出させるつもりです。」

そう言えば、ベルンの門で見張り兵が、盗賊は、なかなか捕まえられなかつたと言つていた。情報が流れていたなら当然だ。レックスは宿をとびだした。ミランダが後を追う。グラセンは、少し頭をかいたあと、剣を見つめた。

（シエラ様を守るための偽装工作があだとなりましたか。身内の婚約者として、組合登録したのを利用されてしまうなんて。）

組合にも、買収されている者がいるはずだ。でないと、こうも簡単にシエラに目をつけるはずがない。マーブルがいつも使う宿を知っている者の犯行だらう。

（ミランダの他にも部下を呼んだほうが良いですね。今、ベルン内部にいるのは、二人、ですか。一人はミランダの応援に行かせて、もう一人にはゼルム軍の内部を調べさせましょう。）

グラセンは、窓を開け、なんらかの図面をした。グラセンは、見えない部下を呼ぶときに使う図面である。

一直線に北部へ向かうつもりだつたレックスは、ミランダに説得されて、とりあえず組合へ行く事にした。マーブルも同じ用件で呼ばれてくるのなら、今度は、シーラをさらつたとの脅迫がどうしているだろ？

組合事務所には、組合長とマーブルの他に、組合幹部と呼びにきた男が四人いた。レックスとミランダが顔を出すと、マーブルは苦い顔を一人に向ける。

「きたか。つたく、お前ら何やつてたんだ？ なんで、フラン（シエラが登録した偽名）を一人にさせたんだ。」

ミランダは、

「私のミスよ。この町は安全だと思つて油断したの。」

「どこのガキが、小遣いもらつて、ついさつき手紙を運んできた。娘を返してほしくば、夜半過ぎに北部の倉庫街、十八番倉庫へ馬車を持つてこいとな。十八番倉庫と言つたら、軍の倉庫じゃないか。」

「そこに、フランがいるのか？」

レックスの問いに、マーブルはうなずいた。

「さらわれたのは、フランだけじゃない。組合長の娘もだ。その件で、おれは引っ張られたんだ。それで、どうやってたすけるか相談

してたら、今度はフランムときた。」

組合長が言うには、人さらいは、マーブルを運び屋に指名してき
たといつ。マーブルは、

「おれ達が、ベルンへきた時期が徹底して悪かつたんだよ。今日き
たばかりのフランムをすぐさま利用し、おれを指名したところを見る
と、組合の中にも犯人とつるんでいるやつがいるはずだ。」

ミランダは、

「まずは、フランムさんと組合長さんの娘さんの安全が先よ。私が先
回りをするから、あんた達は、指定されたとおり夜半過ぎに馬車で
きてちょうだい。」

「先回りするにもミランダ、お前一人で大丈夫か？」

「この町には、私の仲間が、あと一人しのびこんでいる。グラセン
様は、一人くらい回してくれるわ。あんた達がくる時間に、倉庫街
の入り口付近でまつっているからね。」

ミランダの姿は、あつというまに見えなくなつた。レックスとマ
ーブルは、組合の倉庫に行き、自分達の荷馬車から、ナルセラ行き
の積荷をおろした。マーブルは、

「暗くなつちまつたな。月明かりもないし、今夜は銃は使えないな。
しうがない、荷物にまぜこんで、ここに置いておくか。レックス、
荒事になるぞ。覚悟はいいか。」

「覚悟も何も、人の命がかかつてんだよ。あんた、さつきまであん

なに飲んでたんだぞ。まともに戦えるのかよ。」

マーブルは、荷馬車から片手剣を取り出し、ブンブンふりまわした。

「酔いはさめちまつたよ。しかし、災難がついてまわるような娘だな、シエラは。たすけたと思つたら、これだ。」

シエラをさらつた男は町民の姿をしていた。けど、顔は目以外かくしており分からぬ。シエラは、宿からさらわれたあと、近くにあつた馬に乗せられ、人の少ない裏通りを走り、北部倉庫街へと連れてこられた。

（こ）は、商業基地であるベルンにあつまる荷物を、一時的に保管しておく場所だ。倉庫街には、軍の使う物品を、軍に納入する前に保管する倉庫もある。シエラが連れてこられた倉庫も、軍の倉庫の一つだつた。

今は夜で、倉庫街には人はおらずガランとしている。シエラは、倉庫内にある、暗い一室に閉じ込められていた。そこには、組合長の娘もいた。組合長の娘まだ小さく、すっかりおびえきつてゐる。シエラは、娘とだきあい、ふるえていた。

（シエラ様、シエラ様。）

自分を呼ぶ小さな声。ミランダの声が、暗闇のなかにかすかに聞こえてくる。

（シエラ様、今じばらぐの「辛抱」を。敵は武装しており、六人ばかりおります。なんとしてもおたすけしますから待つていてください。）

//ランダは、どこかへと行ってしまった。シエラは、とりあえずホツとしたが、真っ暗闇の部屋に閉じ込められていては、やはり不安になってしまつ。

こういつときは、たいてい、たよりとなる人（シエラの場合はレックス）にたすけを求める事になる。シエラはおびえつつ、心のなかで精一杯、レックスの名前を呼んでいた。

夜半過ぎになり、//ランダは、倉庫街の入り口付近で馬車を待つていた。

「シエラ様と組合長の娘さんが監禁されている場所は見つけたわ。私のもう一人の仲間が見張つてる。」

マーブルは、

「盗賊の親玉を、あの軍の牢屋から脱出させられるなんて、一般兵じゃあできないことだ。まさかと思うが、買収されてんのは下っ端兵士だけじゃなく、上官もなんじやないのか。」

//ランダは、うなずいた。

「かもね。倉庫には、かなり強そうな兵士が六人ばかりいるわ。あれだけの兵士を、こんな短時間で選抜できるなんて、ベルンのゼル

ム軍の一部の組織が、まる」と盗賊の手下になりさがつてゐる可能性があるわ。私達が、ベルンに入つてからの手際もよすぎるから、出入りのきびしいベルンからの脱出は、運び屋にさせるのが一番との計画がねらっていて、あんたに白羽の矢がたつたのかもね。」

マーブルは、歯ぎしりをした。

「運び屋組合のこつたいだれが、盗賊の手下になつてんだ。くそ、あそここの組合は、みんななじみの連中ばかりだ。」

「ねえ、組合長さんの娘さんは、いつから拉致されたのかしら。二人が監禁されている部屋には、便器の他に毛布や食べかけの食事があつたわ。」

マーブルの顔色が変わつた。レックスは、

「マーブル、組合長はおれ達を盗賊に売つたんだぞ。どうするんだ。」

マーブルは、やや考えた。

「ハーリンダ、レックス、今の話はきかなかつたことにする。」

レックスは、

「おれは許さないぞ。こここの組合長こな、運び屋を始めたころ、いろいろこなと世話をになつたが、やつていい事と悪い事がある。」

「お前はだまつていい。子供を拉致されれば、だれだつて同じだ。組合長も被害者だ。そこそこを、よく考えろ。」

レックスは、ムツとして顔をそむけた。ミランダは、

「あんた達は、こまま馬車を手紙で指定された十八番倉庫まで運んで。敵は、六人のゼルム軍の兵士よ。倉庫の前に一人、中に三人、シエラ様が監禁されている部屋の前には一人。残り一人は、倉庫の近辺をうろついているわ。」

できるだけ、話を長引かせてちょうどいい。決して、あんた達だけで、なんとかしようとしている。あんた達が交渉しているあいだに、私が、監禁されている部屋の見張りをやって、一人をたすけだす。

私の仲間が、倉庫の外の兵士一人をころあいを見て倒して、倉庫にかけつけてからが本番よ。あんた達は、シエラ様と組合長の娘さんを馬車にのせて、そのまま逃走して。あとは私達にまかせなさい。」

マーブルは、

「盜賊の親玉も、六人の兵士のうちの一人なんだろうな。お前、親玉の顔を知ってるのか。」

「調べるヒマなんてなかつたわよ。たぶん、倉庫内の三人の中の一人のはずよ。寄り道なんかしないで宿に行くのよ。そして、グラセン様の指示をあおいでちょうどだい。」

「わかった。お前もじゅつぶん、気をつけろよ。」

マーブルは、馬車を出した。レックスは、汗ばんでこる手をギュ

ツと強く述べた。

事は、ミランダが話したとおり、うまく進んだ。ミランダの仲間が血まみれの剣を持ち、倉庫に飛び込むと同時に、ミランダが二人の入質を連れ倉庫に現れ、三人の兵士達をかいぐぐり、シェラと組合長の娘を馬車へとおしこむ。

そして、マーブルは、レックスとともに馬車を走らせ、倉庫入り口前の遺体と、ややはなれた場所にあつた遺体を確認しつつ、倉庫街から出ようとした時、荷台からシェラの悲鳴がきこえてきた。

いつのまにか若い男が一人のつている。

「いのまま、ベルンから出る。」

ベルンの夜間の出入りは民間人は禁止されている。出入り口も閉ざされており、外へ出るのは無理だ。シェラを人質にとつた盗賊は、懐から何かをだし、御者席へ投げつけた。

「軍の特別通行証だ。それがあれば、民間人でも夜間、外へ出られる。もつと穩便に脱出しようと思つてたんだが、はでにやつてくれたおかげで、その通行証がむだにならずすんだ。まあいい。おれは、ずっと倉庫の荷物の中にかくれてたんだ。あんたらが馬車を出すと同時に飛び乗つたのさ。」

マーブルは、クソと思つた。ミランダにしては、めずらしくらいの単純なミスだ。たぶん、この鉄壁の防御を誇るベルンの要塞が油断をうんだんだろう。

マーブルは、受け取つた通行証をレックスにわたした。そして、

北か南かを盗賊にきいたあと、倉庫街を出て南に馬車を向いた。

マーブルは、目印のために自分の腰にさげていた手ぬぐいを落とした。ミランダがこれに気づき、どれだけ早くかけつけてくれるかが、運命の分かれ道だ。

「お前、歳はいくつだ。親玉と言つからには、もつと歳がいつた男とばかり考えていた。」

男は、笑つた。

「組合長が、えらんだだけはあるな。あんた、度胸がすわってるな。これなら、あやしまれずに出入りを突破できそうだ。」

「見たところ、二十三半ばか。三十前だな。その若さで、軍まで買収するとはな。」

「ゼルム軍の給料は、いくらか知つていてるか。何年か前に新領主に交代したら、軍の縮小が始まり、待遇もグッと悪くなつたんだ。まあ、いくらおれでも、ベルンの軍を全部買収できない。外に出て仲間と合流したあと、クリストンに逃げて、今度はバテントス相手に仕事をしようかと考えている。」

マーブルは、チ、と舌をうつた。馬車は、ガラガラとベルンの入り組んだ道を走り抜ける。もうすぐ、南の出入り口だ。レックスは、がまんの限界にきた。マーブルからたづなをうぱい、乱暴にムチをあて、馬を暴走させ馬車を横転させた。

盗賊の親玉は、その場から逃げ出そうとしたが、レックスに足をつかまれ、力任せに建物の壁にたたきつけられ動かなくなつた。

「バカ、レックス。あとさきを考えて。早く逃げよ。このおれをで、みんな、起きだしてくるぞ。馬車と馬は、このまま捨てよ。」

レックスは、気絶しているシエラを抱き上げ、マーブルは組合町の娘を背負い、走った。すぐにガヤガヤといつ声がきこえてくる。町を巡回している軍の兵士もやってきたようだ。

二人は、休むまもなく走り、ようやく宿へたどりついた。二人ともへトへトだつた。グラセンは、

「シエラ様は、ひたいを軽くすりむいていますし、娘さんは、肩に多少の打ち身をしています。馬車を横転させて、これだけですんだのは奇跡でしょう。お二人とも、となりの寝室でよくお休みです。けど、アレックス様、なんといつ無茶を。馬車の事故はおそろしいものですね。万が一の事をお考えになつてください。」

「盗賊の親玉は、やつつけたよ。軍もかけつけたことだし、親玉は生きていたとしても、もうおしまいだろ。頭にきて、バカやつたのは悪かつたと思つてゐる。けど、あのままじゃあ、ベルンの外へ出でいた。」

マーブルは、

「レックスがバカなのは、どうしようもない。けど、たよりのミクンダも間に合にそうもなかつたしな。ベルンの外へ出たらたぶん、シエラの命はなかつたさ。走る馬車に飛び乗る身軽さなら、シエラを殺して、あつさり姿をくらますだらうしな。結果良しでカンベンしてやつてくれ。そりや、レックス。お前にやつた通行証はどうした。」

「まだ、持つてゐるけど。」

「アレクス様、それを見せてください。だれが発行したのか分かるかもしぬません。あとで私の方から、この証書をつかい、ゼルム軍にゆさぶりをかけてみます。不正は正さなくてはなりませんのでね。」

マーブルは、ため息をついた。

「グラセン、すててきた馬車には、所有者名と運び屋の登録番号が焼印されているんだ。どうする。」

「それは心配いじこません。軍は、まず組合に行きます。組合長が、こちらに軍がまわらないよう、つまく説明してくれます。そろそろ、ミランダが組合についているはずです。娘さんもたすけましたし、馬車が壊れていたら、組合長さんに調達してもらいましょう。」

「ま、それくらいの事はしてくれなきやな。娘をたすけた代金だ。馬車の用意ができしだい、ベルンから出よ。街道を南下し、予定通りナルセラに向かう。」

夜が明け、目をさましたショラがレックスにだきつき、大泣きしたのは言つまでもない。よほどショックだったようだ。ショラは、レックスに胸のなかで、しばらく泣き続けていた。

三、ナルセラの襲撃（一）

その日、大雨が降り、一行は町に足止めされてしまった。雨は次の日も降り続いた。三日目にやっと小雨になり、太陽が出たのは翌日だった。この時期、ゼルムは秋の長雨の季節であり、こうして馬車の足がのびるのはめずらしくない。

雨でぬかるん道をしづかに進んで行くと、自分達よりも先に出発した馬車や旅人が、もどりてくるのが見える。マーブルが話しかけると、旅人は、

「いやー、まいったよ。三日降った雨で橋が流されたんだ。このあたりには、橋は、あそこしかないだろ。今、この近くにいる軍が大急ぎで修理しているが、復旧はいつになるか分からなそうだ。」

マーブルは、疑問に思つた。

「たしかにひどい雨だったが、あそここの川幅はけつこうあるんだぜ。橋が流されるほどの雨じやあないと思つたがな。」

マーブルは、

「上流のほうが、雨はひどかつたんじゃないの。みんな地盤がくずれて、大木でも流されてきたんじゃない。あの橋、橋脚は石だけど橋自体は木造じやない。古い橋だつたしね。しかたないわ、もどりましょ。」

マーブルは、少し考えた。

「遠回りしそう。橋は一本だけじゃない。シエラの事もあるし、一つの所に長くいるつもりはない。グラセン、それでいいか。」

「それでいいでしょう。お任せします。」

マーブルは、道を引き返した。そして、宿をとった町を通り過ぎたあと、進路を東へと向ける。そして、予定よりもかなりおくれ、やつとナルセラに到着した。

「いやはや、最初の予定では、すでにベルセアに到着しているはずですが。爾と橋のせいで、ずいぶんと時間がとられましたな。」

グラセンは、つかれたようにナルセラの町を見わたしていた。このナルセラは、ゼルムの首都である。シエラは、はじめて見たナルセラに興奮をかくせないようだった。

「大きな町。クリストンの首都サラサとは、だいぶふんいきが違いますね。サラサより何かこう、いろいろなものが混じっている感じがするわ。活気があると言つたらいいのかしら。」

マーブルは、

「サラサは、そんなにでかい町じゃないときいている。首都にしては、さびしい感じだと、向こうに仕事で行った事がある運び屋仲間が言つてたな。」

シエラは、

「サラサはどちらかと言えば、エイシアの田舎ですから。クリストン全部が、そんな感じだと兄様は言つてました。あの、兄様、ライ

アス兄様は、エイシアの国を全部訪問しますから。一番、活気があるのはカイルの首都マーテラだと。」

「ライアスが、あちこち訪問したのは、ドーリア公の戦後処理のためだろ。ライアスの代になつて、ドーリア公でこじれた関係を修復するために行つたんだろ。まあ、『くろうなこつた』」

シェラは、うつむいてしまう。自分が何を言つても、マーブルはこうだ。マーブルは、

「だが、マーテラが一番だという意見には、おれも賛成だな。町もきれいで、住人の顔も明るい。マーテラに比べたら、ナルセラなんて、いろんな人間が入り乱れているだけの雑多な町さ。」

「あの、マーテラに行つた事があるのですか。」

「昔な。少しだけ、いたことがある。そろそろ組合につくわ。レックス、荷物をおろしたら、次の仕事はお前にまかせる。宿は、組合のとなりを使え。おれは、ちょっと用事がある。」

「おれにまかせるなんて、めずらしい事もあるんだな。ベルセア行きの荷物でいいんだな。なかつたらどうする。」

「ベルセア方面に向かう荷物ならなんでもいい。積み込みは明日にしよう。仕事をとつたら、お前達は宿に向かってくれ。」

レックスは、マーブルを見つめた。

「あんた、また嫌な事でも思い出したんだろ。遊びで『まかすのも、ほどほどにしろよな。』

マーブルは、レックスをこらんだ。

「ガキが、えらべりてまつたな。明日の朝には帰る。」

シーラは、

「あの、私、何か気にさわる事でも言いましたか。もし、やつてしたら謝ります。」

「あなたは、何も言ひやしないよ。いろんな事を思い出してさがる、おれが悪いのや。」

マーブルは、馬にムチをあてた。馬は、少し足をはやめた。

「後悔から、ぬけだせないです、マーブルは。あなたの母上を見捨てた事を、ずっとくやんでいるのです。彼の時間は止まっているのですよ。十三年前から。」

グラセンは、宿でレックスにそう言った。一人部屋だつたので、シーラとリランダはとなりだ。レックスは、

「やつぱり、まだ好きなんだな、おふくろが。おれは、どんな母親だつたか覚えてないけど。」

「アレクス様は、まだ五歳かそこいらでしたからね。たいそう、美しいお方でしたよ。」

「けど、頭の方は、たいした女じゃない、マーブルはそう言つてた

よ。おれ、母親似だとマーブルに言われているから、頭の方も似ち
まつたんだな。」

「それは、いいわけですぞ。最初から良い頭など、だれも持つては
おりません。神童と呼ばれたクリストンのライアス様の御努力ぶり
は、実に有名でしたしな。」

レックスは、少しいやな顔をした。ライアスの幽霊は、ベルンの
教会で会つたつきり、まったく現れてない。

「グラセン、ベルセアまでつて賭けだつたけど、もう一カ月になる
し、その賭け無しにしてくれないか。だれかに強制されてじゃなく
て、ちゃんと考えてみたいんだ。」

「なら、賭けは、やめにしましょう。大事な事ですからね。」

グラセンは、かすかにほほえんだ。レックスは、

「おれ、シエラといつしょに旅してきて、こつしていつしょにいる
のが、当たり前のように感じ始めているんだ。気になるのは確かだ
けど、マーブルからきいている大恋愛という感じでもないし、けど、
シエラがいなくなつたら、何かこう心の一部がなくなつてしまふよ
うな、そんな気もしている。」

あー、なんだか言つてて分かんなくなつてきた。シエラが、おれ
の事、どう考へていいのかも、よく分かんないしさ。ミランダは、
もつと優しくしろとそればかりだし。うーん。」

レックスは、頭をかかえた。グラセンは、

「あせつて答えを出す事でもありますんよ。自然にまかせればいいんです。私がリリコンダに言つておきますよ。」

グラセンは、すわつていたベッドから立ち上がった。

「アレクス様、私は少し、このナルセラに留まるひつと思ひます。明日の出発は、私を待たなくてよろしいです。」

と云ひ、部屋を出て行つとする。レックスは、

「ナルセラに、なんか用事でもあるのか。」

「はい。ベルンの件で。アレクス様からあずかつてある通行証の件です。ここ数年、ゼルムでは作物の出来が悪く、税収が悪化しているんです。盗賊が横行しているのも、それが原因でしき。

ですが、軍が盗賊に買収されるのは問題です。軍事費の縮小が給料の極端な削減であれば、この先いくらでも似たような問題がおきます。まして今は、軍事費の削減などやつてている時期ではありません。」

「ゼルムの領主に文句言ひに行くのかよ。いくらあんたでも、領主がすんなり会つてくれんのかよ。」

「会うのは、軍を引退した知り合いの元将軍です。彼からなら、くわしい事情がきけるでしょう。必要であれば、彼を通して領主に会うつもりでいます。」

レックスは、笑つた。

「あいかわらずだな、あんたは。逃げ場のないおれ達を引き取つたのといい、シエラをバテントスから、かつさらつたのといい、怖いもの知らずだよ。なあ、グラセン、前々からきこうと思つてたんだけど、なんのために坊主であるあんたが、そこまでするんだ。」

部屋を出て行こうとした、グラセンの足が止まつた。

「憂いは、できうる限り、取り除いておこうと考えています。ゼルムに開いた穴は、可能ならば、ふさいでおかなればなりません。そこから、バテントスに入られても困りますので。」

グラセンは、となりのミランダに声をかけた。レックスは、ゴロリとベッドに転がる。少しだけ開いている窓から、ナルセラのどんよりとした空が見えた。

グラセンは何を考えているのだろう。グラセンの勇氣と行動力は賞賛にあたつする。けど、本心はどうだろうか。グラセンの行為は正義感とか、善意とか、そういうレベルから出ているだけではないよつな気がする。これは、マーブルも感じている事だ。

マーブルは、こつだつたが、グラセンについてこう語つていた。

「あの、ジーサン。何、考えてんだろうな。なんか、おれ達は、あのジーサンの考えたシナリオにそつて生かされているみたいだ。」

そう、自分達は、グラセンという一人の僧侶により生かされている。レックスの母、マルガリーテを即位させたのも、この坊さんだ。

レックスは、寝返りをうつた。

（わがんねえな。おれを王にして、裏で権力をにぎるつてんなら理解できるけど、グラセンにはその氣がまるでない。あの坊さん、いつたいなんの得があつて、こんな事ばかりしてんだひ。一步まちがえば、自分の身もあぶなくなるのにな。）

そういう考えているうちに、レックスは眠ってしまった。ふだんから考える事が、あまり得意ではないので、すぐにつかれて眠ってしまう。夕食もとらずに寝てしまったので、レックスは夜中に腹がすいて起きてしまった。

（やべ、真っ暗じゃないか。この時間にあいている店なんて、ナルセラにはないしな。ミランダのやつ、シエラといつしょに夕飯食いに行くとき、起こしてくれればよかつたのに。）

となりの部屋に何か食べ物があるかもしれない。シエラが、お菓子とかよく宿に持ち込んでいるから。レックスは、廊下に出ようと扉に手をかけたとき、ドサリと音がし、窓から侵入者が現れた。侵入者は片手剣を持っており、有無を言わざずレックスに襲いかかる。

幸い、レックスは、運び屋家業で盜賊相手になんどか戦つており、こういう事態に比較的なれていたので、敵の攻撃をぎりぎりかわし、相手の股間をけりあげ部屋から逃げよつとした。

が、廊下から新手があらわれ、また襲われてしまう。これも、瞬間的に、いや脳神経よりも発達した運動神経によつて間一髪でのがれ、レックスは廊下へと出た。

侵入者は、隣の部屋にもいたようだ。ミランダが敵といつしょに廊下に飛び出してくる。ミランダは、自分が手にしていた一本の小刀の一本を、レックスにねつつけた。ミランダは、一刀流使いだつ

たので、武器はいつも一本身につけていた。

「レックス、私が血路をひらくから、あんた、シエラ様をつれて逃げて。早く！」

ミランダは、一人倒した。レックスは、自分に襲いかかる侵入者の剣を小刀でうけとめた。マーブルに小さいころより、手ほどきを受けていたので、武器のあつかいには自信がある。

ミランダが、レックスの敵をひきうけた。賊は、何人いるか分からぬ。外にもいるはずだ。レックスがとなりの部屋に入ると、賊が一人、床に倒れており、シエラは部屋のすみでふるえていた。

レックスは、シエラをだきあげ、窓から脱出しようとしたら。一階だったが、これくらいの高さなら、なんとかなるはずだ。窓から、また新手が入ってきた。

レックスは、シエラをかばいつつなので動きがにぶい。荒い息遣いのミランダが一人を守ろうと、新手に襲いかかった。

ミランダは強い。一人で数人相手にできるほどの実力をもつている。でなければ、グラセンがいつもそばにおいておくはずがない。

ミランダが、窓からまた室内に侵入しようとした敵を、窓の下につきおとした。何かが廊下から室内に転がつてくる。火のついたビンである。それも一つではない。五つも六つだ。

「レックス、火炎ビンだ。爆発するぞ！」

シエラのなかのライアスがさけんだ。ライアスは、バテントスと

の戦争で、この火炎ビンを見ている。これも、エイシアにはない危ない物だった。

だが、火炎ビンをはじめて見るレックスとミランダには、爆発すると言わっても瞬間的に理解できない。火炎ビンは爆発した。それと同時に火が宿の二階をつつむ。賊は、ビンが爆発する同時に、宿に火をつけたようだ。たちまち宿はパニックになり、泊り客は我先にと逃げ出した。

三、ナルセラの襲撃（2）

マーブルが明け方、ほろ酔い気分で宿に帰ってきたとき、宿が半分、燃え尽しているのを見て仰天した。警察が宿を取り囲んでいたので事情を聞くと火事だと語り。

マーブルは青くなつた。死者も出でおり、宿のそばの路地に布をかけられ、横たわつている。マーブルは、そのなかに自分の身内がまじつてないか、おそるおそる調べ、とりあえず安心した。

マーブルは、もしやと思い、運び屋組合に向かつた。避難した客は、すべてそこに集められており、警察の事情徴収に応じていた。そのなかに、三人の姿を確認したマーブルは、全身から力がぬけた。

レックスは、シェラをだきしめ、組合の長いすにすわつていて。ミランダが、マーブルの前にやってきた。

パンという響きがきこえ、周囲の視線が一瞬あつまつた。

「バカ！ あんた、今になつてよく顔を出せたわね。大変だつたんだから。」

「何が、何があつたんだ。」

「わからない。とつぜん、火があがつて。廊下のロウソクが原因じゃないかって、みんな話している。」

ミランダの口は、詳しい事は後で話すと言つていた。マーブルは、まさかと思った。レックスは、シェラをだきつつ、じつといつちを

見ていく。シエラの手には、あの剣があった。

爆発から逃げられないと判断したライアスは剣をつかい、三人の周囲に結界を張った。結界に守られたから、三人は無事だったのである。

「うせん、シエラにはそのときの記憶はない。気がついたら手にあつた剣を、お守り代わりに、にぎりしていた。」

マーブルは、フラフラとレックスの肩に両手をのせた。

「よく、よく、無事だつたな。よく。すまん、おれが不甲斐ないばっかり!」

「もういいよ。無事だつたしさ。荷物は、運び出すヒマがなかつたんで燃えちまつたがな。シエラもいひして無事だしさ。」

シエラは、ボンヤリとマーブルを見上げた。マーブルは剣を見つめる。

「それを持ち出してくれたのか。よく、気がついてくれたな。他の荷物なんて、どうでもいい。お前らが無事だつたらそれで。そういうや、グラセンはどうした。」

マーブルは、レックスの肩から手をはなした。レックスは、

「用事があるつて、どつか行つた。先に出発してくれつてさ。」

「やうか。警察が引き上げたら、荷物をひとのえて出発しよへ。ランダ、お前、持ち合わせあるか。」

「また、スッたの。お金ならあるわよ。でも、ちゃんと返してね。」

ミランダからもりつた金で急いで出発の準備をし、一行はグラセントを残してナルセラを旅立つた。馬車にゆられながら、ミランダから事のてん末をきき、マーブルの顔はこわばつていた。

「いつまでも、ばれないわけがない。ここにくるまで、なんにもなかつたのが奇跡だろう。お前一人で、よくがんばつてくれたな、ミランダ。」

「グラセン様と、酔っ払いがいなだけ、やりやすかつたわ。でも、きつかったわね。ただの運び屋だと、甘く見られていたようだから、なんとかなつたけど、爆発したときは、もうダメかと思つたわ。」

マーブルは、

「爆発したつて、何が爆発したんだ。爆発するようなモンなんて、宿にあつたのか。火事の原因も口ウソクじやないだろう。いきなり、燃え広がつたつて言つし、どう考えてもバテントスの火付けだろう。バテントスの姿は、だれも見なかつたようだし、やつらの死体も消えていた。宿を襲つた者達以外にも、仲間が外にいたんだな。ミランダ、実際、どうだつたんだ。」

「爆発したのは、火炎ビンだつて、きいたわ。バテントスが持ち込んだ武器よ。それが爆発したの。片手でつかめるくらいの小さな武器よ。あんなの見た事ない。」

「火炎ビン、おれもはじめてきいた。バテントスは、いろんな武器をもつてんだな。」

//ランダは、荷台のシエラとレックスを見た。//ランダは今は御者席にいる。シエラはぱすつとおびえ続け、レックスがそばにいないと泣き出してしまつ。

マーブルは、

「それで、爆発寸前に逃げたつてのか。まあ、お前がいてくれてたすかつたよ。」

//ランダには、ビツヤッてたすかつたのか、いまだに理解できない。シエラがいつ、剣を袋から取り出したのかも。ドンと音が響いたと思ったら、自分達は宿の外について、火の手があがる一階を見つめていたのである。

ただ、シエラが、たすけてくれたであろう事は、なんとなく分かっていた。それを、シエラにたずねようとしたら、レックスに何もきくなと先制されてしまつ。シエラもおびえきつており、それきりだった。

(レックスは、たすかつた理由が分かつてゐみたい。やはり、あの剣。でも、シエラ様があの剣をつかうなんて信じられない。あの剣は、そうとうな力の持ち主でなければ、ビクともしないし。シエラ様は、どう見ても身分が高い以外、ごくふつうの娘さんよ。あの惨事から、私達を守るだけの力があるはずない。)

でも、あのとき、たしかにシエラの声をきいた。火炎、ビンだ、爆発するぞ。たしかにシエラの声である。でも、いつも聞きなれない、ひかえめな声ではない。

一行は、昼食をとるために、水のあるところに休憩をとった。

「手早くすまない。茶はわかさなくていい。食べたら、すぐ出発だ。

」

マーブルが、荷台から馬をはずし、水場につれていった。ミランダが食材をとりだし、切り株の上で簡単な昼食をつくっている。シエラは荷台から、おりようともしなかった。

「シエラ、何か食べよう。朝も食べなかつたじゃないか。体に毒だよ。」

「レックスさん、私こわい。の人達、本氣で私を殺そうとしたわ。私、バテントスに見つかったら、つれもどされると考えていた。けど、殺されそうになつた。私、バテントスに殺されてしまつ。」

レックスは、シエラの手をつかんだ。シエラは、今にも泣きそうである。

「殺されない。おれが守るから。そうだ。あの剣を持つてろよ。なんかすごい、言い伝えがある剣なんだろ。きっと、シエラを守ってくれるぜ。」

レックスは、荷物から剣をとりだし、シエラの手にしつかりとございました。

(剣を持たせていれば、タベみたいにライアスが出てきて、シエラを守つてくれるはずだ。盗賊ならともかく、タベみたいのがまた襲つてきたら、おれじゃあ、たちつけできない。たのむ、ライアス。シエラを守つてくれ。)

「うん、わかった。ちゃんと守ってあげるね。」

ライアスだ。もつ出てきた。レックスは、

「シコラを、また眠らせたのか。」

「しようがないよ。おびえちゃってさ。ぼく、お腹がすいてんだ。お皿、食べたいしね。」

「ばれなこよひでしるよ。」

「シコラのふりなら楽勝だよ。」「うしごすうとこっしょこころとく、時々、ぼくはシコラじゃないかつて、思えてくるときがあるんだ。さ、外に出でお皿を、」

ライアスの顔に緊張が走った。目つきが、するどくなる。

「レックス、武器を出せ。水場にとまつたのがよくなかった。やつらが、こつちが油断していると見て、襲撃をかけよつとしてこる。敵は、四人、いや、五人か。ゆつべの残党だ。」

レックスは、剣をとりだした。そして、マーブルの銃も。この銃は、前装填式火縄銃だったので、レックスは銃に火をつけたあと、なれた手つきで弾を仕込んだ。ライアスは、

「マーブルが、水場からもどつてきいたら銃を投げわたせ。そして、敵襲だとさげび、幌のあの人あたりを剣で思いつきりつくんだ。それで一人片付く。」

「お前はどうするんだ。」

「シエラは非力だ。戦えない。けど、ぼくの事は気にするな。田の前の敵だけ、君は見ていろ。ぼくは、身を守りつつ君の援護をする。」

「分かった。だが、無理はするな。」

マーブルが馬を水のそばの木につなぎ、持つて行ったヤカンに水をくみ、もどつてくるのが見えた。

「レックス、今だ。」

レックスは、敵襲だとさけび銃を投げつけ、幌に剣をブスリとした。ギャアと言つ声とともに、血が剣をしたたりおちてくる。レックスは、幌から剣をひきぬき、ライアスとともに荷台からとびだした。

すぐさま、この馬車を遠巻きに護衛しているグラセンの手下がかけつけた。銃声が響き、少し応戦したあと、仲間を三人失ったバテントス兵は不利とみると、あつさり逃げた。グラセンの手下が、それを追う。

「つくしょう。やつぱり、おっかけてきやがった。ねらいは、すでにシエラだけじゃない。かかわったおれ達もだ。」

マーブルは、幌の上から死体をひきずりおとし、血まみれの幌をひきはがし、やぶの中に捨てた。そして、荷台の血を水で洗い流したあと、昼食もとらずにその場を去った。

レックスは、手に傷をおつていた。ミランダは、レックスの傷に包帯をまいた。

「すり傷ね。あんた、バテントス兵と戦つていたとき、勢いあまって馬車に手をぶつけてたものね。もう少し、戦い方を考えなさい。あんたの戦い、すきだらけよ。」

「悪かったな。ナビ、おれはあんたとちがつて、ただの民間人なんだよ。」

レックスは、ムッとして顔をそらした。ミランダは、やれやれと思つてしまつ。

マーブルは、

「不利と分かると、あつさつひきやがつた。タベとこー、やつひか体勢を立て直しつつ、これから、なんどでも襲つてくるだらうな。シホラ」と、おれ達を消すまではな。」

マーブルは、チラと荷台のシホラを見つめた。こつものシホラは、こじで顔をそむけてしまう。ナビ今は、

「グラセンも、シホラを引き受けた君達も、こうなる事は覚悟の上だつたはずだろ。それでも、シホラをバテントスから奪還する価値有りと判断したから、たすけてくれたんだ。なら、文句は言わない事だ。」

レックスは、やばいと思つた。ライアスは、

「カラサに偽シホラがいる限り、逃げた本物はじゅまなんだよ。ど

のみち、このまま手をこまねていれば、圧倒的な軍事力の前に、エイシアは大陸の支配を受けてしまう。

だから、君達は急いでいるんだる。まだ、間に合つからね。やつらが、来年の春、本格的にエイシア支配に向けて動き出す前に、レックスを王にして島をまとめあげなきやならないからね。」

いつもとあきらかに違うシエラに、マーブルとミランダは、背筋にさむいものを感じてしまう。ライアスは続けた。

「本当は、ぼくがやりたかった事だ。いや、やらなきやならない事だつたんだよ。ぼくが、もっと大陸の動きに注意を払つていれば、こんな事態には、ならなかつたかもしぬ。すべては、ぼくの責任だ。」

「お前、だれだ。」

マーブルは、疑惑にみちた目で荷台の娘を見つめた。ライアスは、クスリと笑う。

「もう、分かつてゐるじゃないか。レックス、君から紹介してくれよ。」

四、一度目の襲撃（1）

ナルセラの襲撃事件から数日が過ぎた。マーブルは街道を南下し、予定通りベルセアに向かっていた。

「ライアス、このまま街道でいいのか。この街道は、まっすぐベルセアにのびてゐるし、おれ達がどこに向かっているか、バテントスに教えているようなモンだぞ。」

マーブルは、荷台のライアスにたずねた。シエラは午後、荷台でよく昼寝をする。お姫様にとり、ガタガタとゆれる荷馬車での移動は、やはり負担だ。シエラが眠ると同時に表へと出たライアスは、体の負担をへらすよう荷台に横たわりつつ、剣をいじくっていた。

「もつ、知つてるよ。グラセンが坊さんだから、どこの道を使つたつて、向かう場所は一つしかないしね。」

「こりちは、いつ襲われるか、ビクビクしてんだぞ。」

「今は大丈夫。やつらの気配はない。こここの街道は、人の往来がはげしいから安全なんだよ。暗殺つてのはね、こつそりやるから暗殺なんだよ。」

「ナルラセの宿じゃあ、大騒ぎだつたじやないか。」

「あれはたぶん、ぼく達が予想外の抵抗をしたからさ。まさか、女子供があんなに抵抗するとは、想像できなかつたはずだ。」

レックスは、

「おい、子供つて、おれの事かよ。」

「他にだれがいるんだい。」

ライアスは、ムクツと起き上がつた。

「ちょっと止めて。もよおしたかい。」

レックスは、

「トイレかよ。お前、シエラの体だぞ。」

「別に」。母親が、シエラが一歳のときに亡くなつたから、ぼくがずっと、シエラのめんどうみてたんだよ。兄さんというよりも母さんだつたよ。いつもこっしょに寝てた。下の世話もずいぶんしたつけ。ちなみに、シエラのおむつは、ぼくがとつたんだよ。あー、たのしかつたな。シエラは天使みたいにかわいかつたしさ。もう一度、あのころにかえりたいな。」

ライアスは、ガサガサと茂みに消えた。ミランダが警戒しつつ、あとを追う。マーブルは、ため息をついた。

「ありや、病氣だな。妹がかわいすぎて、バカになつてる。おむつをとつた？ 領主の跡継ぎのする事かよ。クリストンのライアスは氣性がはげしく、策略家としても有能だつて評判だつたんだ。おれも、やつの代になつたとき、一時期はドーリア公以上に警戒してたんだがな。」

「死んで、人間丸くなつたんじやないか。最初から、あんな調子だ

つ
た。

「シヒト」といつこで今まで、何をしなりとしたりんだらうな。過去のつぐないばかりじゃなさそうだしな。グラゼンといふ、よく分からんやつだ。まあ、いついたすかるがな。」

ライアスが、ニラシダといつしょにもどってきた。手に何か持つ
ている。

「レックス、見て見て。すごい物みつけたよ。」

と言い、枝にブスリとさした、大きなトゲトゲの緑色のイモムシをさしだした。

「うわ、おれ、イモムシはけりこなんだよ。グーヤグーヤして氣持ち悪いしさ。それ、するよ。」

マーブルの顔色が変わった。

「そりや、毒蛾の幼虫じゃないか。どこで、そんなもの見つけてきたんだ。成虫よりも毒はないが、それでもかなりの毒を持ってるんだ。さつさと捨ててこい。」

「ゼルム毒蛾の幼虫だよ。すごい毒で有名な。このあたりにもいるんだね。さなぎになるために穴をほつてたところを捕まえたんだ。空きビンに入れておけば、なんらかの役に立つと思うよ。」

ライアスは、二口二口と笑いつつ、ミランダが用意した小さなガラス瓶に虫をおとした。

「設備があれば、毒を抽出できるんだけどもね。クリストンにいたところ、いろんな毒虫をつかまえて研究してたつ。」

マーブルとレックスは、少し背筋がさむくなつた。一二一二と笑う顔の下にかくされている、ライアスのもつ一つの顔を見たような気がした。

馬車は走り出した。ライアスは、しばらくビンをながめたあと、ランプに使う安物の油をビンに半分ほど入れた。そして、それをミランダにあずけ、また横になり剣をいじくつた。

（刺客は、ぼく達がベルセアに入る前に襲つてくるはずだ。明日か、あさつてか、少なくとも三日以内には必ず襲つてくる。

今度は、もつと大勢でだ。遠巻きにこの馬車を護衛しているグラセンの手下だけでは、人数的に対処しきれないだろう。バテントス兵が、この馬車を襲う前に、グラセンの手下が、どれだけ敵を減らしてくれるかだ。

あとは・・・ミランダはともかく、マーブルとレックスはふつうよりは腕がたつても、しょせん正式に訓練された戦士ではない。ぼくは、この体じや戦えないし、ミランダ一人にたよるのは無理がある。）

ライアスは、御者席のレックスを見つめた。

（とにかく守らなきや。やつと見つけた、ぼくの王子様だ。）

金色の髪が風になびいている。ライアスは目をほそめた。

（シエラが、一睡もするだけの事はあるね。一人の仲も、まあになつてた。あとは、シエラがこの剣をわたせるかどうかだ。）

ライアスは、あぐいをした。やはり、馬車の旅はこたえる。このまま、眠ることにした。ミランダがシエラに毛布をかけた。そして、シエラを守るよ、そばにじつとしている。マーブルは、レックスにささやいた。

（おこ、シエラよりもライアスを嫁にしたらどうだ。かなり、たよりになるぞ。）

（なんで、そななるんだよ。ライアスは、シエラの二ーサンだぞ。）

（幽靈だから、もう関係ないさ。シエラの体に入っちゃえば女だしな。まあ、嫁は冗談として、おれとしては、ライアスにこのままでほしいね。ライアスだつたら、安心して、お前をまかせられる。おれは、ライアスを気に入つたんだよ。）

レックスは、あきれた。完全にシエラを飛び越し、ライアスだけになつている。マーブルは、

「ま、なるようになるわな。グラセンだけには氣をつけなきゃな。おい、ミランダ、ジーサンにはナイショだぞ。」

「私は、なんでもかんでも報告してるわけじゃないわ。グラセン様が自らおわかりになるまで、だまつていつつもりよ。」

シエラは、スースー寝息をたてている。マーブルは、ホツとした。

「ライアスは寝ちゃったな。つまり、今日は安全って事だ。このまま、次の町に泊まろう。おれもなんだか、緊張続きでつかれちまつた。」

「遊びには、いかないでちょうどいいね。」

ミランダは念をおした。荷台に入つてくる風が冷たくなつてきている。秋もだいぶ深まり、あと、ひと月もすれば本格的な冬がやつてくる。ミランダは、シエラに毛布を一枚たした。

「寒いね。たすけてもらつた時は、まだ暖かかったのにね。」

この日は、めずらしく、一人きりで夕食をとつた。シエラはぴつたりとレックスに自分の体をよせつけ、宿への道を歩いていく。星が、またきはじめていた。

「私ね、レックス。クリストンいたときは、ふつうの人がどんなふうに生活してるか、まったく分からなかつた。いつも、サラサの宮殿において、ほとんど外に出たことなかつたから。兄様から話をきくだけだつた。

でも、うして、ふつうの人と同じように生活して、生きるという事は、乐ぢやあないんだなつて分かつたの。自分で食事の用意したり、洗い物をしたり、買い物をしたり、ミランダさんを手伝つてるだけだけど、うして、ふつう暮らすだけでも大変なんだなつて。

「つらいのか。」

「

シエラは、首をふった。

「あなたといっしているだけで、とても幸せなの。レックス。」

シエラは、いつのまにか、さん付けをやめていた。レックスは、シエラをだきしめた。そして、キスをする。唇をはなしたシエラは、ニヤニヤしていた。出てきた。レックスは、いいふんいきだつたのにと口をとがらした。

ライアスは、

「よしよし、上出来。お互い気になる相手と、毎日生活をともにしていると、だれだつて自然といつなる。どうだい、恋人ができた気分は。」

レックスは、中身が入れかわった恋人をはなした。

「なんか用か。」

レックスは、ムツとしている。ライアスは、

「明日、山間部を通りぬくんだね。襲撃は、明日あると思う。バテントス兵の何人かを、グラセンの手下が、さきほど見つけて処理したみたいだ。けど、グラセンの手下も戦える状態じゃない。数が多くすぎたんだよ。でも、かなり減らしてくれた。今夜あたり、ミランダに連絡が届くはずだ。」

「残った連中が、明日やつてくるのか。」

ライアスが、真顔になった。

「レックス、今回の襲撃は、最後の一兵まで命がけになつて襲つてくる。なんとしても、ぼく達をここで処理する氣でいるんだ。」

「それがどうした。どっちにしたつて戦うしかないだろ。」

「ぼくは、いざとなれば、君だけを守るつもりでいる。一人を犠牲にしても、君だけは守るつもりだ。」

レックスは、ライアスを見つめた。

「おれは、お前に守つてもらひつもりはない。危なくなつたら、お前だけでも逃げる。」

ライアスは、フフンと軽く鼻をならす。

「悪いけど、ぼくにはそんな感傷なんて通じないんだよ。ぼくの人生は、感傷なんかで片付けられるほど、甘い人生じやなかつたもんね。悲惨な死に方したしね。」

ぼくの人生つてさ、ほんと短かつたんだよね。結婚すらしてない花の二十六歳で、人生これからバラ色だつてときに、戦争なんかおきちゃつて、最後は死体すら残さず終わっちゃつたもんね。

あーあ、考えてみると、ぼくつてさ、産まれたときから、なんか不幸な人生あゆむように運命づけられてたみたい。その証拠にさ、父がダリウスを攻めると決めたとき、反対したのは、ぼくだけだったんだよ。

もつと、たくさん的人が、ダメつと言つてくれると考えたけど、みんな、父をおそれて沈黙さ。とうぜん、怒りを買つたさ。ぼくはすぐさま、宮殿の塔に閉じ込められて、父がサラサをたつまで、コップ一杯の水と一切れのパンしか『えられなかつた。餓死寸前さ。

叔父のサイモンが、サラサから出る直前、父にないしょで助けだしてくれなかつたら、ライアスの命は十四かそこらで終わつたろうね。それからもさ、いろいろあつたんだよね。やつと領主になれて、ぼくの時代がきたかと思つまもなく、バテントスだしだ。」

レックスは、

「お前、おれ達の事、かばつてくれてたのかよ。初耳だな、そりや。塔に閉じ込められて、餓死寸前だつたつて？ お前の親父、自分の息子にすらそうだつたのかよ。」

「氣性が荒いと言えば、そつだつたし。かなりの氣分屋。王座を奪えなくて、プライド傷つけられて、あんな事をしたしさ。ぼくは反対したんだよ。そんな事はしてはいけませんてね。ぼくだけが、クリストンじゃあ、君達の味方だつたんだよ。」

「わかつた、わかつた。そんなにしつこくしなくていい。第一、きいてもいないのに、なんで、お前の身の上話をきかなきゃなんないんだ。なんかまた、話がそらされた氣がする。なんの話、してたんだっけ？」

「襲撃の話だよ。けど、身の上話は知つてもらつたかった。グチもきいてもらつたかった。だつて、だれにも話す事できなかつたんだもん。」

「おれに恩を着せるつもりで話したんだる。その手には乗らないぞ。かばってくれた事には、とりあえず感謝するし、塔に閉じ込められたのは同情するけどもさ。」

ライアスは、ハアーッとため息をついた。

「ぼくは、父に似てると言われているんだ。どうして、あんな父に似てるなんて言われるのか、よく分からぬけどもね。似てるとしたら、たぶん、塔に閉じ込められたとき、自分の無力さを知り、そうなつたんだろうね。ぼくは、それからずっと父をおそれていた。いつまた怒りを買つか、こわかつたんだ。」

「シエラはその事を知つてたのか。」

ライアスは、

「塔に閉じ込められていた事は、後で知つたようだ。そのかん、シエラは、サラサ宮殿から、サラサ郊外にある離宮へと移されていたしね。でも、ぼくが父をこわがつてたのは、たぶん知らないだろう。ぼくは、弱みを人には見せなかつたから。」

「ライアス、お前。」

ライアスは、うーんと背伸びをした。

「あー、いーな。やーっと安心して本音言える人、見つけた。ずーっとモヤモヤしてたけど、話してスッキリした。」

「よかつたな、スッキリしてな。どうせ、バカ相手に話したって、どうつて事ないって考えてんだろ。」

「うん、それもあるね。ね、ぼくの友達になつてよ。ぼく、ほんとの友達つて、あんまりいなかつたんだよね。」

ライアスはまた、子犬のような無邪気な笑顔をむける。

「君とシエラのそばにいたい。シエラが許してくれるなら、このままここにいたい。シエラとして生きたい。」

「だったら、シエラに話したらどうだ。」

ライアスは、首をふつた。

「まだだめだ。シエラはまだ、自分の事で精一杯だから。明日の事は伝えたから、ぼくはひとつもよ。くれぐれも、シエラを悲しませないでくれよ。」

ライアスは、レックスにだきつきシエラにもどつた。
「寒いな。すっかり冷えちゃつたみたい。急いで帰ろ。」

シエラは、そつとレックスの手をひつぱつた。

四、一度目の襲撃（2）

レックスはシエラに、兄ライアスの事を話してくれとたのんだ。

「お前、兄貴の事、よく話してるだろ。だんだん興味がわいてきたんだ。神童で有名だつたろ。どんな兄貴だつたんだ。」

「兄様の事なら、なんでも話してあげる。うれしいわ。レックス、私の家族の事、どう考えてるか心配だつたもの。」

「なんにも考えてないよ。けど、男として興味ある。お前の兄貴なら、なおさらだよ。」

シエラは、得意そうな顔をした。

「すつ」と、きれいな人。会えればきっとびっくりするわよ。それですね、すごく頭がいいの。女の人に、もてもてでさ。女だけじゃないわ。男の人にも人気あつたんだからね。」

「それじゃあ、恋人の一人や二人はいたんだろ。」

「ううん、シエラが一番だつて言ってくれた。私以上の女は、いな
いって。」

なんか、きょうだい、と言つよりは恋人に近いような関係だつたんだな。と、レックスは思つてしまつ。ライアスのシエラへの態度は、まさにそうだけだ。

「お前、もう一人、兄貴いたんだる。えーと、その。」

「シゼレ兄様。」

「そいつもす」「」のか。」

シエラは、ちょっとと考えた。

「地味系、かな。ライアス兄様とは、ぜんぜん似てない。子供のころは太ってたし。シゼレ兄様は僧侶になるために国教会で育つたの。たまに、富殿にもじつてきてたつけ。」

「なんで、僧侶なんだ。」

「約束かな。クリストンの跡継ぎはライアス兄様だったから、一番目は権力争いをさけるために教会に行かされるのよ。ライアス兄様が戦争で亡くなられて、シゼレ兄様が教会から連れもどされたの。けど、すぐに亡くなつて。私、やっぱり一人ぼっちなのね。家族がみんな死ぬなんて。」

レックスは、シエラをだきしめた。

「そんな事はない。おれがいるじゃないか。シエラ、結婚しよう。おれと結婚して、いっぱい子供つくればいい。」

シエラは、ほほえんだ。

「ありがと、レックス。でも、私、ある人を見つけなきゃならないの。グラセン様と約束したのだから。その人を見つける事ができたら、そうしよつ。」

レックスは、自分の長い髪を一本切った。それをシエラの指に結ぶ。

「この髪は、すぐに切れて無くなってしまうけど、おれの気持ちだ。シエラの髪もおれの指にまいてくれないかな。」

シエラは、すぐさま栗色の髪を切り、レックスのじつに大きな指にまいた。一人は笑顔で宿へともどつていった。

翌日、馬車は山間部へとさしかかった。平坦でまっすぐな道の多い街道だったが、ここあたりは山が多く、うつそうとした森に囲まれた街道が続き、しかも街道は山にそつてるので勾配も激しい上、ぐにゅぐにゅとしており見通しもかなり悪い。

まさに、襲撃にはうつてつけの場所だった。いつ襲われるか、何も知らないシエラをのぞく三人は緊張でパンパンだった。

そして、馬に水をのませる水場についたとき、緊張はピークに達していたが、このときは何も起こらず、一行は警戒しつつ街道を走つていた。

山間部の橋が落ちていた。マーブルはまたかと舌打ちをしたが、すでに引き返すこともできない時間帯に入っていたので、横道にそれ、われぞうな浅瀬をさがす事にした。

橋が落ちたのは、ワナではないのだろうか、このまま進むと必ず何かが起きる。けど、引き返しても同じだ。

ライアスは、

「もう少し進んだら川原へ出でくれ。わたれそなうな浅瀬を見つけた。」

マーブルは、

「その浅瀬、ワナじゃないのか。」

「たぶんね。けどもう、逃げ道はないよ。ミランダ、昨日あずけたビンはどうある。」

「そこ」の箱の中です。割れないよう、白い布でつつんであります。」

「ビンの中に布をさいて入れるんだ。油には、幼虫の毒がにじみ出でている。火をつければ、毒の煙がたつ。君にわたしておく。」

「わかりました。ライアス様は、どうなさいます。」

「ぼくは、レックスのそばにいる。それでいいか。」

マーブルは、ライアスの言わんとしている意味がわかつた。

「そうしてくれ。そこ」のボンクラをたのむわ。お前だけがたよりだ、ライアス。ところで、お前、銃は使えるか。この前、いじつてたる。

」

「銃、ああ、あれはいいね。バテントスの大砲見てて、ぼくもあんな感じの武器を考えたんだ。もつとも、ぼくが考えたのは肩にのせてかつげる、小形大砲だったけどもね。グラセンは、いいものを考えたよ。」

マーブルは、手元にあつた銃をライアスになげつけた。

「女の体でも戦わなきゃならんだる。」

ライアスは返した。ライアスは、荷物の中から剣をとりだす。

「いらない。今のぼくの腕では命中はむずかしいからね。王家の剣があれば、じゅうぶんさ。」

「その剣、お前にたしかにあずけたぞ。それは、レックスの身分を証明する唯一のものだ。いざとなつたら、お前の手でそれをレックスに返してくれ。」

「・・・それは、シエラの役目だよ。浅瀬が見えてきたよ。覚悟はいいか。」

三人は、うなずいた。

そこは、川幅が広くなつており、流れもおだやかたつた。中州があり、草が生えているとこりを見ると、足場を選べはわたれるはずだ。

ミランダが先行し、足場を調べつつ水の中へと馬車を誘導した。馬は多少ひるんだが、マーブルがたくみになだめつつ、馬は足を半分まで水につかりながら、ゆるゆると進んでいく。

川の半分までわたつたとき、川上から丸太が数本流れてきて馬車を直撃した。馬のいななきが山間にこだまし、馬車は横転する。どこからともなく、バテントス兵が三人ばかりあらわれ、水の中へと

入つていつた。

すでに対岸にわたつていたミランダは、小刀をぬき、敵と戦うべく川を走つた。重い鎧をつけたバテントス兵の動きよりも、ミランダのほうが早い。ミランダは、兵が馬車にたどり着く前に切りかかつた。

パーん、するどい音が響き、ミランダに気をとられていた兵が一人倒れた。狙撃は正確で、撃たれた兵は水中で動かなくなる。

仲間が倒れた事で、動搖したバテントス兵のすきをつき、ミランダはあつというまに一人倒した。そして、最後の一人はまた、狙撃の餌食になつた。

ミランダは、ぱしゃぱしゃと岸へあがつてきた。マーブルが、周囲を警戒しつつ、ミランダのもとへかけよる。

「ミランダ、無事か。」

「なんで出てくるのよ。おどりは、私一人でじゅうぶんよ。」

「バカ、いくらお前が強くても、一人じゃ危険すぎる。けど、なんか拍子抜けだな。」

「あの三人も、おどりじゃなかつたのかしら。手ごたえがなさすぎると。動きも、にぶかつたしね。」

ミランダが、川の兵を見た。兵の一人の兜が脱げ、頭に血のにじんだ包帯をまいている。ミランダは、

「やはり、おとりね。怪我して、まともに戦えない連中を先に出しきてた。バテントスは本気だつて証拠ね。ここで、ケリをつけりがちだわ。あの二人は？」

マーブルは、チラと背後を茂みを見た。

「結界の中だ。剣を使い、馬車の幻を出現させると同時に結界を張り、本物の馬車見えなくして、ワナをかわすなんてな。グラセンもここまでできなかつた。ライアスは、バケモンだな。」

ミランダは、川の中ほどで横転している馬車の幻を見つめた。幻は、さつきより存在感がつすくなつていて、術が解けたのだ。

「マーブル、結界の中へもビット。川の馬車が消えると同時に、すぐ[new]手が出てくるわ。」

「今もどつたら、場所を教えるようなモンだぞ。あの一人には、何があつても絶対出でてくるなと言つてはいる。おれ達だけでなんとかするぞ。」

ミランダは、周囲に注意をはらう。木や草が、サワサワと秋の風にゆれているだけだ。

「やつら、シエラ様とレックスをさがしているのね。あの一人の位置が分からぬから、何もしないでいる。」

「なら、じつから動いてさがすまでだ。」

マーブルが銃をかまえて、その場から動こうとしたとき、どこからとにかく矢が飛んできて、足元の川原につきさせつた。

「動くなと言う事かよ。」りや、「着状態だね。」

マーブルは、矢が飛んできた方向をにらんだ。敵はもう、そこに
はいなだらう。

結界の中のレックスは、

「やつぱり、おれも出るよ。これじゃあ、こりみ合ひが続くだけだ。
おれが出れば、敵も姿をあらわす。」

「さつきの矢を見たるう。君が出たとたん、今度は足元じやなく筋
肉しかない体にブスリだ。素人の君では、あの矢はかわせない。」

「言つ事がいちいち腹立つな。悪かつたな、筋肉しかなくて。」

ライアスは、レックスの体をしげしげとながめた。

「立派な筋肉だよ。若くて、しなやかでさ。ほんと、もつたいない
ね。そんないい体もつてるのに、荷物運びにしか使ってないなんて
ね。ねえ、レックス。乗り移つてもいいかな。」

レックスは、びっくりした。

「ダメ！ おれ、そういうの二ガテ。とつつくのは、シエラだけに
してくれ。」

「いいじゃないか。友達なんだしさ。シエラと結婚すれば、君はほ
くの弟なんだし。かわいそうな兄さんに体かしてくれたつてさ。」

「だれが友達だ、兄さんだ。お前、このじるあつがましいぞ。」

シエラが倒れた。ライアスの靈は、有無をいわさずレックスに乗り込み、こんどはレックスの魂をシエラにおしこめてしまつ。

「悪いけど少しかりるよ。君はそこで見ていてくれ。君の意識があると、うまく体を動かせないから。」

ライアスは、シエラの手から剣をうばい、シエラに金縛りをかけた。シエラの体に閉じ込められたレックスは、何かを言おうとして体がまったく動かない。

ライアスは、荷台から片手剣をとりだし、結界の外へ飛び出した。予想通り、矢が飛んでくる。ライアスは、片手剣で矢をはじいた。

矢は、数本ライアス目指して飛んできた。だが、ライアスはたくみにかわしつつ、マーブル達のもとへと走つた。

マーブルは、飛び出してきたレックスにびっくりしてしまつ。

「バカ、もどれ。死ぬぞ。」

「ちがう。レックスじゃないわ。あの子にあんな事ができるはずがない。ライアス様よ。」

矢は、マーブルをねらつて飛んできた。ライアスは、王家の剣を使い、マーブルの前に見えない盾を出現させ、矢をはじいた。

「油断するな、マーブル。」

レックスの声でさけぶライアスに、マーブルはびく反応していいか分からぬ。ライアスが、あわててマーブルの横を通り過ぎ、剣を使い念力で対岸の岩をくだいた。

岩がくだけると同時に、かくれていたバテンツス兵が姿をあらわす。ミランダが川を走り、マーブルが銃をかまえた。そのマーブルめざして矢が飛んでくる。ライアスが、またマーブルをかばい、銃が鳴り響き、対岸の兵は倒れた。

対岸に、武器をもつた兵が一人出現した。そして、こっち側には四人。接近戦には、弾込めに時間のかかる火縄銃は不利なので、マーブルは腰にさげていた片手剣を使う。

ライアスの動きは、まさしくプロだった。レックスの体の性能のよさもあり、苦戦しているマーブルをかばいつつ、戦い続ける。

結界の中で動けないレックスは、その戦いを歯ぎしりしながら見ているしかない。

（クソ。おれの体を好き勝手しやがって。おぼえていろよ。けど、強いな。ライアスは、神童つて言われてたけど武芸も強かつたんだな。いや、強いなんてもんじやない。ミランダとおんなじくらいじゃないか。）

戦いは、こち側の勝利でおわった。マーブルは、血のついた剣を川原に放り投げた。ドカッと川原にすわりこむ。

「全部で十人かよ。まともに戦つてりや、絶対勝ち田はなかつたな。グラセンの手下に感謝しなきやな。手負いの状態にして、こっちに送つてくれて。」

ライアスは、すずしい顔でたつている。片手剣は血でぬめぬめしていたが、体には返り血はまったくあびていない。マーブルは、

「お前がいてくれたおかげだ、ライアス。」

「」の周囲から、敵の気配は消えたみたいだ。けど、長居は無用だ。ミランダ、悪いけど剣を洗つてくれないか。マーブル、立てるか。

ライアスは、マーブルを立たせた。マーブルは、服が血に染まつていたが、傷は右腕に少しだけだった。

「あーあ。レックスのやつも、これくらい優しければな。しかし、あいつがよく体をかしたな。」

「めんどくさいから、レックスの魂はシエラにおしこめた。ぼくは、もう引っ込むから、あとはよろしく。」

レックスの手から王家の剣が消えた。消えると同時にレックスがどなつた。

「あんちくしょう。文句言おうとしたら逃げやがった！」

マーブルは、血にそまつた服をぬぎ、それを茂みへと捨てた。

「うー、む。早く着替え出さなきや。ミランダ、剣を洗つたら肩をたのむ。」

マーブルは、川の水で肩を洗つた。たいした傷ではないとはいえ、剣で切られた傷である。かなり痛むはずだ。レックスは、たづなは

自分がとるにした。

馬車は、川の浅瀬をわたつたあと街道へともどつた。もづ、夕暮れである。シエラは、まだ眠つていた。町につくまで田を見まさないだろつ。

五、ベルセアの出来事（1）

ベルセアは、その名のとおり、ベルセア国教会が支配する宗教国家だ。ゼルムとカイルの間に位置しており、土地もせまい上、人口も少なく、国全体が教会でできているような国だ。

一行は、国教会の総本山がある、国と同じ名前の首都ベルセア市のグラセンの屋敷で、グラセンの帰りを待っていた。

「ここには、シエラの親戚がいるんだろ。シエラの母さんが、ここ出身なんだろ。母さんの実家があるんなら、あいさつしてきたらどうだ。ミランダも、せまいベルセアに、バテントスは入つてこないだろ？って言つてるしさ。」

暖炉の前でぼんやりしているシエラに、レックスは声をかけた。
シエラは、かすかに笑つた。

「おじい様もおばあ様も、もう亡くなられているし、母様の実家とはいえ、知らない人達ばかりよ。父様がした事を、いまだに許してはいない人達だしね。」

「家に閉じこもつてばかりいると体に毒だよ。少しくらい、外に出たらどうだ。」

シエラは、ここについて以来、一步も外へ出ていない。グラセンの屋敷は、それほど広くはない。使用人も、中年の夫婦がいるだけである。

シエラは、

「退屈よ。でも、ここへくるまでが、ずっと緊張の連続だったから出たくないの。外が怖いって言つたら、たぶん当たつていてると思つ。」

「おれがついてるよ。危険があつたら守るからだ。」

シェラは、少し笑つた。レックスでは、自分を守つぎれないくらい、シェラだつて理解している。

「外も怖いけど、気がかりな事があるの。ずっと言えなかつたけど。たぶん、信じてもらえないんじやないかつて。グラセン様がお帰りになられたら、相談しようかつて考えていたの。」

「おれでよかつたら相談にのるよ。話してみろよ。シェラ、元気ないしや。」

シェラは、ため息をつき考えた。

「兄様がいるつて言つたら、レックス、笑うかな。」

レックスは、ドキリとする。シェラは、

「ふつう、頭がおかしくなつたつて思うわよね。でも、本当よ。兄様の気配を感じるの。あんな死に方なさつたから、行くとこ行けなくて、私にとりついたのかな。」

「兄様つて、どつちのだ。」

レックスは、ドキドキしていた。ライアス兄様、シェラは小さく

こたえた。

「ライアス兄様は大好きよ。亡くなられたとき、何日も泣いたわ。でも、思い出だけにしてほしかった。バテントスも怖いけど、兄様の亡靈も怖いの。」

「べ、べつにいいじゃないか。シホラの大事な兄さんなんだろ。なら、悪さんてしなさ。きっと、シホラ、守てんだよ。」

シホラは、首をふった。

「レックス、小さじく、お母さん亡くしたんだよね。そのお母さんが、いまだにレックスにとりついてたらどう思うかな。死にきれなくて、自分の肉親にずっとまとわりついたら。」

「せりや、いやだよ、正直。でも、シホラの兄さんなら大丈夫だよ。シホラ、困りすよつた事はしないはずだ。」

シホラは、レックスを見つめた。

「どうしてそんなに、兄様をかばうの。まるで知ってる人みたい。」

レックスは、言葉につまってしまつ。どういたえても、ボロが出来る。

「お、おれ、なんか飲み物もつてくれる。寒くなつたし、あつたかいの飲もう。」

と言ひ、とりあえずこの場を逃げた。シホラは、疑問に思つた。

台所へと向かったレックスは、使用人の奥さんに飲み物を用意してもらいつつ、必死でドキマギしている感情をしづめていた。

（やばい。もう、ほとんど、ばれてるじゃないか。ベルセアきてから、あいつ、一回も顔ださないのは、そのためか。このままグラセントが帰ってきて、イクソシズムになつたら、あいつ、追い出されてしまう。何か、何か、いい手はないのか。いつそのこと、おれが、あいつの靈をひきとるか。いや、それもおなじだ。グラセンにかかつたら、イクソシズムだしな。）

レックスは、あれ？と思つた。

（なんで、おれ、あいつの事、かばつてんだ。ウザイと感じていたのに。いや、かばわなきや。あいつがいなくなつたら、めちゃくちゃ困るのは、おれじゃないか！）

レックスに逃げ場はない。シエラとの結婚はともかく、グラセンが帰つてきたら、すぐにでもマーレル・レイ、とくるだろ？。今の自分では、とてもじやないが王様は無理だ。

（ライアスがいてくれて、アドバイスしてくれたら、こんなおれでも王様やれる自信がある。とにかく、イクソシズムだけはだめだ。なんとかしなくちゃ。）

使用者が、飲み物をレックスにわたそうとしたら、レックスは台所から消えていた。レックスは、グラセンの屋敷にきてから寝てばかりいるマーブルをたたきおこす。

マーブルは今朝、久しぶりにフロに入つたので、体からい香りがただよっていた。あまりの汚さに悲鳴をあげた使用者が、町の共

同浴場へおひはらつた成果である。

「なんだよ、そんな事で起こしにきたのか。まあ、いずれ、ばれちまつ事さ。あわてるところを見ると、お前、ライアスに惚れたのか。」

「冗談言つてゐる場合かよ。あんたも、ライアスなら安心するつて言つてたじやないか。おれ、あいつがいてくれたら、王様だつてできそつな氣がしてんだ。困るんだよ、イクソシズムされぢやあ。」

マーブルは、レックスのひたいを指ではじいた。

「お前、何、なさけないこと言つてんだ。あいつかわらはず、人にたよる事しか考えないやつだな。これじゃあ、シエラとの結婚は無理だな。」

「そんな事言つたつて、バテントスをどうしていいか分からぬ。とにかく、ライアスがいてくれなきゃダメなんだよ。おれ一人じゃ、とてもじやないが無理だ。」

マーブルは、息子の顔をじっと見つめた。

「やつと、怖氣おじけづいたか。いままで反抗ばかりしてたものな。バテントスになんども襲われて、やつと田たがさめたんだな。そう、それでいいんだよ。王になる事に怖氣づいたんじやなくて、自分の無力さに怖氣づいたんなら、お前もやつと大人になつてきたつて証拠だ。ライアスの事は、おれからグラセンに話してみる。シエラには、あまり気にするなどでも言つておけ。」

「わるい、たのむ。」

レックスは、寝室を出て行こうとした。マーブルは、

「お前、ライアスをビリ思つてゐる。ただ、必要なだけか。」

「よく分からぬ。けど、体の一部みたいに思えるときがある。なんていふかな、昔つから、あいつはおれのそばにいた、そんな感じかな。」

レックスは、マーブルの寝室から出た。窓から外を見る。じんわりとくもった空から、ポツポツとつめたい雨がおちてきてい。

(恋愛とか友情とか、そんな感情とはちがう。なんだらう、この思いは。ただ、はなれたくない。失いたくない。そばにいてほしい。リクセンから、たいして時間がたつてはいないので、もう何十年もいっしょにいるような気がしている。)

レックスは、シエラの部屋へ、さきほどの飲み物をもつていった。そして、つとめて明るくふるまい、ライアスに話題がおよばないよう、気をつかっていた。

だがそれは、シエラの疑惑を深めるばかりだった。

翌日、マリンドはシエラを、国教会の総本山にある大聖堂へとさそつた。いつもは、旅行客やら巡礼やらでにぎわっている大聖堂も、昨日からシトシトとふる雨のせいで、ガランとしている。

シエラは始めて見た壮大な大聖堂に心を奪われていた。とくに天井画がすごい。マリンドは、

「いついう日でもなければ、ゆっくりする事はできませんわ。いつもは、押すな押すなの、すごい人だかりですからね。」

「きれい。エイシア創造の話を題材にした天井画だわ。天の神ダリウスが光と風をあたえ、女神ベルセアが地をつくり、そこに人を満たした。人は、天と地のめぐみにより大地に栄え、国をつくり、創生の神ダリウスとベルセアをたたえるために、ベルセアがつくりし大地に国教会をつくり、そこに一人の神をまつった。

いつたい、だれがこの物語を画にしたのかしら。物語がそのまま再現されている。たとえ、物語を知らなくても、画をながめるだけで分かってしまう。すごいわ。」

シェラは、天井画を順に見続け、最後にダリウス王家の始祖ミコティカの真下にきた。

「翼のある白馬にのり、黄金の髪と空の瞳をもつダリウスの娘ミコティカ。ベルセアより与えられし神の剣を持ち、双頭の白竜をしもべとし、エイシアを解放せん。レックスの御先祖様ね。」

ミランダは、びっくりした。シェラは、

「「めんなさい。分かってた。一目でね。」

「じゃあなぜ、剣をわたさないのですか。」

シェラは、うつむいた。

「グラセン様は、王子様をさがせとおつしやったのよ。レックスは、私の大切な人だけど、グラセン様のおつしやる王子様ではないわ。」

ミランダは、いつもこてにいるシエラを見つめた。グラセンがシエラを選ぶわけだ。ミランダは、シエラを聖堂のわきにならべてあるイスへと連れていく。

「シエラ様、あせる必要はないと思いますよ。グラセン様も、シエラ様のお気持ちをお喜びになられると思います。」

「私、レックスが大好きなの。だれよりも好きなの。レックスだけなのよ。だからまだ、剣はわたせないの。」

「お祈りしましょ。レックスが一日も早く、王子様になれますよううこと。」

シエラは、小さくうなづいた。

そのころ、レックスはグラセンの書斎にいた。書棚から本をひっぱりだし、眉間にしわをよせている。レックスが本を読んでいるときいたマーブルは、めずらしい事もあるんだな、と書斎へとやってきた。

「読めない字が多くあるよ。おれって、こんなに無学だったのかよ。」

「勉強しなきゃならんときに逃げ回つたからな。どこが読めないんだ。」

レックスは、マーブルに教えてもらしながら、本を読んでいた。これは、ハイシアの歴史書の冒頭の部分である。

「ほら、あの剣、あの剣の事を、もう少し知りうと思つてさ。あれ、魔法みたいな事できるだろ。けど、剣については、神剣としか書いてないんだな。」

マーブルは、頭をかいた。

「あの剣が、ああいうモンだつたなんて、王家ではだれも知らなかつたはずだ。儀式でしか使わなかつたしな。本物の伝説の剣がどうかも分からんかつたしな。」

「グラセンは、どうして気がついたんだ？」

「いじくつてゐるうちに分かつたんだろう。好奇心が強いからな。」

「ライアスは、これは自分の剣だつて言つてたよ。」

「ライアスも王家人間だからな。自分の剣になるはずだつた、といふ意味じやなかつたのか。」

「おれもそつだと思つたけど、少し意味がちがうよつた気がするんだ。ライアスは、自在に剣を使ってた。グラセンが使うのとはちがう。本当に自在なんだよ。まるで、最初から、この剣の事が分かつてたみたいにさ。荷物の中にしまつても、いつのまにか手にもつてるしさ。おれ、なんども見たんだよ。あいつの手に、剣が現れたり消えたりするのをや。」

「そのおかげでたすかつたんだ。なんせ、本物の神剣なんだしさ。」

「神剣で片付けるな。あの剣は、ライアスの分身なんだよ。あいつ、剣を大事にしていたし。」

レックスは、本を書棚にもどした。マーブルは、

「お前、何を言いたんだ。王は、ライアスの方が似合つとも？」

「国教会の教えに転生があるよな。ミコティカは、ダリウスとベルセアと違つて、伝説になつてゐるとはいえ、一応、おれの御先祖になつてゐる。」

「それがどうした。」

レックスは、少し考えた。嘗つか、言わないか、迷つてゐるみたいだつた。

「おれの推測なんだけどもな。ライアスがそつじやないかと、ライアスはミコティカの転生なんじやないかと。せつま、本を読んでいて、そんな気がしたんだ。」

マーブルは、あきれた。

「それだつたら、ライアスはクリストンなんかじやなく、ダリウス王家に産まれていたはずだ。なーにを言ひ出すかと思えば、くだらん。」

「いや、まちがいないと思つ。ライアスがミコティカなら、グラセンも納得してくれるんじやないか。」

マーブルは、今度はため息。

「寝言をこつのも、たいがいにしる。例えそだとしても、ライア

スはライアスだ。過去、だれであつたかなんて関係ない。それもう、死んでいるんだよ。」

レックスは、立ち上がつた。

「シエラはどこにいったんだ。屋敷に、いないけど。」

「ミランダと大聖堂だよ。外出嫌いのシエラは、大聖堂なら行くと言つたからな。今日は雨でガランとしているから、おちついて見学でもお祈りでもできるだろ。」

レックスは、書斎を出ようとした。どこに行くとのマーブルに、レックスは、

「ライアスと話がしたい。おれの考えが正しいか、問いただしてみる。あいつ、きっと、自分がそつだと分かってるはずだ。」

レックスは、マーブルが止めるのもかまわず、雨の中、屋敷をとびだした。

レックスは、雨よけ用のマントの下に、王家の剣をかくしもつていた。そして、聖堂に、しづくをたらしつつ入ると同時に、かくしもつていた剣が強い光をはなつ。いきなり人が消え、レックスは一人だけ、ポツンと聖堂の中にたつっていた。

「気がついたんだね、ぼくの事を。」

金髪で青い目をした青年が、そこにいた。この時代にしてはめずらしいほど、髪をみじかく切つており、白い首筋がはつきりと見えている。男性とも女性ともつかない非常に美しい顔立ちをしており、

体全体がオーラのような光で満たされていた。

レックスは、青年を見つめた。青年は、

「グラセンのイクソシズム程度では、ぼくを追い払う事はできない。力の差が、はつきりしているからね。問題なのはシエラだ。彼女に拒絶されたら、ぼくは、いられない。」

「なら、おれが引き受けるよ。」

ライアスは、首をふった。

「シエラは、ぼくの命だ。ぼくは、彼女の意思には逆らえない。君に移ったとしても同じだ。」

「おれが無力だからか。今のおれでは、お前を守りきれないからか。」

「天空の神も、人間として生をえれば、ただの人だ。ぼくが、だれか分かると同時に、自分の事も分かつたはずだ。ぼくと君は、魂がつながっているから。」

「ずっと、こっしょにいるって約束だったんだる。たとえ、命がおわったとしても、おれはお前をはなすつもりはない。」

「ミコティカは、ダリウスの子であると同時に、ベルセアの子でもあるんだよ。一人の思いが同じでなければ、ぼくはここにいることできない。」

レックスは、持っていた剣をライアスにさしだす。

「お前のものだ。」

ライアスは、受け取らなかつた。レックスは、

「シエラは何も知らないんだ。おれが今日、分かつた事を話しても、まずは信じない。マーブルにお前の事を少し話しただけでも、バカにされておしまいだつた。今のおれでは、それもしかたないさ。

「たぐ、今まで何やつてたんだろうな。ワガママばかりで、マーブル困らせてさ。ライアス、命令だ。どこにも行くな。この剣を持ち、おれの助けとなつてくれ。」

「生きて、肉体をもつていたら、それもできたさ。シエラの体に仮住まいをして、君のもとへとたどりついたけど、そろそろ限界かな。やはり、幽靈は幽靈でしかないんだよ。だれかの体を借りなきや、なんにもできやしない。」

ライアスは、さびしげにほほえんだ。

「レックス、君とこうして、昔の姿で話ができるだけでも、ぼくは幸せだつた。シエラを大切にしてくれよ。その剣は、これからは君が使うんだ。君の眠つている力を引き出すよ。」

ライアスの白い指が、レックスのひたいをそつとつづいた。レックスのなかで、何かがパリンと音を立てて割れたような気がした。とたん、はげしい頭痛におそわれ、その場にうずくまつてしまつ。

気がついたら、聖堂の扉の前でうずくまつっていた。祭壇の前に、シエラとミランダがいる。頭痛は消えていた。レックスは、二人に

声をかけずに、また雨の中へともどつていく。

その夜、レックスは眠る事ができなかつた。不思議な感覚。そして、知る前と知つた後で、まったくちがつてしまつた自分。レックスは、寝たまま、そばにおいてあつた剣を手にとつた。

剣は、闇のなかで、かすかに光つてゐる。以前は、この光は見えなかつた。レックスは、剣に熱くなれと呂じ、すぐに冷たくなれと呂じた。剣は瞬間的に熱くなり、すぐに氷のように冷たくなり、もとにもどつた。

レックスは、ひたいに手をあてた。

（聖堂から出てきてから、感覚が妙にするどくなつた感じがする。するどい？ いや、今まで見えない感じない、人間の五感ではとらえられない、何かを感じはじめているんだ。剣が、反応したのもそのせいか。）

そう言えれば、聖堂で、ライアスが、眠つてゐる力がどうのこうの言つてた。眠つてゐる力、靈能力を意味してゐるのだろうか。レックスは、ベッドから起きた。じつと剣を見つめる。

（やるしかない。ライアスをとりもどすには、そうするしかない。おれがもつと実力をつければ、周囲の田もかわる。シエラだつて、納得するはずだ。）

五、ベルセアの出来事（2）

それから、四日ばかり過ぎた日の夕方、グラセンがやっと帰ってきた。シホラとミランダは、今日も聖堂に出かけて、まだ帰つてはいなかつたので、グラセンは、マーブルとレックスを書齋に呼び、先に話をした。

グラセンは、ゼルムの将軍の計らいで、ゼルム領主に会つてきたと云つ。

「領主様と会う約束は、わりと早く取り付ける事ができたんです。ですが、なかなか会う事ができなくて、いままで長引いてしまいました。

ゼルムは、私達がくる直前に、バテントスから条約を結ばないかと持ちかけられていたようです。条約を結び交易してほしいとね。その対策に追われていて、私との面会が遅れてしまったのですよ。」

「ゼルムがバテントスと条約だつて、そりゃどうこうじだ。」

「バテントスも武力だけでは征服しないと言つた事です。クリストンを占領して条約を持ち出し、ゼルムに脅しをかけたんです。今の領主様は、経費削減とかで軍の縮小をかけてましたからね。なめられても仕方が無い事ですよ。」

「で、条約はビリしたんだ。やめるよつたんだよな。」

「あの通行証を見せ、領主様に軍に対する考え方を改めるよつ進言しただけです。法王ならともかく、私の身分ではね。ほら、あなた方

が巻き込まれた火事。あれがバテントスがらみだと調べがついたようで、ゼルム上層部は大騒ぎになつていましたよ。」

マーブルは、頭をガリガリかいた。

「クソ、なんてこつた。けど、火事は、バテントスがらみだけで、調べは終わつているんだよな。おれ達の事は、ばれてないんだよな。」

「あなた方の遺体は出なかつたですからね。出てたら、シエラ様の御遺体でも突きつけて、逃亡にゼルムは手をかして、いたとかナンクセをつけ、今ごろ、条約を結ばせていますよ。いろんな意味で、あなた方はバテントスに利用されたのです。例え失敗したとはい、領主様のお膝元おきた事件ですからね。」

マーブルは、ため息をついた。

「ひょつとして、ナルセラの前で橋が流されていたのは、おれ達のナルセラ入りをおくらせるためだつたのか。そのあいだに、ゼルムに小細工をするために。」

グラセンは、うなづく。

「今、ゼルムは、バテントスにゆさぶりをかけられているんです。あの手この手でね。そうやって、精神的にも追いつめていき、最後は隸属させようとしているんです。実にいやなやり方ですよ。」

マーブルは、そうかと言つた。レックスは、

「グラセン、バテントスは条約を結んでも、ゼルムにやつてくるは

ずだ。軍で脅して、条約を盾にとつて、クリストンみたいに占領するためにな。戦争無しでゼルムを占領するかどうかの違いだけじゃない。今は冬で、バテントスの動きもとまってるが、春になれば、きっとそうする。」のままじゃあ、ほんとに島丸¹とやられちまうぞ。」

マーブルとグラセンは、レックスの顔を見つめた。

「なんだよ。おれの顔になんかついてんのかよ。」

マーブルは、

「いや、熱でもあるかと思つてな。」

「おれが、まともな話すんの、そんなに変かよ。」²見えたつて、いろいろと考へてんだよ。」

グラセンは、笑う。

「アレクス様のお考へと、私の考へは同じです。クリストンには、ゼルムのそばに、中州の城という、その名のとおり三の真ん中にある城塞があります。そこを起点にゼルムを襲ははずです。

ダリウスは、クリストンと山脈でへだてられているので、攻略はあとになるでしょう。カイルは海軍を少しあつてゐるだけで、ゼルムが終われば、何もしなくても手に入ると、バテントスは考へてるはずです。

あとは、ダリウスに軍を進めて、偽シエラ様を王にしろと言えば、完了というわけですね。」

レックスは、

「ダリウスは軍もつてんだる。抵抗しないのかよ。」

マーブルは、手をふつた。

「もつてもカスだよ。ドーリア公のとき、あつさつ負けちまつたもんな。王の軍隊だ、官軍だと栄光に、あぐらをかいしているだけの軍なんだよ。」

「アレクス様。バントスは相手をよく調べてあります。ナルセラといい、その国のツボについて戦いをいどんでくるのです。クリストンが真つ先にねらわれたのは、そのためでしょう。」

どうしてとたずねるレックスに、マーブルは、

「クリストンは、ライアスの代になつても、三國とは完全にもどには、もどらなかつたんだよ。ライアスが、親父の不祥事の尻ぬぐいにあちこち行つたが、かんじんの王がいなけりや話にならん。孤立していく、攻めても、どこも助けにこないとバントスは見抜いた。事実、そのとおりだつたしな。」

レックスは、ひざの上にじぶしをさわぎつた。グラセンは、立ち上がつた。

「そろそろ、夕食にしましょ。残りの話は、シホラ様もまじえて、夕食のあとでお話します。」

レックスは、

「おれ、ちゅうと部屋に行つてく。メシ、先に食つてくれよ。」

「お前、腹はすいてないのか。」JのJの、何かあると部屋にいるな。

「

「なんでもないよ。シホラはまだ、聖堂から帰つてきてないんだろ。シホラを待つてゐただ。」

部屋へもどつたレックスは、ベッドにすわり、剣をもつた。意識を集中させる。中州の城、中州の城。ぼんやりとだが、雪にまみれた川中の城が見えてきた。

Jの城は、長いあいだ使われてはいない。だが、秋口からバテントスが出入りをし、使える状態にまで回復していた。城では、バテントス兵がいそがしく動いている。ゼルムは、Jの状態を知つていいのだろうか。

気がつくと、目の前にグラセンがいた。こわい目で、レックスを見ている。

「アレックス様、様子がちがうと感じていましたが、いつのまにそのよみなお力を。」

レックスは、苦笑した。

「やつぱつ、すぐJに気がつくんだな。あいつが、いなくなるわけだ。」

「

「あいつとは?」

「あんた、シエラを驚かせたくないくて、ずっと気がつかないふりをしてたんだろ。安心しろ、もうこくなくなつた。さがしても見つけられない。」

「やはり、ライアス様でしたか。あなたの力を解放させたのですね。

「どうやつて、おれ達の事を知つたんだ。シエラをおれの嫁に選んだのは、そのためだらう。」

「そこまで、お分かりになられるとはね。ライアス様が、そばにおられたので、覚醒が早まられたようですね。」

レックスは、真顔になった。

「おれは、おれでしかないんだよ。無学で字もまんざくに読めない書けないな。だから、お袋を女王にしたんだな。」

「そのとおりです。私もライアス様と同じなんですよ。結果として、同じような役目をしているのです。使命といったらよいでしょう。私は、国教会の秘密に通じておりましてね。ある意味、法王よりも、わざわざまな事を知つているのです。

その中に、神の転生の予言がございまして、その予言の時期が、今と一致している事に気がついたのです。それで、わざわざまな秘儀を試した結果、わかつたのです。

ですが、その時は、ドーリア公とあなた様のお母上が、王位継承でもめている最中でしたので、冷や汗をかいたのも事実です。もう

少しおそければ、あなたを王とする事など不可能だったはずです。」

「お袋は、劣勢だったはずだ。ドーリア公で決まりかけたのに、ひっくり返すのに、法王まで動かしたんだる。いくら高位僧侶とはいえ、枢機卿でもないあんたが、よく法王を動かせたな。何をしたんだ。」

「ですから、使命と申し上げたのです。ダリウス王家始祖である、ミコティカ様よりも、あなた様のほうが上なのです。」

「ライアスヒシトラも、同じようにして気がついのか。」

「予言では、神が転生されるとあるだけで、どの神かまではわかりませんでした。それで、片端からさぐったのです。でもまさか、主神三体とは、考えもしませんでした。ライアス様が、お亡くなりになられたのは、まさに悲劇としか言いようがありません。」

「ああ、悲劇だな。だったら、あいつを認めていいんだよな。たとえ、幽霊でもな。」

グラセンは、皿をつぶつた。

「死者は、やはりこの世にかかわってはいけません。この世は、生きている人間の手でつくられなければならないのです。ましてや、他人の体をかりて行動するなど論外です。」

「だが、そのおかげで、おれ達は助かったんだ。」

「シエラ様に、一番負担がかかります。シエラ様のお気持ちを考えてくれださい。」

「おれにとつては、ライアスは死人だろうがなんだろうが、大事なモンだ。シエラがいやなら、おれが引き受ける。」

「ならなぜ、去られたのですか。やはり、死者としての負い目を感じていたのでしょうか。」

「あいつは、かならずもどつてくる。あいつは、おれの子供だ。子供は親のそばにいるモンなんだよ。」

「魂の縁ですか。まさに神話のとおりですな。現実世界でも、このよつな事が起きるとはね。」

「おれが分かつたのは、あいつとシエラの関係だけだ。昔、何がかつたかなんて、分かつたわけじゃない。とにかく、もどつてきたとしても、あいつには手を出すな。おれが言いたいのは、それだけだ。」

「

グラセンは、ため息をつく。

「マーブルによく似てますよ、あなた様は。子供を守らうとするところがね。これから、どうなさるおつもりですか。」

レックスは、剣をかるくふりまわした。

「ゼルムの事情は、だいたいわかつたよ。カイルはどうかな。まだ、春までには時間がある。それまでに、もう少し詳しく、この島の状態を知りたい。」

「そのあとは。」

「

「シエラと結婚して、クリストンへ行こうかな。どのみち、なんかしなきやならない。ライアスがいてくれたなら、かなり助かつたがな。グラセン、クリストン行くには、ゼルムにもどつたほうがいいか？」

「おすすめできません。中州の城がありますからな。軍も春にむけて、集結しているはずですよ。道はけわしいですが、ダリウスからはどうですか。ですが、そのあとは、どうなさるおつもりですか。シエラ様とお一人では、何もできますまい。」

レックスは、グラセンは自分をためしているな、と感じた。事実、どうしていいか分からぬ。ここは、すなおに知恵をかりよ。

「あなたの考えを教えてくれないか。もうすでに、なんらかの手はうつてあるんだろ。」

グラセンは、ほほえんだ。

「シエラ様の叔父上、サイモン様に連絡をとつてあります。サイモン様をたよられてはよろしいかと存じます。お手紙を書かれてはいかがですか。」

「その手があつたな。けど、手紙書いつにせも、おれ、字がな。おれの手紙だとは、信じてもうえないだうつな。」

「シエラ様に出してもうえばよこのですよ。」

レックスは、首をふつた。

「シホラは、あんたにあづけておくよ。危険にはさらしたくない。シホラはもう、じゅうぶん苦しんだ。それと、さつきおれが話した内容は、とうぶんのあいだ、マーブルには言つなよ。おれが、剣を使える事もだ。」

「私からは、マーブルに話す事など何もありません。廊下がさわがしいですから、シホラ様がおもどりになられたようです。食堂にまいりましょう。」

レックスは、剣をベッドにおいていた。レックスと入れ違いに部屋へと入ってきたミランダは、グラセンにあいさつをすませたあと、シエラがレックスの正体に気がついていることをつげる。

「今日は、驚く事ばかりですな。ひさかたぶりに、お一人の顔を見たと思つたら、こうですかな。シホラ様が、自ら剣をわたすまで待ちましょ。そのほうがよろしいはずです。」

「レックスと話していたようですが、何を話されていたのです。」

「お前もいろいろと気がかりでしょうが、今は見守つていてあげなさい。お一人とも、大人になろうともがいでいるようですからね。」

グラセンは、少しあびしげにほほえんでいた。

一行は、グラセンと相談した結果、カイルへ行くことにした。グラセンがカイルの領主と直接会い、カイルが今後どうするか、考えをきくためだ。

レックスは、シエラをベルセアに置いてこいつとしたが、シエラはレックスとはなれなかつたので、びりしておついていくと言ひ張り、バテントスに見つからなによつ、変装するとの条件で連れて行くことにした。

シエラは、髪を切つた。フワフワとしたやさしい栗色の髪を、バツサリと首筋で切つてしまつたのである。そして、男の子に変装した。

ずいぶん、思い切つた事をしたものである。シエラは、

「私だつて、いつまでも子供じゃないわ。逃げ回つて、おびえるのも、もうたくさん。クリストンのシエラとして、少しでも何かできるのなら、なんだつてやります。」

レックスと、はなれたくない一心からでた言葉ではあつたが、その場にいた者達を感服させるにはじゅづぶんだつた。

シエラは、レックスの変化に気がついていた。何が、レックスに起つたのか分からぬ。けど、このままでは、自分はおいていかれる。

こいつのこと劍をわたそつか、とまだ思つてゐたが、シエラはやめることにした。今、わたしたら、自分のあせりを知られてしまつ。

シエラは、馬車の中で、わむくなつた首筋にフカフカのマフラーをまいていた。レックスは、シエラのみじかい髪をみて、髪と皿の色こそちがうけど、ライアスにそつくりだと感じていた。

六、マトリカの罪（一）

カイルの首都、マテラ市にやってきた翌日、グラセンはレックスだけをつれ、朝早くマテラ宮殿へと出かけた。カイル領主セシルに、法王の内々の御用のための使者という名目で会いに行つたのである。グラセンとレックスが行つたあと、かなり遅く起きたマーブルは、すぐにどこかへ消えてしまい、宿で退屈を持てあましていたシエラは、ミランダとともに町を散歩する事にした。

マテラはこの時期、よく晴天が続く。気候的にも島の最南端に位置しているせいで暖かく、冬だというのにコートもマントもいらぬ。雪もめったにふらず、クリストンの雪にどうもれた冬しか知らないシエラにとり、ここは別天地のようだつた。

ぼんやり道を歩いていると、馬に乗つた少年がよつてきて、シエラをジロジロ見たあと、声をかけてきた。

「あんた、ねーちゃんか、にーちゃんか？　どうしてしたって美形だね。」

髪をみじかくし、少年のかつこうをしているとはいえ、シエラは美少女でめだつ。すれちがう人がみな、男か女か、興味をしめしていたようだつたので、それで声をかけられたのだろう。

「どう見ても、ねーちゃんだな。男装の令嬢かよ。こりゃいいね。あんた、なんて名だ。」

十四か五か。シエラより年下なのは確かだ。シエラは無視した。

「まじょ。無視するこたあねえだる。あんた、旅行者だな。どつからきたんだ。」

「ハンドは、

「しつこいわね。ナンパだつたら、別の子に声をかけなさい。」

「おお、こわ。威勢のいい女だな。おれ、威勢のいい女はきらいじゃないけど、あんた、年上すぎるよな。栗色の女の子の名前、教えてくれよ。」

シーラは、ひざつたそつに少年を見た。

「シーラよ。教えたから、どつか消えてよね。」

シーラは機嫌が悪い。このこののレックスは、何かにとつつかれたように、剣ばかりいじくつている。声をかけても生返事ばかりで、自分には以前ほど関心をはらつてはくれない。

少年は、うれしそうに笑つた。

「シーラか。こいつだな。おれ、ロイドつてんだ。ロイド・ゼスター。」

シーラは苦笑した。ゼスターと言つたら、領主の名前ではないか。

「おれ、あんたをむかえにきたんだよ。グラセンとかいう坊さんこたのまれてさ。知らないとは言わせないぞ。宿いつたら、だれもいなかつたもんな。これでも、けつこいつさがしたんだぜ。その機嫌の

悪そうな顔、なおせよ。せつかくの美人がだいなしだぜ。」

シエラは、

「ロイド・ゼスターなんて、きいたことないわよ。ijiの領主様のセシル・ゼスター様なら知ってるけどね。」

ロイドは、

「カイルの領主セシルには、十歳年下の弟がいるんだ。マーレル・レイの寄宿学校に去年までいたんだよ。バテンツのせいいで、たのしい寄宿生活もおわっちまつたんだがな。まあ、次男坊の名前なんて、知らなくてどうぜんか。」

シエラは、カイルの領主に弟がいたなんて知らなかつた。国をつげない次男坊なんて、長男が死ぬまで表にでないから、知らなくて当然である。シエラのもう一人の兄シゼレも似たようなものだつた。

「あなたの事は、セシル兄さんからきいてるよ。昔、兄さんと婚約してたんだる。ドーリア公が、あんな事したばっかりに破談になつちまつたけどさ。」

「たしかに、そんな時期もあつたわね。でも、私が三歳くらいのころよ。婚約してたのは、一年かそこらだつたはずよ。私も大きくなるまで知らなかつたわ。」

「あなた、フリーだる。あのデカイ金髪とは、なんの関係もないんだよな。」

シエラは、ロイドから視線をそらした。ロイドは、

「ジーサンのボディーガード兼使用人だときいたけど、なんせ、見た目が見た目だろ。富殿の女どもがさわいでたしさ。身分なんか、カンケイないつて事になつてないかなー、なーんて心配してたんだ。」

ミランダは、

「言いたい事があつたら、言いなさい。あんた、男のくせに、まどろっこしそぎるわ。」

「黒髪の姉ちゃんはだまつてな。おれは、シエラと話してんだ。」

シエラは、足をとめた。

「恋人よ。でも今は、そつでもないみたい。髪をぱつぱつ切っちゃつたせいかもしないしね。これで、御満足かしら。」

「じゃあ、おれと婚約しようよ。あんたなら大歓迎だ。男装してんの気に入つたし、その気の強いとこもいい。どんな女が興味あつたんで、使用人にまかせず、あんたをむかえにきたんだけど、会つて正解だつたと言つ訳だ。」

シエラとミランダは、あきれた。シエラは、

「何を考えているのよ。私と婚約したつて、カイルにはメリットはないわ。バテントスの攻撃対象になるだけよ。」

「次男は國をつけないんだよ。おれは坊主になるのがいやで、マーレル・レイへ行つたんだ。兄貴は体が弱いから、今、補佐をやつて

るけど、どのみち一生冷や飯食いだ。クリストン行つて、一旗あげたいのや。」

「あなた、バカじやない。あのバテントス相手に、どひやつて戦うとこつの？ ライアス兄様でも負けたのよ。」

ロイドは、ムツとしたようだ。

「おれを、負け犬なんかといつしょにするなー。ライアスは負けたが、おれは負けない。絶対、バテントスをおっぱらつてやる。とにかく、四の五の言つてないで、富殿にきてくれよ。兄貴が、あんたに会いたがつてるんだよ。」

（ずいぶん、威勢がいい次男坊だと感じた。シエラは、レックヌもこのくらい、はつきりしてくれたらいいのにな、とつい思つてしまふ。

（レックヌ、私の事、もうなんとも思つてないのかな。ライアス兄様の気配が消えて、やつと安心したと思つたら、レックヌが、あんなつちやうんだものね。兄様の靈は、レックヌにとりついたんじやないかと思つて、グラセン様に相談したんだけど違うと言われだし、本当にどうしたんだりつ。）

シエラは、ロイドに連れられて、マテラ富殿へとやつてきた。南国の町にふさわしい、あでやかな富殿である。富殿についてすぐにロイドはいなくなつてしまい、出迎えた使用人の案内で、シエラはセシルの執務室に連れて行かれた。

ミランダが案内された客室には、レックヌがいた。あいかわらず、剣をいじくつてゐる。ミランダは、ため息をついた。

「あんた、ライアス様が自在に使つてんの見て、自分でなんとかすれば使えると考えてるの。無理よ。あんた、そういう能力持つてないじやない。」

レックスは、顔をあげた。

「ライアスのやり方見てて、マネでもすれば、なんとかなると思つてさ。ところで、ミランダ、町で、あやしいやつらを見かけなかつたか。なんか、気になる動きをする連中を見つけたから。」

「どんな連中なの？ 私が歩いてきたあたりには、そんな人はいなかつたわ。」

「町の人間と区別がつかないよ。けど、何かをさがしてゐみたいで、目抜き通りとかウロウロしていた。ここへくるとちゅう、つけられてなかつたか。」

ミランダは、

「私の注意力にも限界があるわよ。素人の動きならともかく、諜報員ともなると、むずかしいわね。ところでなんで、そんな事がわかるのよ。」

レックスは、ギクリとする。

「い、いや。グラセンが、ここへくるとちゅう、だれかの気配を感じるとか言つてたからだよ。」

「あんた、その剣、使えるんじゃないの。いじくつてばかりいたの

は、そのせいなんでしょ。」

「だから、マネしてるだけだって。いつか、使えたらしいかなって、それだけだ。」

「マーブルも気づいているはずよ。剣を見つめるあなたの目つきが、ライアス様そっくりだしね。なら、下手なウソをつかないで正直に言いなさい。」

レックスは、フーと息をはいた。

「ちょっとだけだよ。ほんとこちよつとだけ。練習中と言つたらいいのかな。その程度。」

「どうせつい、剣、使えるようになつたの。能力なんて持つてなかつたはずよ。」

レックスは、苦笑した。

「眠つてただけだ。ライアスが、おれの能力を起こしてくれたんだよ。この剣を使つて言つてさ。」

「眠つてただけね。まあ、そことのこの解釈はいいわ。私では、よく分からぬし。使えるなら使えるにこした事ないわ。使えれば助かるしね。どうしたの、レックス。元気無いわね。剣が使えるようになつて、うれしいんじゃないの。」

レックスは、首をふつた。

「おれの中に、とんでもない力を感じるんだよ。この力が目覚めて

から、日に日に強くなつていくんだよ。制御できないのこそこそ。いつ、暴走するか怖くてたまらないんだ。シエラに知られるのも怖い。もし、おれがふつづじやないと知つたら、シエラはきっと、おれからはなれていく。」

「だから、あんなに必死になつてたのね。」

ミランダは、レックスから剣を取り上げた。

「しばらく私があずかつてるわ。あなたのとんでもない力も、この剣無じじゃ出す事できなのはずでしょ。少し、この剣からはなれなさい。シエラ様、あなたに相手されないんで、最近、機嫌悪いから。」

「シエラ、ライアスとよく似てるな。さすが、きょうだいだな。ライアスの姿は、聖堂で一度だけ見たんだよ。あれだけ似てれば、髪と田の色さえ変えれば見分けがつかないな。」

「でしょうね。私もそう思つてた。でも、シエラ様には、その事は口がさけても言わないでね。ライアス様の亡靈で、ずいぶんまつていたから。」

「お前、ライアスに会つたことあるのか。」

「ベルセアにいらしたときには。私も女だから、興味があつたのよ。遠くからだつたけども、今でもよく覚えているわ。」

「一田惚れしたんじやないか？」

レックスは笑う。ミランダは、

「あこがれたのは確かね。まさか、あの時あこがれの人と、しばらく旅するなんて、考へてもいなかつたわ。」

「ときめかなかつたか。」

「シエラ様の姿で声も同じ。中身は、たしかにライアス様だけど、女の子相手じゃ無理ね。さめた、といったほうがいいかもね。あこがれは、あこがれのまま、とつとおくのが一番かしら。」

「今、つきあつてゐる男はいるのか。」

「気になる男がいる事はいるわ。でも、ふりむいてはも“りえ”ないみたい。」

「//ランダほどの美人相手に何やつてんだよつて感じかな。お前の気になる男つて、ひょつとして、おれ?」

//ランダは、剣でレックスの頭を、かるく小突いた。

「十年早いわよ。冗談言つてゐるヒマがあつたら、シエラ様をだいじになさー。ロイド・ゼスター様つて知つてる?」

「あの生意気なガキか。シエラ、むかえに行つたんだ。おれんとこきて、シエラの特長とかじゅうじゅうきいてたよ。言つ草が、かなりムカついたがな。」

「シエラ様にプロポーズしてたわよ。クリストン行つて、一旗あげるやつよ。」

レックスは、びっくりした。

「シエラ、なんてこたえた？」

「気になるのだったり、シエラ様にきこたら？」

レックスは、そわそわはじめた。ミランダから剣を取り返そうとしたが、ひっこめられてしまつ。

「あんた、何かにたよるのもいい加減にしなさい。マーブルにたよつて、ライアス様によつて、今はこの剣なの？」

「わかったよ。そんなに怒る事ないじやないか。」

「私は、これから町に出て、あやしにせつらをかがしてみるわ。」

「ついでマーブルをたのむよ。東通りの三丁目あたりに、赤い看板の居酒屋があるんだ。そこで、酔いつぶれているみたいだからさ。」

「

「東通りの三丁目の赤い看板ね。マーブルの行動を監視するなんて、とてもよい心がけね。じゃあ、行くわね。」

「

ミランダは、剣を持ち、出て行つた。レックスは、何もする事がなくなつた。

(グラセンのやつが、おれが必要になるかもしれないとか言つから付いてきたけど、シエラがきた以上、出番はなさそつだな。もせぐるまで毎晩でもすつかな。)

「ヒマそうだな。だつたら、おれにひきあへよ。」

ロイドが、密室の扉でニヤニヤしてゐる。レックスは、露骨に嫌な顔をした。

ロイドは、

「機嫌悪そうだな。おれが、シエラにプロポーズしたのが、そんなに気にいらないか。さつき、その事で兄貴にしぼられたよ。でも、あきらめたわけじゃないからな。」

レックスは、じりじりとこちらんだ。ロイドは、

「そんな顔するなよ。あんな美人、いつまでもほつとくほつが悪いんだ。それよりも、見せたいモンがあるんだよ。」

「見せたいモンじやなく、はつせり言え。でなきや、寝る。」

「もうすぐ正月だろ。レスリングの奉納試合があるんだよ。おれが今年、それを取り仕切るんだ。それに田舎、こい選手がいないかなーつて。」

「当然、お断り。おれは見世物じゃない。」

「ま、やつぱりと思つた。この富殿からも何人か出るんだ。今、富殿北にある武芸場で練習してるんだよ。あんた、強そうだし、どうせ兄貴の話は長引くし、ヒマなら選手達の相手になつて、遊んで欲しいんだよ。あんた、強そうだし。」

「長引くつてどれくらいいだ。」

「夜までかかるかもな。兄貴が、今夜は宮殿泊まつてけつてね。」

レックスは、ちょっと考えた。夜まで、こんな密室で退屈はいやだ。レックスは、ロイドのわざこじのことにした。

そこは、熱氣ムンムンだつた。いかにもムサシ男どもが、汗臭い汗をしたたらせ、練習にはげんどこる。ロイドが入つてくると手をとめ、いつせいに敬礼。

「練習じゃねえんだ。お密をんだよ。お前らと遊びたいつてね。」

選手達はレックスを見て、なんでこんな優男やせうぶが、とばかりの視線をなげつける。ロイドは、

「見た目で判断するなど、いつも言つてゐるだろ。おれの目に狂いはなければ、ここで一番の選手、おー、ファー、お前だ。レックスとか言つたな、ちなみにこの一番と一番の差は話にならんからな。ファーは、四年連続優勝をしてる。」

ひょろつと體の高たかい、一十代後半の男がやつてきた。ロイドは、

「レックス。お前の実力は、ここの一一番に匹敵するはずだ。つまり、互角の一一番じゃ、つまらんだらア。そんで、一番のファーと遊んでくれ。」

「おれ、レスリングなんてやつた事ないぜ。ルールも知らないし。それをいきなり一番かよ。」

「とつぐみあいのケンカだと教えてくれ。ルールは、相手をコテン

パンにやつつかむ」と。まあ、はじめー。」

「やつや、お前のルールじゃないか。わ、待て。まだ、準備が。」

六、マーブルの懲(2)

//ランダは、あやしいやつらをやがしていた。注意深く、あちこちさがしたつもりだったが、それらしい人物は見つからなかつた。

//ランダは、東通りの二丁目へとやつてきた。赤い看板は、すぐ見つかった。マーブルは、店のテーブルで大いびきをかいている。ミランダは、マーブルを叩き起こし、フラフラのマーブルを引っ張るよう、宿へと帰つてきた。

「つたく、朝からよく飲めるわね。ナルセラの事があつてから、たしかに夜遊びはしなくなつたけど、これじやあね。」

「じゃーじゃーわめくな。んだよ、いい夢見てたのによ。」

「どうせ、女の夢なんでしょ。酒と女しかない男だもんね、あんたは。」

マーブルは、フーと酒臭い息をはいた。

「おれが、なんの夢見よつが勝手だらつが。よく、おれがいる場所が分かつたな。」

「町中、かけずり回つてねばね。」

「なんか、見つかったか。」

//ランダは、首をふつた。

「今のところはね。けど、マテラに侵入してる仲間には、気をつけようつたえておいたわ。」

「レックスは、帰つてないようだな。シエラはびついた。」

「宮殿よ。グラセン様に呼ばれたの。たぶん、長くなると思つ。夜まで帰つてこなければ、宮殿に泊まるかもね。」

マーブルは、そうかと言つた。そして、

「なあ、//ランダ。お前、だれかとつきあつているのか。」

//ランダは、はあ？とこいつ顔をする。マーブルは、

「レックスは、もうすぐ、おれの手をはなれる。そしたら、おれの役目はおわる。その、もし、お前がかまわなかつたら、おれと所帯もたないか。ダリウスのクラサという田舎に、おれの土地があるんだ。信頼できる人間に管理をまかせてあるから、おれが行方不明のままで人手にわたる心配は無い。そこで暮らさないか。」

//ランダは、びっくりした。

「あんた、酔っぱらつて、変な事言わないでよ。びっくりしたじやない。」

「酔つた、いきおいじやなきや、こんな事言えるかよ。お前は、いい女だ。すこーしづかり気が強いがな。いい女だ。ずっとそう思つてた。もし、だれともつきあつてなかつたら、おれと結婚してくれないか。」

「こちなり、言われたって。」

「//ランダは、困ってしまった。マーブルは、

「やつぱり、四十五の男とはいやか。」

「いやとは言ひにならわよ。ただ、とつぜんすきで。」

マーブルは、//ランダの手をつかんだ。

「じゃ、いいんだな。とつぜんだけどいいんだな。」

「少し考えさせて。バテントスや、何や、ひでピコピコしててのこ、結婚なんて持ち出されても、どう返事していいのが分からないわ。でも、あんたはさきらいじゃない。いつか、ずっと気になつてた。」

マーブルは、//ランダをだきしめた。

「幸せにできるか分からぬ。おれはすでに一人の女を不幸にしている。けど、お前を大切にしたい。//ランダ、お前が好きだ。」

//ランダは、苦笑した。今日は、プロポーズ日和らしい。

夕方になり、シエラが密室にきたとき、レックスは、ボンボンになつた顔をタオルで冷やしていた。

「ど、どひしたの、その顔。」

「ロイドにさせられて、レスリング選手の相手をしたんだよ。こき

なり、一番と戦わされて、このザマだ。」

「負けちゃったの？」

「こりちは素人なんだぜ。ロイドのやつに一杯食わされたよ。あいつ、腹いせに、おれをレスリングをそつてボコつたんだ。くわしいから、富殿の従業員食堂で昼飯食つたあと、また行つて殴り合いしてきた。」

「お昼をやつにきて、いなかつたわけね。どこ行つたのかと心配してたのよ。セシル様がね、夕食どうかつて。ロイド君もいつしょするつて。」

レックスは、ため息をついた。

「また、ロイドかよ。おれ、あいつの顔は見たくないんだ。ガキじやなきや、一発ぶんなぐつてやるところだつた。自分じや、おれにかなわないから、一番選手をあててきたんだしな。」

シーラは、レックスからタオルをとり水でひやして、ふくれあがつた皿にあてた。

「ヤキモチよ。レックスがうらやましくて、しうがないのよ。私にとつて、やつぱり、あなたが一番かな。」

ほほえむシーラを見て、レックスは、ほんわりとした優しさにつまれてしまつ。

「シーラ、その髪、似合つてるぜ。お前、美人だから、なんでも似合つちまうんだな。」

「美人だから、なんでも似合ひはよけいかな。でも、うれしいな。変装すすめられて、自分でもやりすぎたと反省してたもの。髪を切る必要なんて、なかつたんじやないかって。」

「シエラはシエラだ。髪切つても男装しても、目の前には、おれの好きなシエラしかいない。ひさしひにキスしてほしいよ。」

「ほんな顔じやあ、ふんいきでないな。でもまあ、いいか。」

セシルは、やせた顔色の悪い男だった。また、二十分ばだというのに、十も歳をとつてるように見える。けど、性格はおだやかで、ただの使用者のレックスにも丁寧に接してくれた。

「すてきな青年ですね。」これでは、シエラ様もお心を奪われるという。私もかつて、使用者の女性に、身分違いの恋をした経験がありましてね、ずいぶん悩んだものです。結局は領主としての責任上、ベルセアから妻をもらいましたけどもね。」

「セシル様もそうだったのですか。そのお相手の女性は今は、お付き合いとかしてたのですか。」

セシルは、ほほえんだ。

「私は、自分の思いをかくしていましたから、その女性は私の思いなど知りません。私が結婚してまもなく、その女性も仕事をやめてしましましたからね。たぶん、結婚したはずです。なつかしい思い出ですよ。」

そうですか、シエラはつぶやくよつと。セシルは、

「シエラ様、今がチャンスですよ。彼とさつさと結婚してしまいたい。あなたが国に帰られたら自由はなくなります。私同様、領主という立場にしばられてしまします。けど、既成事実をつくったうえでの帰国ならば、どうしようもなくなります。私が証人になりますから、明日にでも宮殿の祈祷所で式をあげなさい。」

ちよつと待て、ロイドが口をはさんだ。

「待てよ。おれのプロポーズはどうなるんだよ。おれが、この金髪よりも先にしたんだぜ。いいつ、まだしてないはずだよ。」

レックスは、

「もうしてあるよ。ゼルムでだ。ごたごたしてたから、式をあげるひまがなかつたんだよ。」

ロイドは負けない。

「使用者のお前に、シエラの国がどりもどせるかよ。おれはな、マーレル・レイの学校で、いろいろと勉強してきたんだ。無学の使用者の男なんて、シエラの足手まといにならあ。」

セシルは、

「ロイド、失礼を言つてはなりません。身分は制度上、たしかにありますけど、人は大地の上に平等にたつていてるんです。太陽も風も身分をえらびません。国教会も、そう教えてるでしょう。彼にあやまりなさい。」

ロイドは、ダンと席をたたいて行ってしまった。セシルは、

「申し訳ございません。なにぶん、世間知らずの子供でして。両親が早くに亡くなり、病弱な私では、領主の仕事だけで精一杯で、あの子の親代わりはできず、大変、じりじり慢でワガママな少年に育つてしましました。」

グラセンは、

「いやいや、元気のよい弟御ですな。若い者は、あれくらいでなければなりません。学校での成績も優秀だったのでしょうか。自信が、お顔に満ちあふれております。彼は、羽をのばす場所をさがしているのではと思いますよ。」

と言い、ほがらかにほほえむ。セシルは、赤くなつた。

「まことに申し訳ございません。厳しく言いつけておきます。弟は、自分の我をおさえる事を知らなくてはなりません。」

シエラは、セシルがなぜここまで、レックスに氣を使うのか分からなかつた。セシルの身分違いの恋が、セシルの人間觀をつくつたのは分かる。けど、必要以上に、ただの使用者のレックスに氣を使う理由があるのだろうか。

レックスは、おもしろくもなさそうに目をつぶついていた。顔の腫れは、だいぶひいてきている。若くて体力が並以上にあるレックスは、体の代謝も活発で、怪我の治りも早い。

セシルは、

「ファーが、自分の顔にパンチを入れただけでも、たいしたものだと感心してましたよ。私もそう思います。」

レックスは、ファーってだれだと思ったが、すぐにあの一番だと分かった。

「ボッコボコにされたんだよ。リベンジしようとしたり戦つてくれなかつた。代わりに二番、三番とやりたけど、やりぱりファーをぶちのめさないと、気がおさまらない。領主様から命令してくれよ。明日、おれと戦うよつにゃ。」

セシルは、

「ファーは、私が命令しても、あなたとは戦いませんよ。彼は、自分に実力があよばない相手とは、いつさい戦わない主義なんです。たとえ、無理に戦わせたとしても、防御だけで何もしないはずです。」

「

「つまり、子供を相手にしてると同じことをつ事がよ。ロイドといい、なんかムカつくな。」

「ファーには、すぐにあなたの実力が分かったはずです。ですが、ロイドの気持ちも考えたんでしょう。ファーは、ロイドが幼いころより身辺の世話をしてくれますからね。彼は、ロイドの執事なんですよ。」

レックスは、ますますおもしろくなつた。グラセンは、

「ひたじぶりに汗をかいて、なまつた体をほぐしたのでしょうか。レ

ックス、もうそのくらいで、その不機嫌な顔をしまいなさい。負けてやしかつたのなら、実力をつけて、再度いどんだらよいだけです。セシル様に失礼ですぞ。」

セシルは、ほほえんだ。

「実にたのしいですよ。私は自分がこうですから、元気な人をみると、なんだがパワーをもらつた気分なるのです。今夜は、ぐっすり眠れそうです。」

セシルは、かるく咳きこんだ。

「失礼しました。そろそろ、おひらきこしましよう。長くなりましたが、みなさま、おつかれのはずです。今夜は、ゆっくりとお休みください。」

セシルは、そそくさと席をたつた。廊下から、はげしい咳きこみがきこえる。長い話は、セシルの体力ではかなりの重労働だ。

そして、翌日、朝早く、レックスはセシルに呼び出された。使用人にセシルの私室に案内してもらつ。青白い顔のセシルが、にこやかにむかえてくれた。

「よく、眠れましたか。本来ならば、私の方から、『あこせつに向かねばならないのですが、陛下。』

レックスは、広い室内にいくつあるイスに、てきとうにすわった。

「グラセンからきいたのか。タベのあんたの態度が気になつてたか

らな。陛下はやめてくれ。おれは今は、ただの使用人だ。」

「グラセン様は、カードは簡単には切りませんよ。陛下の事は、うかがつてはおりません。陛下は、おぼえておいでにならないみたいですね。ダリウスからいらした、あなた方親子を、数日ここでかくまっていたのです。私は、そのかん、あなた様のお相手をしていたのです。」

そして、御立派になられましたね、と付け加える。レックスは、

「だから、陛下はやめてくれって。耳の辺りがかゆいんだよ。それに、でかくなつたのは体だけだ。自信のあつた腕力も、プロの前では子供あつかいだつたしな。おまけに、字もまんぞくに書けない、読めないだし、王族としてのふるまいも知らない。」

「シエラ様のお力をかりればよいのです。読み書きなど、あとでいくらでも身につきます。王としてもふるまいも、シエラ様のたすけをかりれば、どうにでもなるでしょう。」

レックスは、ため息をついた。

「そうなるんだよな。結局、何から何までたよることになる。知り合いでの女から言われたよ。おれは、なんでもたよつてばかりだつて。」

「

「最初だけですよ。何も知らなければ、人にたよるしかありません。教えてもらったものを、自分のものにしてしまえばよいのです。そのうち、すべてを御自分の力で解決できるようになるでしょう。」

「シエラは、グラセンから王家の剣をあずかっている。王子を見つ

けて、わたせつてな。シーラ、おれに気がついてるはずだ。何ヵ月もいつしょにいるしな。けび、まだわたしてもらつてない。おれが、たよりないからだ。」

セシルは、

「わたしす機会を考えているだけかもしませんよ。わたしたら、シーラ様にも逃げ場はなくなりますからね。」

昨日、ずっと彼女と話をしていく、迷いがある事に気がついたのです。口では、責任とかどうとか言つてましたよ。けび、迷いがある。相手が、バテントスでは気がひけるのせ、私も同じです。

けび、領主は、それを表に出してはいけないです。シーラ様は、御自分が領主としてやつていけるか、最終的には王妃としての責任を背負えるか、自信が無いのでしょうか。」

「そりや、おれだつて同じだよ。でも、やらなきゃなんないんだ。自信が無くともな。」

「ですから、タベ、御結婚をすすめたのです。シーラ様に覚悟をしていただくためにです。やはり、王が必要なのです。エイシアをもう一度、一つにまとめるためには、やはりダリウスの正統なる宗主が必要なのです。」

やはり、ライアスがいてくれたら、レックスはギュウヒーピンしをひいた。

「おれは、シーラをバテントスとの戦いにまきこみたくない。あいつ、もうせんせんこやな思いをしてるからな。けび、やつぱつ、お

れ一人じゃ無理だ。身近にいて、たすけてくれる人がどうしても必要だ。おれ、シエラと結婚するよ。あなたに証人たのむ。」

「かしこまりました。で、式はいつ。」

「あんたとグラセンの話が終わってからでいい。そのあと、おれはシエラにきちんと求婚する。この話はロイドにないしょだぜ。あいつ、じゃましてくるかもしれないしな。」

セシルは、ホッとしたようにほほえんだ。

「ロイドには、用件をたくさん言いつけておきますよ。シエラ様には、私の方からもさりげなく御結婚をすすめてみます。そろそろ、相談役がやつてくる時刻です。あなた様は、退散したほうがよろしいでしょ?」

レックスは、セシルの部屋を出たとき、向こうから一人の僧侶がやつてくるのが見えた。

僧侶は、レックスとすれちがいざま、うさん臭そうにこちらみ、これはお前のような者がいてよい場所ではない早々に立ち去れ、とかなんとか言いながら、セシルの部屋へと入っていく。

レックスは、フンと鼻をならし昨日の武芸場へと向かつた。朝練が始まっているのだ。

六、マトリカの罷（3）

領主のセシルの午前はいそがしい。シエラとグラセンとの昨日の続きは、昼もだいぶすぎたころ、やっと始まった。昨日は、セシル一人だったが、今日はバースとかいう、いかにもえらそうな顔をしたベルセア国教会の坊さんが同席していた。

バースは、機嫌が悪かった。

「セシル様、このような重大なお話に、なぜ昨日、わたくしめをすぐさまお呼びにならなかつたのですか。教会の年中行事の儀式など、後回しでもよかつたのです。」

「とつぜんの来訪だつたのでな。大切な儀式の最中の前にお声をかけるのは、気がひけたのでな。」

バースは、目の前の少年のようなクリストン領主の娘をにらんだ。

「グラセン様、あなた様は、この娘が本物のシエラ姫だと信じておられるのですか。シエラ姫は、サラサにいるはずですよ。」

「バース殿。あなたは、私をおつたがいで。この方はまちがいなく、シエラ様です。」

「証拠はあるのですか。」

セシルは、

「そのお方は本物ですよ、バース。お兄上様のライアス公と瓜二つ

です。お前も、ライアス公を御存知でしょ？」「

「たしかに似てますな。けど、似ている者ならこくらでもあります。

」

シエラは、兄のライアスと似ている者なんているはずないとthought。シエラは、ライアスより美しい人間は男女問わず見た事がない。

「私は本物です。今は証明できませんが、私はクリストンのシエラです。バテンツに護送されそうになつた私を、グラセン様がたすけてくださいたのです。」

「話になりません。すぐにお帰りください。グラセン様、あなた様もです。これ以上、我が主を悩ませるなら、いくら高位僧侶のあなたでも、我が国の法に従つてもらいます。」

グラセンは、ため息をついた。

「シエラ様、帰りましょう。話す事は、昨日であらかた終わっています。セシル様がどうしても相談役の意見をききたいとおっしゃつたので、宮殿にやつかいになりましたが、もうその必要はないようです。」

シエラとグラセンは、席をたつた。セシルがあわてた。

「お待ちを。バース、謝罪なさい。シエラ様は、たしかに本物という証拠はないのですが、偽者という証拠もないのです。お前のほうで、それを用立てできるのなら、私はお前を信じます。ですが、できないと呟つのでしたら、いますぐ謝罪してください。」

グラセンとシホラは、バースを見つめた。バースは、

「グラセン様、あなた様がどういうお考へで、法王の名をかたり、カイルに接觸したのかはききません。ですが、カイルは、あなた方とは無関係です。お引取りを。」

一人は、セシルの書斎を出て行つた。セシルの手は、ブルブルふるえている。

「バース、お前はなんと言つ事をしてくれたのです。カイルを思えばこそ、私はシエラ様のたすけとなりなかつた。シエラ様の信頼をえて、彼女にこれから先の事を決意させれば、バテントス対策に手詰まり状態の現状に光がさすはずだつたのです。なのに、ゆいつの機会を、お前はつぶしてしまつた。」

バースは、

「申し訳ございません。私は、グラセン様は、このような大事に茶番を演じる方ではないと信じております。ですが、シエラ様はサラサにいるのです。もし、本物にかかわつたとなれば、カイルは本格的にバテントスを敵に回してしまいます。」

「お前の進言するバテントスとの条約についてか。あの、はてしなく不平等な。」

「クリストンの一の舞になるよつは、ましです。」

セシルは、

「神剣をもち、異国より、この大地を解放せし英雄ミユティカ。黄

金の髪を風になびかせ、空の色の瞳で、翼ある白馬にのり大空をかけめぐり、ダリウス王家の祖とならん。」

バースは、

「歴史の本にも、教会の教義書にもある一説ですな。彼女が、今の時代に生きていたら、バテントスも、かの地へと拝つてくれるでしょうな。」

セシルは、両手をにぎりしめた。

「私には、あのお方の姿が、ミコティカ様にかなつたのです。黄金の髪と、あのお方は新緑の瞳をしてますが、あの若々しい活力にみちた姿は、まさしく過去の英雄の再来を感じさせてくれました。あなたも今朝方、廊下ですれちがいませんでしたか。あの方が、十三年前、マーレル・レイを去られた方です。」

バースには信じられない。セシルは説明した。

「シエラ様がどうしても必要なのです。陛下のお心は、シエラ様一につにかかっていますから。話がつきしだい、このマデラ宮殿で結婚式をあげさせる予定だつたのです。陛下は、そのあと、必ずクリストンへ向かうと信じて。」

「証拠はあるのですか。前領主様が、王子をかくまつた事実は知っておりますが、セシル様の御記憶のなかの陛下のおもかげだけでは、その者が王だという証拠にはなりませんよ。」

「グラセン様が、お連れしたのなら本物でしょう。彼は、マルガリーテ女王を即位させた人物です。彼が十三年、守り続けていたとし

ても当然でしょう。」「

「なり、なおさら、王のお相手はベルセアからえらぶべきです。あのような国を失った、しかも、ドーリア公の娘などダリウスが納得するはずがない。なにゆえ、グラセン様は、あのような娘をえらんだのか。」「

「理由があるはずですよ。私達には分からぬね。バース、すぐに謝罪して、もどつてきてもうひとつにしてください。このままでは、カイルの立場はない。」「

バースは、少し沈黙したあと、

「やはり、このままお帰りねがいます。グラセン様とあの娘には、かかわらぬほうが身のためです。顔色が、すぐれませぬな。寝室で、少しお休みください。私は仕事がありますので、これで失礼します。」

「

体の弱いセシルは、このがんこ者には逆らえない。ここのこと、バテンツス対策でキリキリしており、夜も口クに眠れず、セシルは体調をすっかりくずしていた。

シエラとグラセンは、レックスをつれ、宮殿から出ようとしたとき、いきなり宮殿の警備兵にかこまれてしまった。警備兵は有無を言わさず、レックスとシエラを拘束し、グラセンを門の外へと追い出す。

レックスは、シエラと引き離されたのち、窓のない真っ暗な部屋に閉じ込められた。部屋の前には監視兵が一人、扉にはカギ、逃げ

る事はできなかつた。

(シーラ、シーラはどうしているんだ。ひどい事されてなきやいいけど。けど、どうしてこうなつたんだ。セシルの命令か。いや、昨日と今朝の態度を見れば、こんな事するはずない。いったい、だれが。)

じりじりと時間ばかりが、むだにすぎない。どれくらい待つただろうか。扉の前からドサツと音がきこえた。

「レックス、はやく。」

リヒンダが、顔を出した。

「シーラは？」

「地下牢に閉じ込められてたわ。仲間がたすけたはずよ。」

リヒンダは、レックスの手をグイとひっぱる。

「西門で、マーブルとグラセン様が待つてるわ。すぐこマーブルを出るわよ。いまかい話は馬車でね。」

リヒンダは、人目をつまくさけつつ、レックスを西門までつれてきた。西門にはロイドとファーとレスリング部数人がいた。レックスは、一瞬みまがえるが、ロイドは、

「早く逃げる。警備兵は、おれ達が、できるだけひきとめるから。そのあいだにマーブルから出るんだ。シーラはもつきてる。馬車は門の外だ。」

「ロード、お前は。」

「おれの事は心配するな。シホラをたのんだぞ。」

警備兵がやつてくるのが見えた。ミランダは、レックスをまたひつぱり、馬車へとおしこむ。シホラが、だきついてきた。マーブルは、馬車を一回転に走らした。

マーブルは、

「セシルは今、具合が悪くて寝ているらしい。ロイドも、セシルの用事で出かけて帰つてくる道すがら、西門に向かつているおれ達と出くわしたんだよ。おれが説明するまで、なーんにも知らなかつたようだ。地下には毒が用意されてたんだ。助けるのがもう少し遅ければ、シホラは毒をのまれてたかもしれん。」

グラセンは、

「どうやら、ベースのしわざのようですね。私達をかなり邪険にしてましたからな。バテントス怖さにしたことでしそう。宮殿は脱出できましたが、マテラから、はたして出られるかどうか。」

レックスは、

「ミランダ、剣はどうある。おつかけてくる兵の動きをじりべる。」

「シホラ様のそばの荷物よ。」

レックスは、剣に集中しようとしたが、心が乱れているせいで、まったく分からない。

「グラセン、パスだ。剣を使って、お前が調べてくれ。つくしう、こんな時にライアスがいてくれたひ。」

ライアスときき、シーラはレックスを見つめた。レックスが、剣をグラセンにわたそうとしたら、町の出口付近で兵が待ち伏せしているのが見えた。ベースの手回しの早さにムカつく。馬車で強引突破しようにも、数が多くなる。

「みんな、息をとめて！」

ミランダが、前方にむかひ何かをなげた。爆発する。煙がもうもうとたち、兵士達がゲホケボ涙をながしつつ、その場に倒れこんでしまった。

「ライアス様からあずかつっていた毒蛾の幼虫よ。ライアス様はあのあと、爆発するよう改良してたのよ。しばらく動けないわ。」

馬が苦しそうにいなないたが、人間と体の大きさがちがううえ、あつというまに毒の煙を突破したので、目が多少充血するだけですんだ。そして、走れるだけ走った後、林の中でマークルはつかれた馬をとめた。荷台にあつた水を馬にのませる。

「ふー、なんとか助かつたな。レックス、もう少し剣をうまく使えるようになれ。ライアスの代わりにもならん。」

「しようがないだろ。だれも教えてくれないんだしさ。そうだ、グラセン、お前が教えてくれよ。」

グラセンは、乱暴な馬車に気分を悪くしたようで、茂みで苦しそうにしている。//ハンドが、グラセンの背中をさすった。

シエラは、

「どういう事？ みんなして、なんの話をしているの。なぜ、ライアス兄様が出てくるのよ。」

マーブルとレックスは、顔を見合せた。レックスは、気まずそうにシエラから視線をそらしつつ、こたえた。

「ライアスが、お前に体を使って、おれ達を助けてくれたんだ。もう、いないがな。」

パン、シエラはレックスのほおをたたいた。

「兄様となんの話をしたのよ。私の体使って、何したのよー。」

「お前、なんか、えらいかんちがいしてんな。ライアスは、おれ達を助けてくれただけだ。おれ達は、シエラが覚えている以上に、バテントスに襲われてんだよ。そのつど、ライアスが助けてくれてたんだよ。あいつがいなきや、おれ達は今ここにはいない。さっきのミランダの毒の爆弾だって、あいつが、おれ達のために残してくれたんだ。」

「じゃあ、なんで、私に兄様の事を教えてくれなかつたの。私、一人で悩んで、すごく不安だつたのよ。」

「ライアスは、お前の体を使ってる事に引け目感じたんだよ。ど

れだけ、お前に氣を使つてたか知らないだろうがな。けどもつ、い
ないんだよ。だから、これ以上、ぐちやぐちや言つなー！」

「ひどいわよ、みんなして、ひどいわよー！」

「馬が水をのみおわつた。こんな林でグズグズできつた。できるだけ早くカイルを出ないと、やばい事になるんだぞ。シエラ、つかま
りたいのか？」

シエラは、泣きながら首をふつた。レックスは、

「だまつていた、おれも悪かった。すまない。や、馬車に、」

ヒュンヒュンと矢が飛んでくる。木々にかくれていた鳥がいっせいに飛び立ち、林がさわがしくなつた。足の速い騎馬隊が、向こうからやつてくるのが見えた。

ミランダは、しまつたと思つた。氣分の悪いグラセンと、レック
スとシエラのケンカに氣をとられていて、敵が見えるまで氣がつかなかつた。

矢が馬にあたる。騎馬隊は二十騎近くいたので、とても勝ち田はない。いつも近くにひそんでいるグラセンの部下も、足が遅れてい
るらしく助けに現れなかつた。

たちまち、とりかこまれ抵抗するすべもなく、つかまつてしまつた。カイル兵の動きはすばやく、あつとこうまに縄につながれてしまふ。よく切れる重いオノが取り出され、シエラがその前にひきず

られた。

やめろ、とレックスがさけんだが、すぐに頭をなぐられ地面に倒され動けないよう、兵達にふみつけられた。強くなぐられたせいで、意識がもひりうとしている。

（レックス、レックス、しつかりして。この剣を。早く！）

ライアスの顔が脳裏にうかび、レックスはいつのまにか、荷台に置いたはずの王家の剣を手にしていた。シエラの首をねらったオノがふりおろされ、シエラの細い首にあたった瞬間、コナゴナにくだけちつた。

レックスは、びっくりしている兵をおしのけ、たちあがり、シエラをつかんでいる兵をなぎたおた。そして、剣にすべての怒りをこめ、自分達を襲つた者達へとぶつけた。

ドン、と林が爆発する。気がつくと、周囲の林は焼け焦げたようになり、自分達をあそつた騎馬兵達は、焼死体に変わりはてていた。

レックスは、青くなり、シエラ達の姿をさがした。すぐに見つかつた。さほど離れていない場所、そこだけ焼け焦げていない場所に、四人は眠るようにそつていた。

ホッとすると同時に、光とともにライアスが現れ、レックスを見つめる。そして、剣をつかんでいるレックスの手を取つた。

「この剣はね、人の思いを引き出し増幅させる機能がある。君が爆発させた憎悪の力があまりにも強くてね。カイル兵どころか、君もみんなも、ふき飛ばしてしまったところだつた。自分の思いを制御し

「いつ使わないか、いつ事故は、これからなんどでも起きる。呪をつけるんだ。」

「これから、そこにいたんだ。いなくなつたんじや。お前が守つてくれたのか。」

ライアスは、ガクッとひざをついた。

「これだけで、精一杯。君達を守るだけで。ぼくは、消えたと見せかけて、感知されないよう自分の身の回りに結界を張つて、君達のそばにずっといたんだ。さよならしたけど離れなくなつたから。でも、もづ。」

ライアスの体が光を失い、それと同時にすきとおつてきた。

「こんどこそ、お別れだ。シエラとケンカしないでね。さようなら、ぼくの大切な王子様。」

ライアスは、スーツと消えた。レックスは何がなんだか分からない。手にしていた剣をほつりなげ、わーっと大声をあげ、その場に倒れこむよう氣を失つた。

マテラ宮殿の密室で田をさましたら、すでに一日が経過していた。そばにいたマーブルから話をきくと、あのあと、ロイドがかけつけ、自分達を保護してくれたらしい。

バースは自殺をしたと、マーブルは重い口調でつげた。

「バースは、バテントスにおされていたんだよ。シエラがマテラ

に向かっているから、きたら暗殺しろって手紙が、ベースの部屋から見つかったんだ。おれたちや、ワナにかかりにきたようなモンだ。

「

レックスの顔が、こわばつた。自分達の行動は、バテントスにつぬけだった。

マーブルは、

「おどされていたのは、ベース一人だけだ。セシルもロイドも今回の件については、まったく知らなかつたようだ。

ベースの暗殺目的は、あくまでもシェラだけだつたが、セシルがお前の正体に気がついたせいで、お前まで拘束されてしまつたんだよ。シェラみたいに地下牢に入れなかつたのは、お前が本物かどうかきちんと調べてから、どうこうするつもりだつたらしい。

まあ、どつちにしたつて、お前もシェラと同じになつてたろうがな。偽シェラがいる以上、バテントスにとり、お前達はじやま者でしかない。」

レックスは、なんでベースがおどされたのかと疑問に思つた。ゼルムは、領主が直接おどされた。マーブルは、

「バテントスは、合理的な考えをするやつらだ。バテントスは、カイルの実力者は、相談役だと判断したんだよ。なんせ、セシルの断りもなしに、独断で騎馬隊を動かせるしな。

けど、ベースはやっぱり、ただの坊主だよ。今になつて考えると手際が悪すぎる。結局は、おれ達に逃げられ、騎馬まで出すはめに

なり、セシルに問いつめられる前に自殺しちまつたもんな。」

バースはたぶん、突然、宮殿に現れたシェラにあせり、きちんとした暗殺計画をたてられないまま、ああするしかなかつたのだろう。

レックスがこの町にきて、すぐに感知した、あやしい人影。今となつては、たしかめようがないが、彼らはバテントスではなく、バースの手の内の者で、自分達がマデラにいつやつてくるか監視してたのではないか。

（シェラの姿が変わつていたから、おれ達を見つけられなかつたのだろう。髪のみじかいシェラは、遠目では男にしか見えないからな。）

レックスは、なんだか悲しくなつた。

「自分の国だけが助かれば、それでいいのかよ。エイシアは、四つの国と一つの宗教国家で一つなのによ。」

「十三年も王不在が続けは、そんなモンだ。」

レックスは、ベッドのわきにある王家の剣を見つめた。

「王家の剣、怖いモンなんだな。おれ、カツときて、バカやつちまつた。もう少しで、みんなを殺してしまつとこだつた。」

マーブルは、ポリポリ頭をかいだ。

「お前のバカは昔からだろ。ベルンじや、カツカして馬車をひつくり返すしな。けどなんで、林がああなつて、騎馬連中がああなつた

のか、みんな必死で調査してゐるようだが、どうがんばつても答えは出んだらう。まあ、おれ達全員が無事で結果良しだ。すんじまつたことは、もうわすれん。」

「ライアスが助けてくれた。ひょととして、ベルンのときも、シエラが軽症ですんだのは、ライアスが守つてくれてたせいかも知れない。おれ、ほんとにバカだ。もし、もし、ライアスがいてくれなかつたら、おれ。」

レックスの目から、ぽろぽろ涙がこぼれた。マーブルは、ふるえる息子をそつとじだきしめる。

「お前にも、つらに思いばかりさせたな。守つてやると、絶対守つてやると決めてたのに、守りきれでなかつたんだな。」

無骨なマーブルの手が、レックスの金色の髪をなでてゐる。レックスは、たまらなくなり、大声をあげて泣いた。

七、もうひとつの中のシホラ（一）

マデラで襲われた以上、ベルセアのグラセンの屋敷も安全ではない。レックス達はセシルと相談し、となりのダリウスへと行く事にした。グラセンは、襲撃事件のせいで体調をすっかりくずしてしまい、マデラから動けそうにもなかつた。

マーブルは、

「カイルとダリウスの国境を越えると、クラサという土地に出る。クラサは、おれの土地だ。今は、人に管理をまかせてあるが、そいつの家まで行けば、おれ達をかくまつてくれる。

クリストンが、すぐとなりだが、国のさかいは、けわしい山脈でしきりされていて、道らし道はつながつてないから、とりあえずは安全だらう。そこで、シホラの叔父さんとやらの連絡をまつ。」

失つた馬車の手配は、セシルがしてくれた。ついでに身分証も偽造してくれる。旅立つ日の朝、セシルはレックスに一通の封書をわざした。

「あなた方の結婚証明書です。式を私の手で行えなかつた事を残念に思います。」

「まだ、結婚しないのに、こんなもの受け取れないよ。」

セシルは、ほほえんだ。

「では、グラセン様にでもあづけてください。シホラ様をたのみま

す。あのよつな状態にさせてしまつて、責任を感じております。バテントスの事がなければ、回復までおあずかりしたいのですが、今は謝罪以外、方法も言葉もみつかりません。」

シェラは今、心を病んでいる。一日中、ぼんやりしており、話しかけてもほとんど返事はしない。襲撃事件で受けた、ひどいショックのせいでこうなつてしまつたのだ。

こんな状態のシェラをつれて、はたして旅を続けられるか、みんな疑問に思つたが、旅を続けるしか、シェラが生きていくすべはない。「トトトとゆれる馬車からのぞく空を、シェラはうつろな瞳で見上げていた。

無理もない、マーブルはため息をついた。ずっと、うざつたく感じていたが、懸命にレックスをおいかけ、いつしょにいるために髪まで切つてしまつたシェラを、いじらしく、そして息子の嫁として愛おしく思い始めたからだ。

せめて、ライアスがいてくれたら、マーブルはそう思ひだるをえなかつた。レックスもたぶん、おなじ思ひだろ。

レックスは、シェラに王家の剣をわたした。シェラの指が無意識に動き、しつかりとにぎつしめる。

「おれがもつとしつかりしていれば、こんな事にならなかつたんだ。守つてやると約束したのに。」

レックスは、おちこんでいた。マーブルは、少し考えたあと、

「今夜から、お前がシェラといつしょにいるんだ。セシルから、結

婚証明書をもらつたんだろ。偽の身分証も夫婦になつてゐし、別々にいふと、あやしまれるぞ。」

レックスは、あわてた。

「お、おれ、女の子といつしょなんて困るよ。まだ、結婚していないのに。それに証明書は、グラセンにあずけちまつた。」

マーブルは、ジロリとにらんだ。

「とにかくいつしょにいる。そのほうが、今のシエラに合つていいはずだ。シエラはもう十八だ。成人した大人の女なんだよ。それに、おれは、ミランダと夫婦つて事になつてんだよ。」

レックスは、ピンときた。

「お前、なんでこんな毒女に手を出したんだよ。ヤキがまわつたのかよ。それとも、四十五歳でモーロクしたのかよ。」

荷台から、ミランダの「ふしがレックスの後頭部を直撃した。クラクラする。マーブルは、

「ま、そういう事だ。おれがだれを好きになるか、お前には関係ないだろ。お前は、さつさとシエラとくつつけばいいんだよ。」

レックスは、困つてしまつた。今の状態のシエラを、どうめんどう見ていいか分からぬ。シエラの症状は、日常生活に、あまりさしつかえなかつたのが、不幸中の幸いだつた。

レックスは、シエラと今夜からいつしょ、と考えるだけで頭がモ

「ハッとしてしまつ。

（やばい。変なモウソウが。しゃしゃりして、おれ。シホラは今、病氣なんだぞ。ちゃんと、めんどりみなきや。そ、そりだ、妹だ。妹と思えぱいい。）

レックスは、荷台のシホラを見つめた。シホラは、剣をしつかりにぎりしめたまま、あいかわらす空を見ていふ。今のはたぶん、耳に入つてないだろ？

宿についていたレックスは、シホラの手をひき寝面へとむかし、シホラをベッドにすわらせた。やつぱり、ドキドキする。レックスは、とつあえず声をかけることにする。

「あ、あの、シホラ。その、えと、おれ、なんにもしないかい。き、きがえるんだつたら、向こうむこう、」

シホラの手が、レックスの手をひきつた。

「「めん、レックス。こうこうと心配かけて。分かつてゐる、なにもかも。でも、でも……！」

シホラは頭をかかえ、ベッドからおつに床につくまゐる。死の直前まで行つたあの時の恐怖が、シホラの心をじぱりあげる。

「「めん、レックス。」めん。」

シホラは、床につくまつたまま動かなくなつた。皿せつづんだ。レックスはシホラをベッドにすわらせた。正氣にもどつても、すぐじる。マテラを出て十日がすぎてこる。シホラは回復するの

だろうか。

レックスは、王家の剣を持ち、シエラをだきしめた。よい方法はないのだろうか。ライアスがいない今、自力でシエラを助けなければならない。

（ライアス、おれに力をかしてくれ。たのむ。）

祈りにも似た思いだつた。いや、祈りだつたのだろう。レックスの脳裏に、一人の女性が現れた。レックスは、その女性に見覚えがあつた。思わず、すがりつくよう助けをもとめる。女性はうなずき、ベル、と名乗つた。

「シエラは今、一歳にもどり、母親とライアスとすゞした、やさしい時間の中にいます。その世界から、シエラを連れ出す事ができるのは、ライアスだけでしょう。一歳のシエラは、あなたを知らないのですから。」

「ライアス、ライアスは、どこにいるんだよ。」

ベルは、少し皿をふせた。レックスは、なんとなくいやな予感がした。

「あなたに覚悟はありますか。あの子の、ライアスのすべてをつかいれる覚悟はありますか。」

「ライアスとシエラをとりもどせるなら、おれはなんだつてやる。何をすればいいのか教えてくれ。」

ベルは、

「昔、ある異国の男が、この島を支配していました。ミコティカが戦い、死においやつた男です。この男の魂は、そのときの憎しみから、この地をのろう魔物になってしまいました。男は、ミコティカに復讐するために、彼女の魂が転生する時を待っていたのです。

そして、クリストンに介入し、さまざまな方法で、転生したミコティカの魂に闇をつくるべく、ライアスを追いつめていました。ライアスが死してのち、その魂をとらえ、自分がいる世界へと引きずり込み、自分と同じ苦しみを味あわせるために、ライアスの魂を汚し続けていたのです。

けど、ライアスは、あなたとシェラへの思いが強く、シェラの中に留まることができました。シェラは私の魂から出た者ですから、シェラの中にいれば、魔物は簡単にはライアスに手を出せません。ですが、シェラの拒絶が強まり、ライアスは出ていかざるをえなくなってしまったのです。」

「ライアスは、シェラから出たあと、おれ達といっしょだったって言つてた。魔物の話が本当なら、なぜライアスは無事でいられたんだ。シェラから出でていたのにさ。」

「あなたの思いが、ライアスにつながつていたからです。私もできるだけ、ライアスを守つていました。ですが、あの剣の事故により、力を使いはたしたライアスは、自分の意識すら保てなくなり、本来逝くべき世界へと、魔物の力により、ひきずりこまれてしまつたのです。

私は、ライアスを守るために、シェラの中に置く事が最善だと考えています。ですが、シェラにはシェラの意志があるので。私は

の本意ではないとほいえ、ビリijojyutuもあつません。」

「じゃ、なぜ助けに行かないんだ。そこまで、あいつの事を考えていたな」

「ライアスが拒絶したからです。」

「拒絶？ ライアスが、お前をか。自分の魂の親であるお前を拒絶したのか、ベルセア。」

ベルセアは、悲しげな顔をした。

「あなたに、自分の本当の姿を知られたくなかったのでしょうか。以前のあなたならともかく、靈的なものが分かりつつある今では、自分がどういう状況におかれているかを、『こまかす事はできなくなりつつありますから。』

レックスの手が、ブルブルとふるえはじめた。

「うそだ。おれは信じないぞ。ライアスがそんなだったなんて、おれは信じないぞ。」

ベルセアは、

「あの子のいる場所へ、あなたをおくります。眞実は、その目でたしかめてください。」

レックスは、ベルセアによつて、遠慮なく行くべき場所へとつきおとされた。手にもつ、ミコティカの剣とともに。

そこは、雪がまいおりる戦場だつた。地面に、ふりつもつていな
いところを見ると、冬のはじまりかもしれない。

ワーッと音うかけ声と、ガチャガチャする甲冑の音。馬のいいな
きとパカパカとかけめぐる足音。剣がはげしく交わる音、さらにド
ーンドーンという、耳をつぶさくような音は、たぶん大砲なのだろ
う。

だが、音はきこえても、レックスの目にまは、モヤモヤとした黒い
物が、はげしく動いているようにしか見えない。

ベルセアの声が響いてきた。

（まだ、あなたの力では、すべてを見通すには無理があります。は
つきりしないものは、無視してもかまいません。）

レックスは、

「ここはどこだ。どこの戦場みたいだが。」

レックスからは、ベルセアの姿は見えない。響いてきた声も、レ
ックスの内側からきこえてきていた。

（ここは、ライアスが最後に生きた場所です。ライアスの記憶の中
の世界。ライアス自身が、わすれたいとねがつてゐる世界。ライア
スは、自分がもつともいたくない世界に、閉じ込められてゐるので
す。）

「地獄つて、もっとドロドロしたモンだとばかり思つてたぞ。ここ
は、ふつつの戦場じゃないか。やたら、薄暗いけどさ。」

（「この世界は、そんなに深い場所にはありません。地獄の上の世界です。魔物は、もつと下にひきずりこみたかったようですが、下にいくには、魂をもつと穢けがさなくてはいけないのです。魔物は、この世界のライアスをもねらつているのです。魔物が、ライアスをもつと穢す前に助け出してください。）

「ライアスは、どこにいるんだ。」

（さがしてくださー。きっと、見つけられます。あなたの安全は私が守ります。ですから、あなたはライアスの説得だけに集中してください。）

七、もつとつシムラ(2)

レックスは、ただつぴろい戦場を見回し、しかたなしに歩き始めた。

(ビニもかしこも似たように世界だな。こんな広い場所で見つけられるのかよ。ナビ、さむ。雪のせいだらうナビ、体が冷えると言つよりは、心が冷えるといったほうがいいかも。すぐくつめたい。)

手にもつ剣が、ほんのりとあたたかかつた。レックスは、どんよりと暗い空からふりしきる雪を、いまいましそうにながめた。

(ライアスが死んだのは、たしか冬のはじめだつたな。そのあと、シゼレが領主になつて、最後の戦いにいどんだつてきいたけど、これもあつさつ負けてサラサは陥落したんだよな。)

レックスは、地面に大きくあいた穴の前で足をとめた。なんとなく、気にかかる穴だつた。剣に意識をあつめ、この穴があいた時間を再現してみる。この穴は、ライアスの死だつた。

レックスは、穴の中に降りた。ライアスは、死体も残さなかつたと言つていた。えぐれた地面にそつと手をあてる。レックスは、手をあわせ、ライアスのために祈つた。

レックスは、殺氣を感じ、急いでに穴から脱出した。ドーンという音が、レックスが先ほどまでいた穴の中で爆発する。大砲か、と思つたが、いやな気配を感じ上を見ると、上空に黒くて大きなものがただよつている。

その黒いものが、大砲の弾のようなものを、レックスめがけてぶつけてきた。レックスの手が自動的に動き、頭上に巨大な盾を出現させる。盾が、レックスを守ってくれた。

（なんだ、これ。おれがやつたんじゃないぞ。そうだ、ベルセアだ。彼女がやっているんだ。）

また、手がかつてに動き、今度は黒いものめがけて、剣から光弾を発射させる。光弾にあたった黒いものは、姿をはっきりと現した。

巨大な黒いドラゴンだ。レックスは、ふるえあがつた。

（ドラゴン？ まじかよ。まさか、こいつが例の魔物？）

ドラゴンは、憎悪にみちた赤い目で、小さなレックスをにらんだ。ぞつとするような、つめたい視線だ。ドラゴンは、レックスめがけて火をはいたが、ベルセアの結界によつて、さまたげられる。

こんなバケモノ、相手にしたつて絶対勝てない。この場は、素直に逃げたほうがいい。レックスは、逃げ出した。

ドラゴンは、漆黒の翼で、おいかけてきた。そして、情け容赦なく、レックスに攻撃し続ける。もし、ベルセアの守りがなかつたら、この世界で即死していただるつ。

（こいつ、じこまでおいかけてくるんだ。しつこいー。）

レックスは、逃げるのをやめた。人間の足とドラゴンの翼とでは分が悪い。

「や二、ドラゴン。お前、ライアスを知ってるだろ。お前につかまつているのは分かっているんだ。やつをとせー。」

やつとまた、ベルセアが守ってくれるはずだ。逃げても逃げ切れないので、やるだけやってみるまでだ。ドラゴンは、攻撃してこなかつた。

「出て行け。ここから、すぐに出て行くんだ。ここは、お前のくる場所ではない。」

重く、つめたい声が響いた。

「ライアスを出せー。おれのライアスを返してくれれば、すぐにでも出て行つてやる。」

「なぜ、ライアスにこだわる?」

「お前には関係ない。とにかく早く出せよー。このままじゃあ、シエラが助からない。あ、」

関係ないとが言つておきながら、シエラの事をしゃべつてしまつた。レックスは、自分はバカだとまた思つてしまつた。

ドラゴンの憎悪に満ちた表情が、少し変化したように見えた。

「そのシエラとかいう小娘は、なぜ助からないのだ。怪我か病氣にでもなつたのか。」

レックスは、ドラゴンの瞳をじっと見た。そして、

「今のシホラは、魂のぬけがらなんだ。オノで首をおとされかけて、ひどいショックを受けて、そうなつてしまつた。シホラは、ライアスとすゞした時間にもどつていると、ベルセアが言つてた。その時間には、おれはいない。いるのは、母親代わりだつたライアスだけだ。たのむ、おれといつしょにきてくれ。」

ドラゴンは、レックスを見つめた。そして、なぜ分かつたのかとたずねる。レックスは、

「小娘と言つたる。シホラだけじゃあ、関係ないやつは小娘とは分からぬ。」

ドラゴンの姿が煙のように消え、白に馬と、いつも見なれている髪のみじかいシホラが現れた。

「バカだと思つてたのに、意外と細かい事に気がつくんだね。たつた一言、うつかり小娘と言つただけで、ぼくの正体を見抜くなんてね。君はしつこいよ。あれだけおどしたのにな。せつねど、逃げ帰つてくれるのを期待してたのに。」

シエラの姿をしたライアスは、馬の白いたがみをなでた。レックスは、

「お前、なんで、シエラなんだ。その白に馬は、ゼンから出てきたんだ。」

「ぼくが、どんな姿をしていようが、君には関係ないよ。この子はね、白竜しらりゆうというんだ。伝説にある、ミコティカの翼ある白に馬さ。馬のように見えるけどドラゴンだ。さつきのドラゴンは、ぼくと白竜が合体した姿なんだよ。君をこわがりせよつと思つてさ。」

ベルセアの声が、またレックスの心に響いた。

（今のライアスは、もとの輝く姿をとれません。この世界に墮ちた者の宿命なのですから。『氣をつかつてあげてください。』）

レックスは、ライアスに手をさしのべた。

「帰ろり。こんなところにいてはいけない。おれといつしょに帰ろり。

」

ライアスは動かなかつた。レックスをにらみつけるよう、見ているだけだ。地上にいるときのライアスは、自分をこんな田では決して見なかつた。心を病んでいるのは、シエラだけではない。ライアスもずっと、心に深い傷をかかえている。でなければ、こんな世界に捕らわれるはずもない。

（ライアスは、塔に閉じ込められて餓死寸前だつたと言つていた。いくら、反乱に反対したとは言え、子供にそこまでひどい仕打ちをする親がいるなんてな。）

マーブルは、確かにどうしようもない男だけだ、おれに、親としての愛情をそいでくれた。おれが、マデラで泣いたときも、おれの気がすむまでだきしめてくれた。

シエラの母親は、シエラが小さいころに死んでいる。子供だったライアスにとり、父親はたつた一人の親だつたはずだ。もし、おれがライアスだつたら、やっぱり、たえきれないだろうな。）

レックスは、白い馬とよそつているライアスを見た。心の中か

り、ベルセアの声が響く。歎してあげてほし」と。

（歎してあげてくだれ。その子は、あなたの子ですか。その子の名前は、シホラ。ミコトイカの幼名。）

レックスの心がふるえた。シホラ、やうだ、おれはこつもシホラと呼んでいた。

「シホラ、帰れ。おれとこつしよ。」

ライアスは、ハッとしたようてレックスを見つめた。レックスは、「お前、前にシホラとこつ生きたいとかなんとか言ってたろ。なら、シホラとして生きればいい。ライアスは死んだんだ。もう、遠慮なんかする必要はない。お前はシホラだ。さあ、おいで。」

ライアスは、じりじりこにか分からなことつだった。やしのべられた手から逃げるよ、巨魔のつらひに回る。レックスは、

「その白て馬もつれてこい。お前の友達なんだろ。こんなとこまでこつしょだなんて、よつまじお前が好きなんだな。」

「ぐ、ぐるな。なにを言われても、ぼくはこつから動かないだ。だいいち、君はおせつかいなんだよ。なんで、こんなとこまでくるんだよ。」

「だから、お前の妹がピンチなんだって。シホラがあのままだったら、おれだつて困るんだよ。」

「医者にみせねばこいだろ。もづ、ぼくには関係ない。」

レックスは、馬のうしろからライアスをひっぱりだした。そして、だきしめる。

「すまない。おれが無力なばかりに、お前達一人とも、こんなにさせちまつた。今から、おれがお前の親になる。だからもう離さない。愛している、シエラ。」

ライアスは離れようと、レックスの腕の中でもがいた。レックスは、ぎゅっとだきしめ、ライアスのひたいにキスをし、栗色のみじかい髪をそつとなでた。

「今の姿がいい。」うしてだきしめる事も、髪をなでる事もできるしな。ライアスの姿のままだつたら、さすがにできないしな。お前は、女の子でいいんだよ。おれのむちゅやなシエラでいいんだよ。お前、おれに、ずっとこつしてもらいたかったから、今、シエラの姿をしてるんだる。だったら、意地はらないで、最初からすなおにそいつ言えよ。」

ライアスの目から、涙がこぼれた。ライアスは、うつうつとレックスの胸にすがり、泣き始める。ライアスは、父さんとつぶやいた。気がつくと、レックスはもとの宿にいた。

シエラの姿をしたライアスが、ぼうぜんとしているシエラの顔を見つめる。そして、シエラの体に入った。レックスは、たのむ、と心の中でつぶやく。まもなく、シエラの顔に表情がもどった。

シエラは、

「兄様がきてくれた。もつ心配ないって言つてくれた。私、バカだ

つたわ。あんなに邪険にしてさ。」

「ライアスは、おれが引き受けれるか?」

シエラは、首をふった。

「ここのままでいいの。私、兄様にあまえてばかりで、何もしてあげられなかつたから。あの子ののぞみは、私といつしょに、あなたのそばにいる事。だから、このままでいいの。」

「無理してんじゃないのか。あいつ、いろいろと問題あるし、変なのにも、ねらわれてるしさ。」

シエラは、少し笑つた。

「確かにね。でも、私のたいせつな兄様よ。私といつしょにいてくれた方が、安心するし心強いの。殺されそうになつた、あの時の恐怖は完全にはぬぐいきれないけど、兄様がいてくれるだけで、自分を見失わずにすむしね。」

そして、レックスが持つっていた剣を見つめた。

「グラセン様との約束を守らなきやね。その剣、かして。」

シエラは、レックスから剣を受け取つた。

「はい。私がからあらためて。おくれでごめんね。」

「いつから気がついてた?」

「会つてすぐによ。これも縁かな、って思つちやつたわ。さ、受け取つて。」

レックスは、わたされた剣を、すぐにシエラに返した。

「これは、お前の中のライアスにだ。持ち主に返すよ。おれは、この剣をまだうまく使えない。へたくそが持つてたつて役にはたたんからな。ライアス、いやもうシエラか。あとで剣の使い方を教えてくれ。」

八、クラサの眞実（1）

レックス達は今、クラサの町はずれにある大きな屋敷にいた。この屋敷は、クラサの地主である、サクセス家（マーブルの本名は、ウォーレン・サクセス）が別荘として所有していたものだった。

屋敷には、老夫婦が住んでいた。彼らはもとはマーレル・レイのサクセス家に長年つかえた執事夫婦で、マーブルが富殿に入り婿したとき、別荘とクラサの管理をまかされ、移り住んできたのである。

十三年ぶりに姿を現した主人を、老夫婦は涙をながしてむかえた。生きて、帰つてくれると信じて、ずっと待つてくれたのだ。気がついたのである。

マーブルは、富殿が焼けたときから、もう帰るべき家はないと思っていた。だがそれは、思い過ごしだった事に、老夫婦の涙を見て（もう、どこにも行く必要はない。マーラで考えてたとおり、ここでミランダとくらそう。はなやかなマーレル・レイとちがつて、何もない田舎町だが、ここがいい。）

マーブルは、クラサにきてまもなく、この事をレックスにつけた。レックスは、それもいいんじゃないかと笑っていた。

今日も、屋敷の敷地内にある鍛冶小屋から煙が立つてゐる。ここのおじいさんが、農作業に使うクワとかフォークを趣味でつくりつてゐる、小さな鍛冶小屋だ。

マーブルは、母屋の窓から鍛冶小屋をながめていた。

「今日も朝から鍛冶場かよ。もへ、匂過ぎだつてのこ、あきないもんだな、シエラ（ライアス）は。鍛冶仕事が好きな、JJのジーサンのいい相手だな。」

レックスは、

「銃を改良してんだよ。あの銃、かなり使い勝手が悪いみたいだ。第一、まっすぐ飛ばないしさ。それに、変なクセがあるみたいだし。あんなもの、よくあんたが使つてたつて、シエラ、感心してたよ。」

「まっすぐ飛ばなきや、銃の口をずらして撃てばいいんだよ。うんと遠距離ならともかく、近距離なら、どつかにあたるんだよ。」

いい加減なマークルらしい答えである。レックスは、

「シエラは、あの銃を戦争で使つもつでいるんだ。やつぱり、接近戦よりの遠距離からの攻撃のほうが有利だしさ。シエラの叔父さんが山越えて、もうすぐこっちくるじゃないか。叔父さんに見せるつもりなんだ。」

シエラの叔父サイモンが、こちうに向かつてこる。問題の山脈を越えての来訪である。山脈の向こうのクリストンは、今の季節、雪にうまつていて。雪は山で止まり、こちちはカラッとしたつめたい風のみだ。

マークルは、

「山越えか。クリストン側の山は、雪で道なんか分からなくなつてゐるにな。遭難しなきゃいいがな。」

「シエラは心配ないって。クリストンの諜報やつてた人だから、あいつ雪の山道もなれてるって。叔父さん、おれに早く会いたいってさ。」

「ライアスの事を、そのサイモンとかいう叔父は知ってるのか。」

「たぶん。シエラ、この前手紙かいてたから。そうだ。あんた、ライアスの事で、グラセンを説得してくれるって言つてたよな。あれ、どうなつてんだ。」

マーブルは、頭をポリポリかいだ。

「わすれてた。けどまあ、だいじょうぶだろ？ それに、お前達だけじゃあ、クリストンをどうこうするのは、むずかしい。グラセンも分かっている。」

「やつぱりな。約束わすれるの、あんたの十八番なんだよな。」

「なにが、十八番だよ。つたぐ、口だけは、一人前なんだな。レックス、クリストン行つたら、シエラの言つ事をちゃんとときけよ。今のお前は、なんにもできない、ただの青一才なんだからな。分かつたな。」

「しつこいな。なんども繰り返すなつて。そんなに信用できないのかよ。」

マーブルは、ハーツと息をはぐ。

「今までが、今までだつたからな。まあいい。おれは出かけて

く。夕方までには帰るから。」

「どこのんだよ。ここは、毎日だな。」

「おれのジーサンの墓参りだよ。ジーサン、ここが好きだったからな。墓はマーレル・レイじやなく、ここにあるんだよ。おれのマーブルって名も、ジーサンがかわいがってた、ブチ犬の名前からとつたんだ。」

「じゃあ、おれも行くよ。ずっと、屋敷にいるだけで、あきあきしてんだ。」

「お前はダメだ。お前の顔は、この田舎じや田立ちすぎる。マテラ宮殿じやあ、使用人の女どもに、すぐ顔をおぼえられたつてきいたぞ。こんな大事な時期に、お前を必要以上、人目にさらしたくないんだ。」

「だからって、どこにも行けないなんて拷問だよ。墓つて、この屋敷の裏山にあるんだる。裏山だったら、人目なんて関係ないじやないか。」

「おれは、一人で墓参りしたいんだ。ジーサンに話す事もたくさんあるしな。それに、裏山にも、ときどき町人が入ってくるんだよ。退屈してんなら勉強でもしろ。字もまんぞくに書けないんじや、クリストン行つても笑われるだけだ。ここには、何冊か古い本がある。ミランダにでも教えてもらえ。」

マーブルは、行つてしまつた。レックスは、勉強はきらいだ。窓がコンコンとなり、シホラが顔を出した。

「ヒマなら、外でできなよ。改良が終わつたから、試し撃ちにつけあえよ。」

これは、ライアスの方のシホラだ。シホラのめぐりあげた腕に、火傷のあとがあるのをレックスは見つけた。シホラは、

「うんと冷やしたから、もう痛みはないよ。マーブルが、出かけたみたいだけど、どこへ行つたんだ。マーブルにも試してもらいたいんだ。」

「ジーサンの墓参りだつてわ。おれも連れてつてくれとたのんだけど、ことわられた。人目には、さらしたくないって。」

シホラは、まじまじとレックスの顔を見た。

「顔立ちの良さはかくせないんだよ。君はやっぱり王家の人間だよ。こんな田舎じや、じうしたつて田立ちすぎる。」

「今まで、そんな事は、一回も言つた事がないのにな。クラサにきたとたん、いうだし。」

「しばらく、ここに留まらなきゃなんないからね。町の人に顔をおぼえられて、そこから足がつくとも限らない。まあ、用心にこしたことはない。ここは、町外れで、しかも大きな屋敷だから、君を閉じ込めるのにはちょうどいいんだよ。それに、マーブルだつて町には行つてないんだよ。知り合いに会つたら、やばいからね。ほくも出でないしね。」

シホラが、レックスの腕をつかんだ。

「や、早く出でてよ。あとで、マーブルにも撃たせて、感想書きか
なげや。」

で、その夜、レックスは、以前から疑問に感じていた事を、シエラにたずねた。

「なあ、お前ら、いつたいどうなつてんだ。お前の体には、一つの魂が入つてんだろ。きゅうくつとか、せまいとか、そんなのないのか。」

シエラは、

「うーん、なんて説明すればいいんだろ。魂が、かさなつて、一つになつてる感じかな。せまいとか、きゅうくつとか、そんな感覚なんていよ。けど、以前よりいろいろな事ができるようになつたし、分かるようになつちやつた。」

「やつや、ライアスがいるからだ。神童なんだぞ。だから、おれにやつせと言つたんだよ。」

シエラは、あきれた。

「しょせん、レックスの考え方って、そんなものなのよね。結婚してから、ほんと、見たくもない、いろんなものが見えてきやつたし。」

「

「悪かつたな。それより、夕方、ミランダの仲間が、ここへたずねてきたみたいだけど、なんか報告受けないか。」

「いつもの定時連絡ね。そうそう、グラセン様がベルセアにお帰りになられたつて。体調、よくなつたんだね。よかつた。」

レックスは、寝室のテーブルにおかれた本を見つめた。

「シエラ、クリストン行く前に、おれに勉強教えてくれよ。夕方、あんまり退屈だつたんで、ミランダに教えてもらつてたんだ。勉強きらいだけど、字くらう書けなきやな。」

「うん、立派な心がけだね。でも、私の先生はきびしいよ。」

翌日もまた、シエラは朝早くから銃をいじくつていた。昨日、試し撃ちで不具合が見つかつたので、そこを直しているのである。レックスは、ミランダに勉強を教えてもらつていた。マーブルは、また墓参りである。

レックスは、雑紙にきたない文字を練習しつつ、

「なあ、ミランダ。墓参りつて、そんなに行ぐものかよ。毎日だぜ。」

「

「マーブルの両親は、マーブルが八、九歳の時に、はやり病で二人とも亡くなつてゐるのよ。マーブルは、おじいさんに育てられたの。たつた一人の肉親で、おじいさんは、とても、かわいがつてたらしいわ。」

ミランダは、レックスの文字のつづりを直した。レックスは、

「それは知つてゐよ。けど、毎日だぜ。ジーサンに話す事なんて、

そんなにあるのかよ。」

「話は最後までできなさい。そのおじいさんがね、マーブルの花嫁をたいへん、心待ちにしてたのよ。けど、花嫁の顔を見ずに亡くなられたの。マーブルはね、あなたが産まれたとき、人にたのんで、おじいさんの墓に花の木を植えたのよ。春になつたら、黄色の花が咲く木をね。たぶん、その木を見に行つてるのよ。」

レックスは、文字を書く手をとめた。//ラソダは、

「あの人、あなたのお母さんを、まだ忘れてないのよ。//うん、忘れるなんて無理ね。あなたのお母さんは、たしかに存在したんだものね。その木を見て、いろんな思い出にひたつているのだと思うわ。」

「

「マーブルは、お前といつしょになるつて決めたんだう。」

//ラソダが、新しい紙を用意した。そして、インクの残量をたしかめる。

「そうね。私と結婚する前に、過去を整理しているのだと信じたい。けど、このじろ迷いがあるのよ。ほんとうに、あの人といつしょになるのが正解なのかなって。」

「どういつ事だよ。好きなんだろ、マーブルが。」

//ラソダは、少しだけ考えてから口を開いた。

「他にすべき事があるんじゃないかつて。自分の居場所も、ここではなくて、そこにあるんじゃないかつてね。結婚する前の迷いと言

「クリス汀行くって事か。それとも、こんな田舎じや不満つて事か。」

「クリス汀行くって事か。それとも、こんな田舎じや不満つて事か。」

リランダは、首をふった。

「分からぬ。だから、迷つてゐる。」

「あのバカ親父が、はつきりしないのが悪いんだな。おれから言っておくよ。もう、墓には行くなつて。それでも行くんなら、そんな木、おれが切り倒してやる。」

リランダは、笑つた。

「親父なんて言葉、はじめてきこたわよ。父さんって呼んであげたら。きっと、喜ぶわよ。」

「気持ちを素直にして告白するよ。父さんって呼びたい。ずっとそう思つてた。けど、逃げるために、何もかも捨てなきやならなかつたんだ。マーブルも、おれの事、アレックスつて呼んでないしさ。」

「おたがい、照れくさいのね。ま、しょうがないわね。せ、勉強、勉強。集中。」

レックスは、つむれい母親ができたみたいだと感じた。マーブルと結婚すれば、リランダは義理の母になる。

それで、この日もこんな感じでおわった。

八、クラサの眞実（2）

リクセンから、ずっと続いていた緊張した日々から解放され、のんびりとした時間にもなれたこと、シエラの叔父サイモンが屋敷に到着した。

「シエラの叔父のサイモンです。姪が、大変お世話になりました。亡き両親と、兄二人にかわり、お礼申し上げます。」

サイモンは、その場にいたマーブルとミランダにたいし、深々と頭をさげた。マーブルは、

「シエラを助けたのは、グラセンだ。礼だつたら、グラセンに言え。おれ達は、やつたのみで、シエラの面倒をみていただけだ。」

「いざれ、ベルセアに行き、直接お礼を申し上げるつもりです。ところで、シエラはどこですか。シエラの夫となられた、あなたの御子息にもお会いしたいのですが。」

ミランダは、

「二人は今、町へ買出しに行っています。シエラ様がどうしても手料理で、あなた様を歓迎したいとおっしゃられましたので。もうしばらくしたら帰つてくると思います。」

マーブルは、

「ここで、旅のつかれがとれるまで、ゆっくりするといい。ただし、町には出ないでくれないか。ここに、客がきてくるのを、あまり知

られたくないんだ。シエラの事は、手紙で知っているよな。信じられないかもしねが事実だ。ライアスは、シエラといつしょだ。」

サイモンは、

「信じざるをえないでしょう。手紙の筆跡も内容も、ライアスそのものです。シエラでは、あのよつや的確な手紙は書けません。はじめこそ疑いましたが、何通もとどけば、疑う余地などなくなります。」

マーブルは、ライアスが、サイモンへの手紙をミランダにたくしていたのは知っていたが、そんなに何通も書いてたなんて知らなかつた。

「じゃあ、こっちの事情は、あらかた知ってるな。息子は、シエラといつしょにクリストンへ行きたがっている。だが、まったく役にはたたん。それだけは、覚えておいてくれ。おれは少し出かけてくる。」

マーブルは出て行つた。日課となつてしまつた墓参りだつ。マーブルが、サイモンに敵意をいだいていることは確かだ。ミランダは、その事をサイモンにわびた。

サイモンは、

「それだけの事を、我々はしたのです。この場で、彼に殺されたとしても、しかたないと思つていました。十三年前の事を、謝罪しようと考へていましたが、今の御様子ではとても口には出せません。なのに、シエラを保護してくださり、結婚までさせていただいて、叔父としては感謝の言葉もつきません。」

「あの、サイモン様は、お一人でここへ？」

サイモンは、ほほえんだ。

「冬山は、私一人では無理ですよ。供を数人つれてきています。ミランダさんのお仲間と、今じろあこさつをかわしてますよ。」

「もし、お疲れではなかつたら、鍛冶小屋へ御案内させていただいてもよろしいでしょうか。シエラ様から、自分がいないうちにサイモン様がいらしたら、例の物を見ていただくよう、言い付かっておりますから。」

「例の物？ 手紙にあつた銃ですか。それはぜひ拝見したいです。案内をおねがいします。」

サイモンは丁寧な男だった。ミランダのよつな女にも、身分の高さなど感じさせない、自然な態度で接してくる。ミランダは、レックスをあずける以上、どんな男かと多少警戒はしていたが、これら心配なさそうである。

シエラは、レックスとともに町で調達した食材をもち、帰り道を急いでいた。レックスは今、王家の剣の魔法により、屋敷のおじいさんに化けている。シエラもおばあさんだ。

レックスは、

「やうやく、もとにもどしてくれよ。ジーサンなんてやだ。」

「まだ、町から出たばかりよ。だいたい、レックスが屋敷から出た
いつて言ったのよ。姿見られちゃまずいし、ここの方法しか思いつか
なかつたの。だから、もう少しだけガマンして。それに、私もおば
あちゃんなんだしさ。」

「いいな、いいな。ライアスがいるやつは。なーんの苦労もなく、
あの剣つかえるんだもんな。おれなんか、いまだにうまく使えない
しさ。」

「また、その話。いい加減あきらめたら。それに、私だって、あの
子がいなきや剣はうまく使えないわよ。レックスと同じように、自
分でも使えるように練習してんのよ。それに、ライアスなんて言つ
ちゃだめよ。あの子、自分はシエラだつて決めちゃつたんだしさ。
レックスの事、父さんって呼びたいみたいよ。」

レックスは、ブンブン首をふつた。

「それだけはやめてくれ。気持ちだけにしてくれ。おれは、まだ十
八だ。自分の子供もいないのに、あんなデカイのに父さんなんて呼
ばれたくない。」

シエラは、あきれたようにレックスを見つめた。

「親になるつて約束して、あの子をつれてきたんじゃない。責任は、
しつかりとつてもらうわよね。そろそろ、変装をとくわよ。」

レックスは、もと元どおりだった。

「あいつが表に出でこると、やたら甘えてくるんだよな。子猫みた
いに、ペタペタしてくるしわ。なんか、幼児返りしてみたいたん

だ。まあ、かわいいといえればそつだけじゃ。」

「あの子は今、とにかく甘えたいの。だから、好きなだけ甘えさせてやつて。そのうち、もともとどるわ。」

二人は、屋敷の前まできていた。レックスは足をとめた。

「シエラの叔父さん、どんな男なんだ。おれには、昔の事があるから、なんか怖いイメージがあるけど。」

「レックス、クリストン行くの、やつぱり不安?」

「かもな。でも、行くしかないんだよ。おれが決めたんだしさ。」

パン、と銃声が響いてきた。サイモンがきている。シエラの顔は、パツと明るくなつた。手にしていた荷物をレックスにあずけ、走つていつた。

シエラの手料理は、ミランダの指導もあって、なかなかのものだつた。夕食は、シエラのたえまないおしゃべりと、サイモンの気のきいた話で笑い声がたえなかつた。

レックスも、サイモンの飾らない人柄に安心したようだ。この老夫婦もまじえた、この日の夕食は実に楽しいものだつた。

ただ一人をのぞいては、である。

そして、翌日、二人の若い夫婦と、これからのことについて話を終えたサイモンは、マーブルが出てきている墓へ、一人に案内しても

「うつ事にした。

墓は、見晴らしのよい場所にあった。マーブルは、天気がよければ、一日中ここにいる。マーブルは、丘のかれた草にすわり町をながめていた。

サイモンは、

「気持のよい場所ですね。ここからは、クラサの町が見わたせる。」

「だい、ここは、ジーサンのお気に入りだつたんだ。右側にある木、今は冬で枯れているけど、あの木はレックスが産まれたときのモンだ。春になつたら、レックスの髪と同じ色の花が咲くんだよ。ジーサンにひ孫の誕生を教えてくてな。」

「あなたに伝えたい事があつて、ここへきたんです。屋敷では、口に出すことがむずかしかつたので。」

「十三年前の事か。すんだことだ、忘れてくれ。」

サイモンは、マーブルのそばにひざをついた。

「義兄は、ドーリア公は、マルガリー・テ様憎しだけで、マーレル・レイを襲つたのではないのです。確かにそれもありましたが、別の理由もありました。」

「・・・今さら、何、言われても、おれにほんとこないんだよ。でも、それであんたの気がすむのなら話だけでもきてやる。憎しじゃなきゃ、何があつたんてんだよ。」

「十三年前に、すでに海の向こうの動きをつかんでいたのです。ドーリア公は、その当時から、バテントスの他国への侵攻を知っていたのです。」

マーブルは、

「それがもし事実なら、なんだって、マーレル・レイを襲つたんだ。」

「バテントスは、そのころからエイシアに目をつけていたのです。ドーリア公は、海の向こうの情報収集を熱心にしてましたからね。いずれ、やつてくると確信した義兄は、マルガリー・テ様の前の王、つまり自分の兄に内々にその事を相談してました。」

話をきいた王は、ドーリア公をまじえてのダリウス国会を開催を決め、バテントスの襲来の危機を公表するつもりでした。ですが、その矢先に、あの狩猟際の事故が起きてしまい、結局、国会の開催もバテントスの襲来の件も、棚上げされるかたちになってしまったのです。」

腹違いのマルガリー・テは、ドーリア公と氣があわなかつたのは事実だ。しかも、政治能力も皆無で、バテントスなど最初から話にならないのは分かりきつていた。

王位継承に敗北し、あせつたドーリア公は強引な方法を選んだのである。クリストン軍の、マーレル・レイ侵攻である。軍事力でおどし、退位させるのが目的だった。王は、マルガリー・テの幼い息子でもかまわなかつた。自分が後見人となれば、それでいいからだ。

その結果は、マルガリーテの自殺。そして、王子の失踪。ドーリア公が、あつさりと兵を引き上げ、クリストンに帰ったのも、マーレル・レイは、もはや、自分を受け入れないと知ったからである。

だが、宗主がいなエイシアは、バテントス以前にバラバラになつてしまつ。王子は、どうしても見つけなければならない。ドーリア公は、そういう思いで、レックスをずっとさがしていたのだ。

サイモンは、

「あなたに、この話が真実だとおしつけるつもりはありません。でも、現実にバテントスはやつてきて、クリストンは真っ先にねらわれてしましました。義兄も、死ぬまぎわに、自分のした事を後悔していましたようです。」

サイモンは、頭を地面におしつけた。マーブルは、いまいましげに見つめる。そして、重い口をひらいた。

「忘れると言つたはずだ。過去の負い目を背負つている男に、息子をたくす事なんてできないんだ。もういい。」

マーブルは、視線をそらした。サイモンは、頭をさげたままだ。シエラが、サイモンのえり首をつかみ、乱暴に顔をひきあげる。

「うそだ！ そんな事、ぼくは信じないぞ。あの男に、そんな思慮深い考えがあつたなんて、信じるもんか！」

レックスは、シエラをおさえた。サイモンは、えり首をひっぱられせいで、ゲホゲホしている。シエラは、

「ぼくの、ぼくのあの苦しみはなんだって言うんだよ！ それが真実なら、なぜ、ぼくに話してくれなかつたんだ。だから、みんな、反対しなかつたって言つのかよ！ ぼくは、一ヶ月も閉じ込められて、餓死寸前まで追いつめられて、それで、それで……！」

シホラは、ワッヒとレックスの胸に顔をうずめた。サイモンは、苦笑にみちた顔をしてくる。

「すまない、ライアス。言おつ言おつと黙つていたが、話せすじまいいだつた。」

シホラは、

「信じないよ。絶対信じないよ。話してくれたとしても、絶対、絶対信じない。君はいつも、あの男の顔色をうかがつていたね。クリストンは、あの男がすべてだつたからね。だれも逆らう者などいなかつたからね。ぼくは、あの男にきらわれてたんだろ？」「

サイモンは、何もこたえない。シホラは、

「きつとそうに決まつてる。でなきゃ、反対したくらいで、実の子供にあんなひどい事をするもんか。でも、もういい。ぼくには、レックスがいる。レックス、たのむよ。ここからつれだしてくれ。ぼくは、歩けそうもない。」

レックスは、泣いているシホラをだきあげた。ちらと花の木を見る。マーブルがいつのまにか立ち上がり、その木をなでていた。

「マール、これが真実だそうだ。けど、お前にはもう関係ないよな。やな話をきかせちまたな。お前も忘れて眠つてくれ。おれも忘れ

九、父さんの忘れ物

ショーラは、ずっと泣いていた。レックスは、ずっとだきしめてた。ショーラは、そのまま眠ってしまった。目がさめたら夕方だった。

ショーラは、はれぼつたくなった目を水でひやしていた。

「ひどい顔。目が真っ赤。叔父様もあんな事、話す必要なかつたのにね。私も、はじめて知つたけどさ。」

レックスは、

「マーブルのやつも、ショック受けてたみたいだ。さつきやつともどつてきただけど、ムツとして部屋に閉じこもつちまつたしな。」

「サイモン叔父様も、苦しかつたんでしょうね。それに、父様も、言い訳なんかする人じやなかつたしね。」

「ライアスはなぜ、父親にきらわれたんだ。反乱に反対して、きらわれただけじゃあない氣がするんだよ。それ以前に、なんかあつたんじやないのか。反乱に反対しただけで、塔に閉じ込めるなんて、おかしいと感じてたんだ。」

ショーラは、少し考えた。

「分かんない。兄様の記憶しらべても、よく分からないの。兄様が小さいころは、きびしかつたけど大切にされてたわ。母様の死んだあたりになるのかな。このあたりから、父様の態度が、よそよそしくなってきたみたい。兄様、かなり困惑してる。母様の死が関係し

てるのかな。」

「女房死んで、さびしかつたんじやないか。それで、ライアスは母親によく似ていて、顔を見るたびに思い出すから、そつたんじやないのか。」

シエラの母親は、シエラが一歳がそこのとき死んでいる。シエラは、母の顔は知らない。

「それも分からぬ。母様が死んだとき、父様、サラサにある母様の肖像画、みんな燃やしたんだよね。私、母様の事は、みんなからきいただけ。美人だったのは確かよ。私の髪と田の色は、母様と同じ栗色なんだよね。」

「でも、お前、心神喪失してたとき、母親の幻がそばにいたんだろ。幻をつくれるくらこなら、ある程度は覚えてるつて事じやないのか。」

「

「うーん、今となつては、はつきりしないんだよね。あの時の記憶は、かなりあいまいだしさ。けど、考えてみれば、金髪で青い田つてのは、ライアス兄様だけだつたな。シゼレ兄様は、父様とおなじ黒だしね。」

「金髪と青い田は、ダリウス王家の特徴だつて、マーブル言つてたよ。おれの縁の瞳は、マーブルからもらつたんだけどもさ。けど、この金髪は、母さんからのモンだつだつて。ライアスの金髪は、王家のモンじやないのか。」

レックスは自分のサラリとした金色の髪を手にとつて、シエラに見せた。シエラは、

「かもね。ライアス兄様は、レックスほどじやないけど、とてもきれいな金髪してたしね。王家の人は、レックスのお母さんの前の王様も金髪だつてきいてるし、黒だつた父様のほうが、めずらしくらい。私、兄様の髪、すっしゃりやめしかったんだ。」

「その栗色も、あつたかそうでこよ。結局、ライアスの原因は分からずじまいが。それさえ分かれば、もう少し、あいつの事、分かってやれたのこよ。」

「「めんね。でももつ、この話は、これくらいでやめと」。ちわられたくない過去の傷なんだしさ。今、あの子、眠つてるけど、起きたらたぶん機嫌悪いよ。あまり、変な事きかないでね。」

「なら出すな。機嫌直るまで、お前の中に閉じこめとおな。」

その夜遅く、マーブルはミランダに、マーレル・レイに行きたいとつげた。忘れ物を取りに行きたいと言ひ。ミランダは、

「それは、かまわないけど、忘れ物つて何？ 逃げる時、だれかに預け物もしてたの。」

「モノじゃない。十三年前の忘れ物さ。それを取りに行かないと、おれはお前といっしょになつても墓参りばかりしてしまつ。すまん、ミランダ。」

ミランダは、ため息をついた。

「あやまる必要ないわ。行きたければ行けばいいでしょう。でも、

あんた、ほんとに、私といっしょになりたいの？ 本心から、そう望んで求婚したの？」

「ほんとにすまん。けど、おれの十三年の意味を、もう一度ちゃんと考へて整理したいんだ。サイモンの話を信じたわけじゃない。信じてしまえば、マールの死はむだになる。おれが、必死でレックスを守りぬいた意味もなくなってしまうんだよ。」

「マーレル・レイに行けば、その答えが分かるとでも。」

マーブルは畳をふせ、床を見つめている。//ランダは、
「あんた、息子が手をはなれたから、さびしいんでしょ。私は、待つていたほうがいい？」

「おれは、身勝手な男だよ。下手すりや帰つてこないかもな。でも、一人には、なりたくない。やつぱり、お前には、ここにいてほしい。」

「

//ランダは、いい加減にしてと思つたが、だまつてゐる事にした。
今のマーブルに、何を言つても無意味だ。

次の日の晝過ぎ。クラサの町に旅芸人の一団がやつてきた。サイモンがきてから、屋敷の空気が重苦しくなつてゐる。シエラはまた、おばあさんに姿を変え、//ランダといっしょに町へ出かける事にした。

何もない田舎町では、ときおりおどずれる旅芸人は唯一の楽しみだ。大人も子供も、このときばかりは仕事の手をとめ、芸を見にあ

つまつてくる。

町の広場は、見物人でいっぱいだった。大道芸は、田舎のドサまでりとは思えないほど芸が立派で、シエラはひしゃぶりに楽しんだ。シエラが、特に気に入ったのは、お手玉だった。芸人の男の体のあちこちから、とりだされた玉は、あつといつまに増え、芸人の手をすきまなくクルクルまわっている。その見事な動きに見物客は歓声をあげていた。

「楽しかったね、ミランダ。レックスにも見せたかったな。」

帰り道、シエラはそう言った。ミランダは、

「見れるかもせんよ。町の人の話では、夜になると、芸人がそれぞれ各家庭をまわるそうです。こんな田舎じや、一回芸を見せただけでは、あんまり稼ぎはないですからね。」

「屋敷にもきてくれるかな。おじいさんとおばあさん、お金持つてるから、きっときてくれるよね。あのお手玉の芸人さんがいいな。」

ミランダは、笑った。

「さあ、どの芸人がくるかは運ですね。夕食を早めにして待つてましょ。とにかく、ライアス様の御様子は？」

「しばらくダメかな。心を閉ざしちゃったみたい。カラに閉じこもつていて、そんな感じ。できるだけ、表の事は分からぬようにしてる。目と耳をふさいでいる状態。あ、叔父様との話なら心配ないわ。あの子の知識と能力は使えるもの。これから的事は、私がちや

んとやるから。」

そうですか、//ランダはつぶやいた。

で、その夜、早めの夕食の後、シェラとレックスは夕食を食べた後のテーブルで、芸人を待ちながら、サイモンと「ぢやじぢや話をしていた。

シェラは、

「うん、クリストンのだいたいの事情は分かったわ。豪族達の協力もとりつけたし、あとは銃の量産ね。手紙でたのんでおいた鍛冶屋さんは集まってるかしら。今までつくっていた武器とは、だいぶちがうから大丈夫かな。」

サイモンは、

「実は、大砲をまねてつくってみたんだよ。見よう見まねだつたら、使い物にはならなかつたがね。銃は、ライアスが書いた詳細な設計図があるから、なんとかなるだろう。」

「あの試作品は、持つてつていいって。グラセン様が最初におつくりになられた銃とは、だいぶ構造がちがつてしまつたから、改造前の銃になれたマーブルさんには使いにくいたい。」

「それは助かる。実物があるなしじゃあ、だいぶちがうからな。ところでシェラ、お前達はいつクリストンへくるつもりなんだ。私としては、明日にでも、お前達をつれていきたいが。」

シェラは、レックスの顔を見た。レックスは、

「おれはいつでもかまわないよ。けだし、しづらぐのあいだ、身分はだまつていってほしいんだ。あんた、おれの事は、だれにも話してないよな。」

「知つてるのは、私がつれてきた部下だけだよ。口がかたい連中だから安心してもいい。」

レックスは、ホッとした。シエラは、

「じゃ、決まりね。」

シエラは、窓を見つめた。芸人は、まだこないのか。レックスは、「さつきから、窓ばっかり見てるな。なんか気になる事でもあるのかよ。」

もう、そろそろ寝る時間だ。シエラは、がっかりした。

「やつぱり、こんな町外れにはこないか。楽しみにしてたのにな。」

おじいさんが顔を出した。やつときたようだ。お手玉芸人だった。シエラは、大喜びでミランダ、そしてしぶるマーブルを寝室からひつぱりだした。

芸人の男は、こじやかにあいさつをした。そして、威勢のよい掛け声とともに、玉をとりだし、クルクルまわしあじめる。玉の数はドンドン増えていき、まわす玉の高さは、天井にぶつかりそうになる。おばあさんが、お金を数え始めた。

「ね、すごいでしょ、レックス。あんなにたくさんの中、体のどこに、かくしてんだろうね。」

芸人は、すばやい手の動きで、また体をさわる。そして、とりだした何かを、シエラとレックスめがけて、それぞれ投げつけた。

シエラのそばにいたミランダが、反射的にシエラを床に押し倒す。指の長さほどのナイフが、壁につきささつていた。芸人は、すぐさま家から姿を消した。ミランダが追いかけたが、見失ったようで、すぐにもどってきた。

レックスはマーブルをかかえていた。マーブルの右肩は血がにじんでおり、全身が、はげしくけいれんしている。サイモンが、壁のナイフをぬき調べ、首をふった。

「ゼルム毒蛾です。この毒は、牛一頭を簡単に殺します。まさか、旅芸人とは。」

マーブルは、けいれんする手で、レックスの顔をなでた。

「ア、アレク、ス。アレク。」

ニコッと笑つたあと、マーブルのけいれんはやんだ。

逃げた芸人は、サイモンとグラセンの部下につかまりしだい、毒を使い自ら命を絶つた。この芸人は、エイシアの人間だった。

サイモンは、

「雇い主が知られるくらいなら毒をあおぐ、まちがいなくプロの仕

業だ。バテントスに雇われたんだね。残りの芸人もつかまえたが、どうやら無関係のようだ。あの芸人は、数日前に一座に加わったばかりらしい。」

サイモンは、自らの失態を責めていた。警戒してたのは、バテントスだけで、エイシアの殺し屋までは注意がいかなかつた。

シエラは、

「私がマーブルさん、ひっぱってきたから。あのまま、お部屋にいたのな。」

シエラは、顔をおおひ。サイモンは、

「自分を責めるな。彼がいなければ、レックス君が死んでいたはずだ。子を失つた親の痛みは、とてもつらじものだ。彼は、笑つていたはずだよ。」

「レックスがかわいそつよ。ミランダさんも。」

サイモンは、シエラをだきしめた。そして、

「芸人は、お前とレックス君だけを正確にねらつた。バテントスはまちがいなく、レックス君に気がついている。お父上を埋葬したら、すぐにクリストンへ向かおひ。いいか、安全ではなくなつたんだ。」

シエラは、涙とともに泣なづいた。

おじいさんが、涙ながらにひくつた棺にマーブルをおさめ、出発

の用意をおえたあと、みんなは裏山に向かつた。そして、マーブルの祖父のとなりに穴をほり、そこへ埋葬する。

レックスは、木を見つめた。さわらうと手をのばしたが、やめた。この木は、あまりにも父のおもかげを残しそぎている。

レックスは、シーラに向かい、

「ゆうべ、ミランダと話したんだ。マーブルは、マーレル・レイに行くつもりだつたらしい。忘れ物を取りに行くつてさ。」

シーラは、

「忘れ物つて何？」

「分からぬ。ミランダの話をきいても、おれにはピンとこなかつた。だからさ、シーラ、その悪いけど、クリストンには先に行つてくれ。おれは、マーレル・レイに行く。そこで、マーブルの忘れ物がなんだったのか、しらべてみたいんだ。」

シーラは、びっくりした。

「ちょ、ちょっと待つてよ、レックス。叔父様の話、きいたでしょ。レックス、正体ばれてるのよ。また、ねらわれたらどうするのよ。私もいっしょに、」

レックスは、手で制止した。

「一人にしてほしいんだ。一人で、いろいろ考えてみたいんだよ。このまま、クリストン行つても、おれは、お前にオンブにダッコだ。」

それもしかたないと思つたけど、やつぱりいやだ。だから、こんな自分でも、できる事があるか考えてみたい。マーブルの忘れ物が分かれば、それも分かると思う。たのむ、行かせてくれ。」

シエラは、レックスの顔を見つめた。サイモンは、シエラの肩に手をおく。

「好きなようにさせてあげなさい、シエラ。まだ、春までは時間がある。レックス君、私とシエラは、君の帰りをクリストンで待つてるよ。」

シエラは、王家の剣をレックスにさしだした。そして、無理に笑顔をつくる。

「お守りよ。」

レックスは、受け取らなかつた。

「これは、お前に必要だ。それに、おれが持つてると、必要以上に正体がばれてしまう。おれの事は心配するな。まあ、一人で行くといつても、しょせん、一人じゃないはずだしな。」

レックスは、ミランダとサイモンの顔を見た。ミランダは、

「私は、あんたのあとを、コソコソつけていく気はないわよ。その甘つたれた顔も見あきてるしね。シエラ様についてくわ。」

サイモンは、

「私の部下は、君が危険だと判断しない限り手助けはしない。一人

旅で困った事があつても傍観しているだけだ。これをもつて行きなさい。旅費だ。たりなくなることに、また送ろつ。」

「金なんでもらえなによ。日雇いでもしながら行くつもりだよ。」

「時間が、かかりすぎる。春までには間に合わないぞ。遠慮しなくてもいい。これは領主の金だ。つまり、君の財産なんだよ。」

レックスは、受け取つた。サイモンは、

「君が産まれた町を一度見てきなさい。次に行く時は君は王なのだからな。」

レックスは行つてしまつた。シエラは皿をひそつた。ライアスが顔を出し、サイモンを横目でにらむ。

「シエラが、かわつてとたのんできたから、出できただけだ。しばらく一人になりたいつて。」

「そつか。あいかわらず妹思いだな。昨日は、すまなかつたな。」

「ぼくは、お前を、ゆるしたわけじゃない。ぼくに隠し事は、一度としないと誓う。」んざしたら、お前をハつ裂きにしてやる。」

サイモンは、肩をすくめた。

「やつと、クリストンのライアスがもどってきたな。お前は、そのくらいでちょうどいいんだよ。私はお前のその生意氣で威勢のいいところが、気にいつてるんだ。」

もう一人のシホラは、フンと鼻をならした。そして、クリストンの方向を見る。

「雪山なんて、ぼくは『めんだね』。一気に山脈を飛び越える。白竜、姿を現せ！」

よく晴れ渡つた青空に、白いドラゴンが姿を現した。白竜は、シエラ達を乗せた後、白い翼をはためかせ、クリストンへ向けて一気に飛翔する。だが、白いドラゴンは、人の目には、白い雲にしか見えないはずだ。雲は、スースと青空に白い軌跡を残し、山の彼方へと消えていった。

第一章へ続く。

九、父さんの忘れ物（後書き）

長い物語の序章とも言える、第一章を「一読ください、ありがとうございます」といいました。第一章の物語は、主人公レックスの父親であるマーブルの物語となっています。マーブルは性格的には、かなり問題のある父親です。決して理想的な父親像ではありません。ですが、信念の人もあります。苦しい中、ひたすら運命を耐え、そして命がけで自分の息子を守り、何一つ見返りをのぞまず、愛する息子を次の時代へとたくすために、生きたぬいた一人の男です。彼の生涯は、その後のレックスに深い影響を与えます。物語の主人公は、父から子へと受け継がれ、新しい物語がはじまっています。第二章もお楽しみいただければ、作者としてうれしいかぎりです。

第一夜、到着（1）

到着したら夜だった。道をまちがえたせいだ。^{はな}華の都マーレル・レイも、こう真つ暗じやあ、華も鼻も見分けがつかない。

マーブルからは、マーレル・レイは、夜でも明るく、人々がはなやかに行きかう町だときいていた。なのに、家や店はびつちり戸じまりをし、シンとしていて、道には人つ子一人、いや犬つころ一匹見当たらない。

いや、ネコがいた。真つ黒なネコで、夜目には見分けがつきにくい。うさんくさそうに、こっちをにらんだあと、ニヤーと鳴き、どうかへ行つてしまつた。

（な、なんだよ、ここ。ほんとに王都なのか。どこ行つても真つ暗じゃないか。だれもいないし。とにかく、泊まるところ、さがそ。）

レックスは、宿をさがした。けど、どの宿も閉まつており、扉をたたいても、呼び鈴を引つ張つても返事すらない。困つてしまつた。

（ひょっとして、王都にまできて野宿？ しかも、こんな寒い冬に。防寒用マント一枚だけで、凍死しろつてのかよ。こんなんだつたら、道まちがえたとわかつた時点で、前の町に引き返せばよかつた。）

レックスは、ブルッとふるえた。腹もすいてるし、泊まるところもない。でも、考えていてもしょうがない。寒さだけでも防ぐ場所をさがそう。ウロウロし始めたとき、ピリリーッと笛がなり、数人の警官に囲まれてしまつた。

「あやしいやつだな。お前、こんな夜に何をしていた。夜間外出は禁止されているんだぞ。あやしいやつを見たら、連行しろとの命令だ。」

レックスは、両手をしばられ、わけがわからないまま、警察署につれていかれた。

「名前、レオン・ナッシュ。年齢、十八。出身地、ゼルム。ゼルム人が、こんな夜中に町中で何をしていたのだ。」

レックスは、取調室にいた。いかつい顔の警察官ににらまれ、弱りはでている。

「だからあ。道まちがえたせいでのそくなってしまったんだよ。それで泊まれる所さがしていたら、あんたらに御用になってしまったんだよ。なんで、マーレル・レイにきたって？ おととし、死んだおふくろが、ここに出だつたんだ。それで、マーレル・レイってどんな町なのか見にきたんだよ。」

「ゼルム北部からベルセア、カイルからダリウスへか。ずいぶん遠回りしたんだな。」

「しようがないだろ。クリストンから海まわりで入れなかつたんだしさ。とにかく、釈放してくれよ。やつとついたと思つたら、これかよ。」

警察官は、レックスの身分証を、そばにいた警察官にわたした。

「マーレルでは、ある事件が発生しているんだ。犯行は主に夜間行わるから、外出を禁止している。」

夜、外出している人間は、特別な理由がない限り、警察署に連行しなければならない。まあ、お前はどうみても犯人ではないな。見栄えはいいが頭は悪そうだ。牢屋でよかつたら、今晚、泊まつていきなさい。毛布くらい出してもいい。」

「ここの人達は、都市名をマーレルと呼んでいるようだ。マーレル・レイは長いからだらづ。レックスは、

「牢屋かよ。明日、ちゃんと釈放してくれんだろうな。けど、頭、悪いはよけいだよ。」

警察官は、レックスが書いた書類をさしだした。

「少しばは勉強したほうがいい。マーレルの人間は、下町の子供でも、もつとましな字を書く。パンくらいしかないが腹もすいているだろ。あたたかいお湯もだそう。」

親切だか、バカにしてんだか。牢屋つてのは気にいらないが、外で凍死するよりはいい。でもって、牢屋のくさくて、かたいベッドで夜をすごし、翌朝早く、レックスは解放してもらつた。

今日は、朝からよく晴れている。陽射しも、この時期にしては暖かく感じる。レックスは、うーんと背伸びをし、朝飯が食べられる店をさがした。

（腹へつたな。パン一個じや、腹すいて眠れなかつた。飯食つたら、宮殿のほうへ行つてみるか。さつわとマーブルの忘れ物みつけて、クリストン行かなきや。）

周囲を見わたした。朝がくると同時に、閉め切つていた扉がひら

き、人の姿がチラホラ見える。とりあえずホツとした。

(事件つて、どんな事件かな。きいてくればよかつた。けど、安心した。昼間はふつうの町なんだな。)

「ねえ、そこのあなた。金髪さんで背の高い男の人さん。ちょっといいかな。」

「ふりむくと、背の高い美人がいた。歳は三十くらいか。

「わあ、きれいな顔。すてき。ねえねえ、いくつ。」

レックスは、顔をしかめた。女は、

「十八？ そんなに若いの。なんだー、お姉さんの守備範囲、はずれてるう。お姉さん、歳の差五歳でなきや、つきあわないことこしてんのよ。残念だわ。」

レックスは、立ち去りうとした。女が、レックスのマントをつかんだ。

「ほんと朝早くから出歩いてるなんて、あなた、旅行者ね。^{すいそく}推測すに、タバおやくつこて、そのまま警察かしら。」

「はなせよ。守備範囲じゃないんだろ。」

「ほんと、朝早くから開店してんの、つうの店だけよ。軽食屋だけど、朝食べるには、じゅづぶんでしょ。」

なんだ、客引きか。

「わかつたよ。あなたの店によるよ。だから、マントから手をはなしてくれ。」

女の店は、じじみたりとしていた。店内に入ると、いい香りがただよつてくる。

「そこにすわって。すぐ、用意するから。お茶もだしていいわね。ジョアンナ特性のハーブティーよ。」

女の名前は、ジョアンナと書つらじい。ジョアンナは、てきぱきとスープを皿にもり、パンをあぶり、バターとともに出してくれた。そして、ハーブティーをそそぐ。レックスは、ハーブティーに口をつけた。

ジョアンナは、

「ね、おいしいでしょ。これ、氣に入っているお密さんが多くてね。貴族も茶葉を買つてくれるのよ。お茶の配合もきかれるけど、もちろん営業秘密。」

店内に充満する匂いのもとは、このお茶だった。レックスは、おかわりをしていた。冷えて疲れた体にしみわたる、やわしさだ。

「あんた一人で、この店を切り盛りしてんのか。」

「そうよ。この前まで、男がいてくれたけど逃げられちゃった。で、やっぱり女一人は不安でしょ。夜が夜だしさ。それで、いい人いなあかなーって、さがしてたの。」

「悪かつたな。ただの密にしかならなくて。おれが、強そうに見えたから声かけたんだる。五歳が守備範囲つて、歳いくつだよ。三十一？」

「あら、女にそんな質問していいのかしら。あんた、マナー知らないのね。」

レックスは、パンにかぶりついた。さつあと飯食つて退散しよう。ジヨアンナは、レックスをからかうように笑う。

「ぶつきらぼうで愛想がない。やつぱり、若い子は、じつでなくちやね。ね、恋人いる。その顔なら、いてもおかしくないわね。」

「顔、顔、顔つて言つた。顔をほめて、次は頭悪そーとでも言つつもりだる。顔なんで、どーでもいーんだよ。頭さえ良ければさ。なんだよ、マーレル・レイのやつらって、人をほめて、けなす連中ばかりだ。」

「あんたつてさ、危険な匂いはしないのよね。だから、警察からあつさり釈放されたんでしょ。でも、その様子じやあ、だいぶ、頭のこと言われたみたいね。でも、しかたないよ。この町、勉強家多いもんね。」

マーレルつて、大学いっぱいあるんだよね。おつきな国立図書館もあるしさ。エイシア中から、学生さん集まつてくるのよね。カイルの領主様の弟さんもいたしね。

むかーしの話になるけど、クリストンのライアス様も、マーレルの大学にきたがつてたつて。でもほら、ドーリア公のせいです、くることできなかつたんだよね。かわいそつ、あんなに頭がよかつた

の上。」

きいていて、これほどおもしろくない話はない。レッククスは、スープを丸呑みした。

「うわうわ。いくらだ。」

ジヨアンナは、お茶をカップにそそいだ。

「もう少し、ゆっくりしてつたら。」

「つきいていいか。なんで、夜間外出はダメなんだ。外出禁止しなきやならない事件つて、なんなんだ。さつするに、通り魔か？」

第一夜、到着（2）

ジョアンナは、指をほおにあてた。

「通り魔って言えばそうかもしれないけど、人が殺されてるのよ。しかも夜ばかり。同じ手口で殺されてるから、同一人物の犯行らしいわ。つまり、連續殺人事件。」

「連續殺人事件？ おれ、犯人にされかけのかよ。だから、外出禁止なんだな。」

ジョアンナは、うなずいた。

「去年の秋口から、ちらほら出始め、今年になつてから、すでに三件出ているのよ。犯行は、下町が中心だけど、貴族達の住む地区でも遺体が出たから、警察はピリピリしてゐるわけ。」

「そりや、こわいな。それで、だれも夜の町には、いなかつたのか。みんな、びつちり戸をしめてたしか。でも、そんな凶悪犯、なんでもつかまらないんだ。」

「さあね。犯人は、三十前後の男だつてことくらいしかわかつてないわ。おかげで、うちの店も商売あがつたりよ。ここ、昼は軽食だけど、夜はお酒もだしてゐるのよ。夜のほうが、あがりがいいしね。」

「

レックスは、お金をはらつた。そして、店を出ようとすると、四五人の人相の悪い男どもが、ドヤドヤと店に入つてくる。そのなかの、中年太りしている、ドスのきいた顔がジョアンナの腕をつかん

だ。

「約束の期日だ。まあ、くるんだ。」

「いたい、はなして。」

「お前が、すなおにつこうくれば、この腕は、はなしてやる。つたく、この店の営業の期限は、昨日までという約束だったのに、まだ続ける気か。」

「あんたが、勝手に決めた期限じゃない。私は約束してないわ。出て行つてよ。私、あんたのとこにもどる気なんてないわ。いたい、いたいってば。」

男は、ジヨアンナの腕をぎりぎりしめあげた。レックスは、ここは下手な正義感ではなく、逃げたほうがいいと思つたが、男の手下らしき者どもに出口をふさがれてしまつ。

ジヨアンナは、

「那人、ただのお客さんよ。新しい男じゃないわ。出してあげよ。」

レックスは、

「お、おれ、ただの客です。金、はらつたから出でていつていいですか。」

中年男は、出してやれと命じた。レックスは店から逃げた。が、やつぱり、人がいいのか正義感か知らないが、気になつて、店の様

子をかくれて見ていた。

ジョアンナが、ひっぱりだされた。今度は、腕ではなく、髪だ。レックスは、がまんできなくなつた。

飛び出そうとするレックスの肩を、ポンとつかむ手があった。ふりむくと、レックスよりも大きな男が、いつのまにか背後に立っている。黒髪と黒服、黒マント、浅黒い肌、全身ほぼ真っ黒な、コウモリみたいな大男だ。

「コウモリ男は、レックスをおしのけ、さわぎのなかへと入つていった。そして、

「せまい道で、朝から、いい迷惑だ。女をつれだすのは勝手だが、こんな場所でさわぎをおこさないでほしいね。通行人が、ここを通れなくてこまつてゐる。さわぎをおこすんなら、外出禁止令が出てる夜にでもしる。」

人相の悪い手下が、いつせいにコウモリ男におそいかつてくる。コウモリ男は、むだのない動きで、手下どもを瞬時にたおしてしまつた。男どもは逃げ出し、ジョアンナは解放された。

「フー、だれだか知らないけどありがとう。たすかったわ。」

「コウモリ男は、

「ただの通りすがりだ。じゃあ、おれは行く。さつきの連中がまたきたら、あんた一人でなんとかするんだな。」

「まつてよ。あんた、強いのね。歳、いくつかしら。」

去りかけた「ウモリ男は、ジョアンナをチラとみた。

「悪いが、あんたは、おれの守備範囲外だもんね。ボディーガードだったら、他をあたってくれ。」

「ウモリ男は、『じこかくと去つてしまつた。ジョアンナは、やれやれと乱れた髪を直しつつ、店へと入つてこぐ。レックスは、ホツとして歩き出した。しばらく歩くと、さつきの「ウモリ男がいた。男は、

「やすっぽい正義感は、身をほろぼすぜ。たとえ、体力に自信があつても、自分が素人だと考えるなら、さつきと逃げたほうがいい。さつきのやつらは、マーレルに巣食う裏組織のやつらだ。下手に手をだしたら、今度はお前が田をつけられるぞ。」

「あんた、わざわざそんないとおもつたために、こんなとこでまつたのか。」

「まつてたわけじゃない。ただの通りすがりだつて言つたろ。お前の姿が見えたんだぞ、少しばかり忠告してやるつと思つてね。ただ、それだけだ。」

レックスは、警戒した。

「親切にありがと。じゃあ、これで。」

「まじよ。逃げる」とはないだろ。おれが、うそんべーのは仕方しがたないが、もう一つ、忠告しておく。さつきの女は男だ。女の格好をした男なんだよ。だから、守備範囲外だと言つたんだ。お前には、

わからなかつたらうがな。」

「男? それ、ホントかよ。ぜんつぜん、わからなかつた。」

「セウコウヒーとだ。じゃあな。」

「ウモリ男は、行つてしまつた。レックスは、また歩き出す。

（なんだつたんだ、セウモリのやつは。変になれなれしいやつだつたな。それに、すごい強かつたし。まさか、バテントスの殺し屋。でも、殺し屋つて、殺す相手に、こんなになれなれしくするのかな。）

レックスは、自分の周囲を見回した。サイモンの手下が、つねに自分の周囲にいるはずだ。

（素人のおれじやあ、気配なんて読めないか。いるんだかいないんだか、よくわからぬ連中だな。まあ、ほんとに危険になれば出てくるはずだしな。とりあえず、セウモリの男は、なれなれしいだけの、おせつかいかもしれない。）

レックスは、富殿方面に向けて歩き出した。マーレルのあちこちに設置されている案内板を確認しながら進む。かつて、自分が住んでいた町なのに、レックスは、ここです「した記憶はない。

（ま、五歳かセウモリのやつは、おぼえてるはずないか。そりそり富殿だな。）

富殿に向かう道は、バリケードによつてふさがれていた。立ち入り禁止の看板かんばんがある。

（なんだよ、これ。せっかくきたのに入れないのかよ。宮殿見なきや、忘れ物がなんだつたのか、手がかりすらつかめないじゃないか。）

レックスは、バリケードを乗り越えようとした。

（ここは、もともと、おれの家なんだしな。かまつもん、やばい、
警官だ。）

レックスは、警官に見つかる前に、その場を去った。また、警察署に逆戻りはいやだ。レックスは、マーブルの家、つまり、自分が産まれた家へ向かった。

家は、貴族達が住む区画から、だいぶはずれた場所にあった。家の大きさも、ベルセアのグラセンの家より、少し大きい程度である。すでに他人が住んでいるので、外観だけを見て、その場をひきあげた。することがなくなつた。午前中、てきとうにマーレルの町をぶらついて、昼を食べた後、今日の宿を選んだ。

午後、することもなく、ベッドで「ロロロロ」としてみると、なんだか眠くなり、めずらしく昼寝をしてしまう。ゆづべ、牢屋でよく眠れなかつたせいか、気がついたら夜だった。

腹がすいてたが、外出禁止令のおかげで、外に出ることができるない。第一、店は、どこも閉まつていてる。

真つ暗だったので、室内のロウソクに火をともした。ポツと明るくなると、自分の荷物のそばに包みがあつた。旅費と、肉をはさんだパンだ。

（つたく、姿くらい見せろよ。いつもこれだ。おれが、寝すぎで夕飯食いそこねたのを知つてて、金だけじゃなく、差し入れもしてくれたんだな。）

レックスは、パンをかじつた。まだ、ほんのりと暖かい。これが置かれて、さほど時間はすぎていはないはずだ。

シエラはどうじつるかなー、とか考えつつ、レックスは最後の一口をのみこんだ。

第一夜、再会（一）

やつぱり、昼寝しそぎて眠れない。眠れない夜は苦痛でしかない。レックスは起きた。そして、マントをまとい、窓をしづかにあける。一階の部屋だったので、飛び降りることなく外へ出た。そつと窓を閉め、今度は警官に見つからないよう慎重に走る。行き先は、富殿だ。

（富殿行かなきや、マーレルきた意味ないじゃないか。マーブルの忘れ物は、富殿に行けばわかるかもしれない。せめてヒントくらい。）

警官には見つからなかつた。レックスは、体力があるので長距離走つても、たいしたことはない。休みなしに走り続け、例のバリケードのところまできた。

少し、息をととのえる。バリケードは、柵さくで道をふさいでるだけで、よじ登れないほど高くはない。レックスは、柵に手をかけた。ギシギシと音をたて上り、向こう側に飛び降りた。そしてまた走る。

富殿まできた。警官は、立ち入り禁止の富殿まで、見回りにこないはずだ。月明かりが、廢屋はいやとなつた富殿を照らしてくる。レックスが見た富殿は、当時のままで火のあとがなかつた。

（火を放つたというけど、全部が全部燃えたんじゃなかつたんだな。考えてみれば当たり前だな。こんなデカイ富殿丸ごと燃やすには、一人じやむりだ。みんなして、火が出れば、あわてて消すしそ。

それに、死んだのは、火付けの張本人の女王一人で、他は無事だ

つたつて、グラセンからきいてるし、火事の規模も考えてたよりも小さかつたかもしれない。）

レックスは、宮殿の敷地に入り、内部に入れそうな場所をさがした。どの扉もカギがかかっていたが、壊されている窓を見つけたので、そこから侵入する。宮殿内部には、調度品らしい物は何もなかつた。ガランとした、ホコリっぽい廊下や部屋がいくつもあるだけだ。

（みごと、なんにもないな。ドロボウでも入ったのかな。まあいいや。玉座の間は、どこだろう。）

焼け焦げた場所に足をふみいれた。一つの大きな部屋を中心に、その周りに火災のあとがしつかり残っている。

（こ）がたぶん、玉座の間だ。母親が、火を放ち自殺をしたのは。

（マーブルとおれが、（こ）から脱出したあと、おふくろは一人になつた。けど、使用人達は、まだいたはずだ。使用人の目をぬすんで、玉座に火をつけたのか。ドーリア公の軍勢さわぎで、宮殿中、ふるえあがつていたから、気がついたら、おふろくは死んでいて、火はここを中心に燃え広がつてたつてことかな。）

レックスは、足元の燃えカスをふみつけた。パキリと軽い音がしきだけた。死ぬまぎわ、自分の母親はどんな思いだったのだろう。

だれかに見られている気がした。背後をふりむくと、フワリと人影が見え、すぐに消えた。レックスは、ゾッとした。

（ま、まさか幽霊。見えた？ シエラにあづけた王家の剣なしで？）

レックスは、怖くなりその場から走った。今夜は退散しよう。そのまま、宿へとわき田もふらすもびつ、ベッドの上でゼーザーしていた。

（おふくろの幽霊なのか。死んだのは、おふくろ一人だし。玉座の間にいたのか。ライアスみたいに成仏できずにか。）

レックスは、室内に用意されていた水差しから水を飲んだ。

（ライアスに憑かれ、シエラがおびえたわけだ。やつぱり、怖いな。でもまだ、おふくろだという証拠がない。けど、夜行くのは、やばいな。）

レックスは、そのままフトンを頭からかぶり、無理やり眠ることにした。さつきの出来事は、夢にしてしまおう。

翌朝、少しおそめに起きたレックスは、朝食を食べに宿から出た。そして、朝食を食べたあとは、またすることがなくなり、どうじようかと考えていた。

（富殿も見たし、そろそろ、クリストン行こうかな。サイモンは、部下が、おれがマーレルから出たのを確認したら、すぐに案内のために姿を現すとか言つてたな。けど、マーブルの忘れ物は見つからなかつたな。何を忘れたんだろう。）

レックスは、足をとめた。

（まだだ。おれがまだ納得していない。昨日、今日、じゃあ、マーレル

にきただけで、何も見ちゃいない。たしか、国立図書館があるって、昨日の女？が言つてたな。そこへ行つてみるか。）

レックスは、案内板をさがした。そして、国立図書館へむけて、また歩いた。国立図書館は、官庁街という場所にある。官庁街は、その名のとおり、ダリウスの国を動かす組織が集まっている行政区画だ。

さすがにここは、道を歩いている人種がちがう。レックスみたいな一般人の姿は、ほとんどなく、上流階級の姿ばかりが目立つっていた。

巡回している警官に、国立図書館の場所をきく。すぐに教えてくれたが、国立図書館は、立ち入りは禁止されていると付け加えられた。

レックスは、また立ち入り禁止かよ、といやになつた。警官は、

「あそこには、マーレルの古い蔵書や博物類がたくさん収納されているんだよ。中には、国宝級の物もあるんだ。図書館と言つよりも、マーレルの知的財産の宝物庫なんだよ。

そんな場所だから、国立図書館を使えるのは、許可証をもらつた学生か、学者、研究者くらいのものだ。貴族といえども、ただ本が読みたいだけじゃあ、中へ入れてはもらえない。まあ、あきらめることだな。」

警官は、行つてしまつた。レックスは、がつくりくる。なんだか、マーレルの町自体が、自分を拒否してゐみたいだ。

（おれ、ほんとにここのは出身なんだよな。一番偉い王家の人物なんだよな。なんか、自信なくなってきた。）

すなおにクリストン行こう、もう、つかれた。シエラの顔が見たい。トボトボ歩いていると、同じ服装をした若者の束に出くわした。自分と似たような年頃の青年達だったので、マーレルの大学生だとわかった。

レックスは道をゆすり、楽しそうにしゃべる学生の姿を見ていた。その中の一人が、レックスの視線に気がついた。不愉快そうに眉間にしわをよせ、ツカツカと近寄ってくる。

「用もないのに、人をじろじろ見るな。じつに失礼だ。さつさとどこかに行け。」

いかにも貴族丸出しの態度に言葉を返す氣もなく、その場を去ろうとした。学生は、

「まてよ。謝罪くらいしろよ。人を不愉快にさせておいて、だまつて帰るのは礼を失する態度だぞ。」

レックスは、ムカツときた。

「さつさと行けと言つたのは、お前じゃないか。ああ、あやまりやいいんだろ。じろじろ見て悪かったな。これで気がすんだろ。」

レックスの態度に、学生達はざわめいた。貴族に対する、一般民の態度ではない。けど、レックスの堂々とした体格にひるんだのか、ヒソヒソする程度でおわっている。

田の前の学生だけはちがつた。

「お前、マーレルの人間じゃないな。旅行者か。どこからきた。言葉のアクセントが違うな。これだから、田舎者の旅行者は、めざわりなんだよ。なんでも、めずらしがってジロジロ見るからな。」

「田舎者でわるかつたな。たしかに旅行者だよ。制服きた学生なんて、はじめて見たしさ。おれとおんなじくらいかなーって、見てただけだよ。なんだよ、国立図書館あるつてきいたから、わざわざきたのによ。立ち入り禁止のうえ、制服見ていただけで、ナンクセつけられるしさ。」

「国立図書館？ ただの観光か。」

「本を読もうかと思つただけだ。マーレルについて知りたいんだよ。マーレルのことは、何も覚えてないから。ここに、五歳までいたんだ。おととい、十三年ぶりに、帰つてきたばかりさ。」

「十三年前？ ドーリア公のときか。君も、あのさわぎで町を脱出した人間だったのか。あの時は、ずいぶんたくさんの人人が逃げ出したんだよな。けど、一年以内に、ほとんど、帰つてきたときいってる。なんで、いま」「う。」

「親父が死んだんだよ。でも、もういい。昔、住んでいた家は人手にわたつてるし、おれの居場所はどこにもないみたいだ。この町には、もう用はない。」

レックスの金髪が、フワリと風になびいた。学生は仲間に向かい、先に行くよう言つ。一人残つた学生は、

「・・・本を読みたいのなら、国立図書館に入れてやつてもいいよ。ついでに。」

さつ さまでとはガラコとちがつ態度に、レックスはとまどつた。

「ちよつとまでよ。お前、何をたくさんでんだ。さつきまで、おれのひと失礼だのなんだのと、さんざんわめいてたじやないか。どういつ風のふきまわしだ？」

学生は、レックスの金髪をながめた。

「君の金髪はね、ダリウス・カラーとよばれる色なんだ。王族に、あざやかな金髪をもつ人が多かつたからね。その色にあこがれて、ダリウス・カラーに染める人が多いんだよ。ぼくの亡くなられた母上も染めてたんだ。君のは地毛だる。」

レックスは、

「なんでそんなことをきく。おれがどんな色してたって関係ないだろ。」

「君の色は、特にきわだつている。亡くなられた女王様も、そんな色だつたけど、あざやかさら君が上だ。少し赤がまじつてると、より強い色合いになつてるんだよ。」

「死んだ親父は、見事な赤毛だつたからな。だから、なんでそんなことをきくんだよ。」

「君の父さんの名前は、ウォーレン・サクセスだろ。」

レックスは、ドキリとした。

第一夜、再会（2）

アランは、意味ありげに笑った。

「ぼくは、昔、君の遊び相手として、宮殿にあがつてたんだ。だから、君の父さんの事は、よく知っているんだ。」

レックスは、う、となつた。けど、できるだけ表情には出さない。

「なんの話をしてるんだ。おれは、お前なんか知らない。他人のまちがいじゃないのか。」

「最初は、たしかにぶしつけな視線に腹がたつたよ。けど、話してるうちに、どこかで会つたような気がしてきたんだ。君の髪を見て、やつとわかつた。ぼくは、アラン。アラン・モーガン。君はアレクスだる。」

「知らんな。他人のまちがいもたいがいにしろよ。おれの名前は、レックス。じゃあな、アラン。」

レックスは、去ろうとした。アランが、レックスの手をつかんだ。

「まちがえるはずがない。君の事は、この十三年、一度もわすれたことはない。その緑色の目も、はっきりとおぼえている。当時、ぼくは七歳かそこらだったけど、それでも、はっきりとおぼえているんだよ。ずっと、生きていると信じて祈り続けていたんだ。」

「しつこいな。髪と目の色くらいで、かんちがいするな。」

警笛が、ピリワードと笛をふいて走ってきた。はた田には、学生が、からまれているようにしか見えない。アランは、レックスをひつぱつた。

「アレクス、こつちだ。官庁街でつかまると、君はまちがいなく警察署に連行されるや。」

「もう、おととこされてるよ。夜ついたんで、不審者にまちがえられた。それで、一晩牢屋です」した。

一人は、公園の植え込みにかくれ、うまく警笛をやつす」した。アランは、

「連行されたつて？ 独り？ 身分は、ばれてないだらうな。」

「偽の身分証があるんだよ。あー、もうめんどくさくなつた。お前の言ひとおりだよ。まさか、こんなところで、昔の知り合いで出くわすなんてな。けど、おれはお前のことなんて、わいぱりだ。」

アランが周囲をさぐり、安全をたしかめてから、一人は公園を出て図書館に向かつた。レックスは、

「おれのこと、おぼえてる人間がいるなんてな。そういうや、カイルの領主もおぼえてたな。おれ、そんなにわかりやすいのか？」

「その髪の色なんだよ。地毛で、そこまであざやかな色は、めつたにない。だから、おぼえてしまつんだよ。それに君、顔立ちもいいしや。」

「それで、次のセリフは、頭の方はさつぱりだ、だろ。もういい。」

アランは、

「君は十三年、どこで何をしてたんだ。」

「最初の何年かは、グラセンという坊主の援助をうけての逃亡生活。そのあとは、ゼルムで運び屋。死んだ親父がなげいてたよ。今じゃあ、下町の男だつてさ。お前も最初は、そう思つたんだろ。」

「まあ、ね。身なりが身なりだしね。マーレルには、一人で？」

「見えないガードがいる。なんかあつたら出でくる。」

「ガードって、君はだれかの保護をうけているのか。」

「今は、クリストンかな。反バテントス勢力のサイモンって男の部下だ。おれの嫁のシエラの叔父さんなんだよ。おれは、クリ斯顿のお姫様と結婚したんだよ。」

アランの足が止まった。

「結婚、君が？ 相手は、クリストンのシエラ姫だつて？」

レックスは、ほーらきたと思つた。

「そんなに眉間にしわをよせるな。結婚したのは、サラサにいるシエラじゃない。ありや、偽物だからな。国立図書館は、まだ遠いのか。長くなるから話はそこでしよう。ところで、なんでお前が国立図書館に入れるんだ。」

「ぼくの父上が、あそこの館長なんだよ。研究好きの学問好きの行き着く先が、あの力ビくさい図書館だったんだよ。けど、おだやかじゃないね。マーレル・レイは、君の結婚を祝福しないと思つよ。」

「話もきかずに、そういう結論になるんだな。まあいい。とにかく国立図書館行こう。お前の父さんにも会いたい。当時のこととか、こつちも知りたいことがたくさんあるからな。」

レックスは、図書館正面ではなく、裏口から中へと案内された。建物は、外から見ても大きかつたが、内部も広くて大きな部屋が、いくつも並んでいる。その広くて大きな部屋には、さまざまな本や資料、標本、博物類などが大量におさめられていた。

「でかい建物だな。図書館というよりも、ちょっととした宮殿じゃないか。いつたいどれくらい本があるんだ。この部屋、なんか変な標本みたいなの、たくさんあるな。アルコール漬けの内臓みたいなのがあるけど、なんの内臓かわかんないな。人間のか？」

各部屋には、扉がなく、廊下から内部が見えるようになっている。レックスは、ある部屋の前で足をとめ、興味深そうに内部を見ていた。アランは、

「動物の胎児だよ。別の部屋に人間のもあるよ。全内臓、すべてのアルコール漬けがね。え、見たいって。ふつう、気持ち悪がるんだけどもね。蔵書の正確な数はわからない。それに、めずらしい文物も多いんだ。エイシアの歴史、いやすべてが、そのまま収まってるような場所なんだよ。」

「立ち入り禁止も納得だな。めずらしモノ好きの金持ちに荒らされ

ちやあ、たまらないものな。」「

アランは、階段をのぼってすぐの扉をトントンたたいた。ここが館長室らしい。返事があり、アランはレックスを室内に入れた。

丸いメガネをかけ、だいぶ頭がつすべくなつた五十半ばくらいの男が、本と書類の山から顔をだした。

「お帰り、アラン。お前が友達をつれてくるとはめずらしいな。大学の学生には見えんが、どういつお人なんだい。」「

アランは、父親の耳にヒソヒソつぶやいた。アランの父は、レックスを見つめた。

「アラン、その話はもう少し待ちなさい。お前の早とちりかもしれない。私が直接確かめてみよう。」「

レックスは、ぽりぽり頭をかいた。

「証拠だせと言われても、なんにも持つてないよ。王家の剣は、シエラにあずけちまつて、今クリストンだしさ。カイルの領主からは、結婚証明書もらつたけど、それもグラセンにあずけて、今ベルセアだ。」「

「君の話だと、君はつねにガードされているはずだ。つまり、「

館長は、壁にかざつてある骨董品のオノをもつてきて、それをレックス目がけて、いきなりふりおろした。その瞬間、オノが館長の手からふつとんで床にころがつた。

レックスは、あーあと思つた。窓の外を見る。冬でも枯れない常緑樹の木がたくさん見え、ここは一階だから、その木のどれかから、こいつを監視してゐるのだろう。

館長は、床にじりもじをついていた。

「な、何がおきたんだ。手からオノが、はじかれた。」

レックスは、床のオノをひろい、

「あんた、むちゅくちゅな人だな。見かけによらずだ。いきなり、オノふりおろされてびっくりしたけど、下手すればあんた、今ごろ、あの世行きになつてたんだぜ。」

レックスは、オノを見せた。オノの刃には、小さな弾がしつかりと食い込んでいる。

「銃だ。筒の中に入れた弾を火薬でとばす武器だよ。バテンツの大砲を、うんと小さくしたものだと考えればいい。シエラのやつ、もうつくつて、ガードにわたしてたんだな。館長さん、あんたに殺意がなかつたから、おどしだけですんだんだ。けど、一度目はたぶんないぜ。」

レックスは、窓を指さす。窓には、ヒビに囲まれた小さな穴があいていた。アランと館長は、ゾッとした。レックスは、

「これでわかつたる。おれは本物だ。あんたにききたいことが、たくさんあるんだ。」

レックスは、腰がぬけている館長の手をとつた。館長は、

「ここなにおそろしい思いをしたのは、ドーリア公以来ですな。しかし、あなたは度胸じきょうがありますね。よく、あるような、おやひしい者達とともにいられますね。」

「ガードの顔なんて見たことないよ。おれの行動のじやまをしないよ、かくれてガードしてんだ。けど、おれはここへくるまでに、なんどもバントスがらみの襲撃しゆげきをうけている。あのくらいのガードがつかなきや、一人で行動させてもうえないんだよ。」

「まずは、あなた様のお話をおきかせください。あなた様のおかれた状況を、くわしく知る必要がござりますので。」

じつちの話ははつとり早く終らせ、十三年前の話を館長からききたかったが、あれやこれやしつこく質問をうけて、レックスは、ライアスと王家の剣の秘密をかけて話し続け、気がついたらもう毎まいだつた。

三人は、館長室で昼食をすませ、少し休憩してから、館長室かんぢやうしつやく十三年前当時のことを話してくれた。

まあ、ありきたりと言えば、ありきたりで、マーブルとグラセンからきいたような話ばかりで、忘れ物のヒントには、なりそうもなかつた。

館長は、

「あなた様のお父上は、よく知っています。彼は、私が大学で教鞭うべんをとつていたときの教え子なんです。私が大学をやめて、ここかくの

館長になつたさいに、私のつてを使って、お父上は研究員の資格をとり、ここによく遊びにきてたんです。彼は、この図書館のしづかな環境が気に入つていたようです。富殿に入られたあとも、息抜きのよつにここを訪れていましたよ。」

「おふくろもいっしょにきてたのか。」

「いいえ、女王陛下は本は苦手で、文字を見ただけで頭痛がする方だつたようです。」

レックスは、自分の頭の悪さは、やつぱり母親似なのかと落ち込んでしまつた。でも、文字を見るだけで頭痛とは、ある意味、救いきれない。館長は、

「ひがらこいらしげください。お見せしたい物がござります。」

レックスは、四階へとつれていかれた。長い廊下を歩き、一番奥の部屋の扉をあけると、ズラリとした肖像画が壁にびつちりとならんでいる。館長は、歴代の王の肖像画だと説明した。

「もともとは富殿にあつたものです。富殿がああなつたさい、ここへ移されたのです。」

富殿に何もなかつたのは、泥棒を警戒して、調度品をあちこちで運び出したからだつた。その中の肖像画と、王家が所有していた、めずらしい文物が図書館の保管となつた。

「ここで受けた保管品は、そのままここにあります。他は雲散霧消したよつです。高価な物ばかりですし、保管場所も限られてましたから、十三年のうちに、だれかの家や質屋にあつたとしても当然

でしううな。」

レックスは、運び出した意味がないんじゃないかと考えてしまつ。まあ、自分は死んだとされているんだから、富殿の財産は国家の物となり、最終的にはダリウス国民の物となつたのだろう。そう考え、納得することにした。

「このお方です。マルガリー・テ女王様です。」

金髪で青い目をした、王家の特徴そのままの女が、そこにいた。たしかに美人だ。けど、この肖像画は、女王よりも女優だ。

館長は、女王のとなりが、前王だと説明した。つまり、女王とドーリア公の兄。こつちは、王様の威儀いげんがある。シエラの父ドーリア公が、バテントスのことを自分の母親に相談しなかつたわけが、この一枚を見くらべてよーくわかった。

（こんな女相手じゃ、話にならないよな。無能な女王だつて、マーブル言つてたけど、おれが見ても、そう感じる。もしも、おふくろが生きていて、こまだに女王だったら、エイシアはどうなつていたんだろう。）

考えるだけでもおそしことと思つた。たぶん、すでにバテントスの属国だ。バテントスは相手の事情を調べつづけてからやつてくる。

館長は、四百年くらいい前前の古い画の前にレックスをつれてきた。この肖像画の王は、他の肖像画と比べて、比較的若い。たぶん、三十歳前後のものだ。王族らしい品のよい顔立ちから優雅さが、かもしだされている肖像画だ。

「アレクシウス大王です。彼は、海の向こうの大陸の一部を征服し、属領とした王です。彼は英雄王として歴史に名を残しています。属領はすでにありませんが、あなた様のお名は、この英雄王からいただいたと、お父上は話しておりました。お母上様の御希望だつたようです。」

アレクシウスなんて、時代おくれの名前をよくつけたなと感心してたくらいだ。たぶん、頭の悪い母親が、あとをきかれずに、英雄王の名だというだけで、つけたのだろう。

（おれが即位したら、アレクシウス一世王になるのかよ。完全に名前負けする。冗談じゃない。いつそのこと、改名したほうがいいかも。偽名のレックスのほうが、今じゃあ、しつくりきてるしや。）

館長は、知りたい王はいるかとたずねた。レックスはもういい。館長室にもどり、茶でも飲むことにした。レックスは、部屋を出る前に、母親の肖像画をもう一度見つめた。

（母さんと一度くらい、話がしてみたかったな。おれ、母さんと話した記憶がないから。）

肖像画に、黒い影が重なったように感じた。レックスはまたかと思ひ、バタンと扉をしめた。話をしたいなんて考えなきやよかつた。背筋がゾッとしている。

「どうかしましたか。」

覗き込んでいるレックスに館長は声をかけた。レックスは、なんでもないと答えた。

第三夜、執着（1）

レックスは、モーガン家の世話になることにした。モーガン家は、マーレルの中流貴族だが、レックスの父親のような地主ではなかつたので、その生活は実につつましいもので、こじんまりとした家には、中年の使用人の男が一人いるだけだつた。

夕食まで時間があつたので、レックスは近所を散歩することにした。このあたりには、官庁街につとめる貴族達が多い。収入の中身もモーガン家と似たりよつたりのようで、こじんまりとした家が密集している感じだ。

（マーラの商人の家のほうが大きかつたな。お役所勤めと自分で商売するどじや、収入が違うんだな。マーブルは地主だつたから、家の大きさのわりには、いい暮らししてたみたいだし。クラサの別宅のほうが、こつちの本宅よりもでかかつたしな。）

「あら、昨日の金髪さんじやない。こんなとこで会つなんて奇遇ね。きぐう」

声をかけられた。ふりむくと、昨日の女？がいる。たしか、ジョアンナとか。

「なんであなたが、こんなとこにいるんだ。」

「それは、こつちのセリフ。私は商売。茶葉の宅配してんのよ。何軒けんか回つて、最後はモーガン様のとこね。」

昼、図書館で飲んだ茶の味は、この女？のとこで飲んだ茶と同じ

味がしてた。

レックスは、

「なあ、なんであんた、そんな格好してんだ。あんた、男なんだろ。」

ジョアンナは、レックスの口をふさいだ。

「バカ。そんなこと知つても口には出さないの。失礼じゃない。私は女よ。女でいいじゃない。それでも、それ以上、何か言つのだつたら、あんたの顔、ツメでぐぢやぐぢやにしてやるから。」

「わかつた、わかつた。ツメをこいつに向けるなよ。やたら、背の高い女だと思ってたら、そういうことだつたんだな。ヤボにこときいた、おれが悪かつたよ。だから、ツメひつこめてくれ。」

ジョアンナは、フンと顔をそらした。レックスは、

「昨日は、やばかったな。あれから、あの変な男どもはこなかつたか。」

「こなかつたわよ。あの時は、あんたが、たすけにきてくれるのを期待してたけどもね。まあ、十八の子じやあ、無理があるものね。ねえ、あんた、あの黒い男と無関係なの。」

「無関係。実際、たすけようとしたよ。そしたら、先にあの口ウモリ男リ男が割りこんだんだ。おれがたすけに入つても、あの口ウモリ男ほど、うまくはいかなかつたさ。」

「ハカモリ男ね。イメージぴったり。また会えないかしり。」

「なんで、あんな連中に手をつけられてんだ。」

ジョアンナは、ちょっと考えた。

「あの男ね、私の父親なの。」じーだけの秘密だけど、やばい組織のドン。通称、闇商人のマロー。私を組織に連れもどさうとしているの。」

「父親？ ゼンゼン、似ていなかつたけど。」

ジョアンナは、クスッと笑った。

「そりゃそうよ。私は母親似だしね。あの男は、もとは普通の商人だつたけど、十三年前のことで仕事がなくなつたのよ。お密さんのほとんどが、マーレル逃げ出しちやつたもんね。」

そこで、やばい商売に手を出し始めて、今では、あのあたり一帯を仕切る、大ボスになつたの。それでもつて、マーレルにいくつかある、やばい組織達と、マーレルの^{はけん}霸権をめぐつて抗争中つてわけ。夜間外出禁止令が出た理由は、殺人事件だけではないのよ。夜間、やばい組織同士が、よくケンカするの。だから、外出をきびしく制限しちやつたのよ。ほんと、マイワクな話ね。」

「いろいろと大変なんだな。お前、組織の跡継ぎにされるのがいやなんだろ。」

ジョアンナは、うなずいた。

「私、こんなでしょ。まともに組織なんて仕切れるわけがない。男に、もじるのもいやだしさ。それに、私には、私の生き方があるしね。」

ジニアンナは、そう言い、明るくほほえんだ。レックスは、

「茶葉、こくらだ。モーガン家なら知ってる。おれが代わりにじでけてやるよ。ここから、けっこつはなれてるしね。」

「あんた、モーガン様の知り合いだったの。たすかるわ。じゃ、おねがい。」

レックスは、金をはらい茶葉をうなとつた。

そして、夕食のあと、のんびり茶を飲みつつ適当な話でもして、レックスは客室に案内された。レックスは、ベッドに転がり、ホツとしていた。

（居場所も確保できだし、少し、マーレルにいよう。けど、マーブルが、モーガンの教え子だったなんてな。大学出てたなんて知らなかつたよ。がさつで無教養だとばかり思つてたけど、見かけによらないんだな。）

シーラ、いまじりじりしてゐるかな。ホツとすると同時に、シーラが無性に恋しくなつてしまつ。

（つくしょ、会いたいな。クラサで別れたとき、マーブルが死んだばかりで、そつけない別れ方してきたけど、思いつきりだきしめ

て、いっぱいキスしてくれればよかつた。)

レックスは、頭をたたいた。

(自分探しもかねての一人旅じゃないか。明日から、もっと行動範囲を広げてみよう。マーブルが通っていた大学とか、行きそうな場所とかさ。)のまま、なんの収穫もなしに、クリストン行けるか。)

と思ったが、レックスは、ため息をついてしまった。

(夫婦が、少し離れただけでも、こんなつらいのに、女房死なせて逃げ出すなんて、どんな思いだったのだろう。グラセンは言つてたな。マーブルは過去にとらわれてるつて、後悔してるつて。マーブルの忘れ物つて、後悔なのかな。女房置き去りにして逃げたしな。けど、母さんが生きているのならともかく、もう。)

レックスは、ギョッとした。また、あの影が見えた。今度は、ベッドのわきだ。影は、レックスが気がつくと、すぐに消えた。

(母さんのことを考えると、かなりずだ。まちがいない。母さんの亡靈だ。廻殿から連れてきてしまつたんだ。おれにそばにいる。)

レックスは、悪寒がはしつた。

(し、しつかりしろ、おれ。亡靈なら、ライアスでなれてるじゃないか。母さんの靈だ。悪さんかするものか。きっと、シエラのときみたいに、おれを守ってくれてるんだ。)

そう思つたが、ふるえはとまらない。怖くて怖くてたまらない。レックスは、フトンを頭からかぶつてしまつた。

ほとんど眠ることができなかつた夜があけた。朝日に、これほど安心したことはない。レックスは、起き上がり、はねぼつたい日をこすつた。

（はじめてライアスと会つたときは、たしかに怖かつたけど、眠れないほどじやあなかつた。次に会つたときもビクビクしたけど、そのうちなれて、それが当たり前になつた。なれる？ そうだな、そのうち、なれるよな。おふくろだもんな。）

でも、心に氷の矢がつきさわつてゐるよう感じじる。とても重く、冷たい。この冷たさは、ライアスがいた地獄の世界の冷たさだ。

（王家の剣をあずけたのが失敗だつたかな。あれがあれば、はつきりとわかるのにな。母さんが今、どういう状況に置かれているか。）

そうだ、教会に行つてみよう。教会なら、意識を集中すれば、何か、わかるかもしね。うまくすれば、ベルセアの援護が受けられるかも。

それで、午前中、モーガンの好意で勉強を教えたもつたあと、午後になつてから、アランに教会へ連れてつてもらうこととした。場所は、マーレルで一番大きな大聖堂だ。

大聖堂は、人が、ごつた返していた。どうやら、ベルセアから偉い坊さんが説法にきているようで、話をきこうと人が大勢つめかけできたらしい。

アランは、

「礼拝は無理だね。もうすぐ説法が始まるから、きいてくかい。」

レックスは、がっかりした。坊さんの長話なんて、グラセンできていく。

「帰る。お前、話がききたいのか。」

「まあ、どっちでもいいけど。でも君が礼拝なんてね。」

「そんなんには見えない、って言いたいんだる。これでも、神様は信じてるんでね。」

二人は、じつたがえしていた聖堂をあとにした。アランは、

「あそこは、女神ベルセアが主宰神なんだ。ベルセアは縁結びの神でもあるから、金持ちとか貴族の結婚式に、あの聖堂がよくつかわるんだ。君達の御両親も、あそこだつたんだよ。」

「そいつは知らなかつたな。あの親父、なーんにも話してくれないんだもんな。大学行つてたのも、館長にきいて知つたくらいだしさ。」

「

「まだ、帰るには早すぎるよ。どこか行きたい場所あるか。」

「館長がいた大学つて、どこだ。親父が在学してたんだる。見てみたい。」

「ぼくの大学だよ。けど、関係ない者は入れないから、外だけでいいか。」

レックスは案内してもらい、大学のまわりをグルッと回つてから、アランとともにモーガン宅へともどつた。

第三夜、執着（2）

レックスは、モーガン宅の密室のベッドにすわった。今日も収穫は無し。

（つかれた。大学も、どちらかっていつとムダ足だったしな。）

また、何かの気配を感じる。おふくろのことなど考えてなかつたはずだ。が、違つた。黒いモヤッとした影ではなく、おだやかな顔つきの美女だ。

「せつかくてくれたのに、今日は『めんなさい』ね。」

「ねえねえ、きててくれたのか。」

美女は、ほほえんだ。

「私はいつも、あなたを見ています。あなたが知りたいのは、マルガリーテのことですね。」

「ライアスのときと同じように思えるけど、真相はどうなんだ。」

「経緯としては同じでしょう。マルガリーテもまた、現世に思いを残して命を終えますから。けど、大きな違いがあります。」

「ライアスも母さんも、どちらも似たような悲劇的な最後をむかえている。この世に思いを残しても当然だと思ひつ。おれには、同じように見えるけど、あなたから見た違ひってのはなんだ。」

「残した思いの違いと、生前、どれだけ真実を知つてゐるかの違いです。ライアスは、霊能力を持つていました。つまり、ライアスは、私達の存在を見えないものとしてではなく、実在するものとして、とらえることができたのです。けど、マルガリー・テは、王家の間人という以外は、ふつうの女性でした。」

「ライアスはなぜ、ああなつたんだ。あんたといつして話ができたんだろ。」

ベルセアは、

「ライアスの過去であるミユティカは、直接私と話をすることができました。彼女には、エイシア解放という使命があつたからです。私達の指導どおりに解放し、国をあらたにつくるには、私達と話ができなくてはなりません。ですから、女王というよりも、巫女としての能力を要求されたのです。

けど、ライアスは、あなたの補佐が使命です。ですから、それほど力は必要なかつたのです。

例の魔物がねらつていることもわかつてましたから、悪霊の影響をうけやすい霊能力など必要ないとも考えましたが、確実に使命をはたすため、そして、私達の指導をうけやすくするために、本人の希望もあり、ある程度の能力をもつて産まられてきました。

たしかに最初は、うまくいったのです。幼いライアスに、私達はさまざま形で接触することができました。私達の姿は、ライアスには光の塊、すなわち天使として見えていたはずです。けど、だれがきていたかまでは、能力的に判別することができなかつたのです。

けど、ある時をさかいに、ライアスの魂にくもりができてしまいました。ドーリア公との葛藤です。」

ライアスとの接触は、その後むずかしくなったとベルセアは言つた。そのかわり、近よつてくるものがいた。例の魔物である。

「魔物は巧妙でした。私達のふりをしたり、または本性を現したりで、ライアスは、私達と魔物の区別が、しだいにつかなくなつていったのです。本人が、気がついたときには、すでに手おくれの状態でした。そして、バテントスの襲来があり、あの子は短い生涯を終えてしまつたのです。」

「ドーリア公と何があつたんだ。あんたなら、わかつてゐるはずだ。」

「ドーリア公が、ライアスを自分の子ではないと信じたからです。あの子の母親には恋人がいました。クリストンまでやつてきた恋人は、結婚式のあと、一度だけあの子の母親と会つたのです。

産まれた子は、恋人とよく似た金髪と青い目でした。自分のあやまちを悔いた母親は、それを死ぬまぎわに夫に告白したのです。ただ、髪と目の中が似てるというだけでね。」

ライアスが、いくら考へてもわからないわけだ。けど、髪と目の中が色だけでそうだと判断されたのは悲劇だ。レックスは、

「国立図書館で昔の王様達の肖像画を見たよ。金髪と青い目がやら多かつた。おれのジイサンにあたる王様だつて、金髪と青い目だつたしぃ。ライアスは、ジイサン似だよ。」

「人は、悪い方を信じやすいものです。ドーリア公もその立場がら、

人をうたがう傾向が強くありました。ライアスは、母親にも愛されてはいませんでした。ライアスは、母親にとり罪の象徴でしたから。

「ああ、父に愛されたとねがいつつも、わけがわからず、そのすべてを拒絶されたライアスにとり、妹のシエラだけが、自分のたつた一人の家族だったのです。シエラへの溺愛^{できあい}ぶりは、あなたも知つておられるでしょう。」

「ああ、すごかつたな。シエラがかわいくて、どうしようもないみたいだった。妹というよりも、恋人か娘みたいで、何があつても、シエラから離れたくないって感じだった。」

ベルセアは、

「それだけ、肉親の愛情に飢^うえていたのです。シエラも純粹に兄を愛していましたからね。シエラとの深い愛情と、あなたへの無償の思いがあつたからこそ、ライアスを救うことができたのです。」

レックスは、うなずいた。

「おれ、ライアスが好きだよ。できることなら、生きたまま会いたかったよ。」

「その気持ちを大切にしてください。あなたのその気持ちが、ライアスを救つたのですから。」

ベルセアは、

「マルガリーテの方に入りましょう。彼女は、執着靈です。宮殿と女王という地位に、死後もしがみついた靈です。彼女は、一人の兄

である前王とドーリア公と母がちがいます。一人の兄の母はベルセア出身ですが、彼女の母は王妃の侍女でした。王が酔つた勢いで王妃とまちがえ、マルガリーテが産まれたのです。」

執着靈、ときき、レックスはやはりと思つた。あのゾッとするような冷たい感覚、ライアスとはあきらかに違つ。ベルセアは続けた。

「マルガリーテは、その出生上、王家では低い位置におかれてました。あなたの父ウォーレンとの結婚も、たしかに大恋愛でしたが、どちらかといえば差別されている宮殿から、いつこくも早く逃げ出したいという気持ちが強かつたのです。」

「だが、つましい家では、おさまりきれなかつた。マーブルは、そう言つてたよ。」

「そうでしょうね。華やかでもなんでもない下級貴族の生活は、王女にとり、がまんしなければならないことが多いですから。ですから、女王となり、宮殿で堂々とできる立場に執着したのです。ドーリア公におどされ退位すれば、もとの下級貴族の妻に逆戻りですかね。」

火を放つたのも、宮殿が燃えつきれば、だれの手にもわたらないですし、女王のまま自殺すれば退位しなくてすみます。やつとめぐつてきた栄光を、手放したくなかったのです。」

「けど、おれとマーブルは逃がした。」

「さすがに、自分の野心に、幼いあなたまで道連れには、人の母としてできなかつたのです。あなたがいなければ、ウォーレンもマルガリーテとともに死んでいたはずです。ウォーレンは愛情深かつた

ので、直ちに進んでそびじていたでしょうね。」「

「マーブルは、母さんを愛していたからな。好きな女のためなら、なんだってやるってタイプの男だったものな。」

「マルガリーテは、現世に強い思いを残していたので、自分が死んだことに気がついていないのです。面殿にとどまっているのも、いまだに自分が女王だと信じて居るからです。けど、あなたがきました。」

「母さんが、おれだとわかつたから、おれについてきたのか。」「

ベルセアは首をふる。

「彼女の時間は、十三年前でとまっています。あなたがだれか、じゅうぶんにはわかつていません。けど、心惹かれるものがある、そんな感じです。その意味をたしかめようと、あなたを見ています。」

「

「今はここのか。」

「私がいますからね。この部屋に結界をはっておきましょう。あなたが、この部屋にいるかぎり、よってこれにはねずです。」

「おれに、何かできることはあるか。マーブルのためこも、なんとかしてあげたい。」

「グラセンとちがい、法力も何もないあなたでは、救おうなどと考えないほうがよいでしょう。私としては、あなたにクリストン、すぐにでも向かってほしきのです。シホラがいれば、マルガリーテ

の靈など、あなたに近よってはいないでしょ」つから。」

「でも、親父の忘れ物があるんだよ。親父の忘れ物って、母さんを救えつてことじやないのか。」

ベルセアは、ため息をついた。

「私の言つてゐる意味を、よく理解してないようですね。自分の親を救いたいという思いは、だれでも同じです。ですが、それは自分の実力をこえて、それるべきではないのです。ましてや相手は執着の塊かたまりです。それをほぐすことは、あなたの父親でもむずかしいでしょ。」

「けど、なんとかしたい。ライアスだつて救えたじやないか。あなたの手助けがあつたけどさ。」

ベルセアは、本当に意味を理解してないな、と思つた。

「わかりました。けど、この町は、今のあなたにとって、あまりよい町ではありません。できるだけ早く、クリストンに向かいなさい。」

「あんたにもこりこり心配かけて悪いと思つてゐる。あとは、おれがやるから。」

ベルセアは消えた。レックスは、パツと目をさます。まだ外が明るいところを見ると、そして時間はたつてないらしい。うたた寝した程度か。

第四夜、誤認

で、さっそく行動をおこした。夜中まで待つて、モーガン宅をぬけだす。玄関はカギがかかっていたので、密室（三階）の窓から、家のでっぱりや雨どいなんかを利用して、地面へとおりた。

見回りの警官を警戒しつつ、宮殿めざして走った。そして、この前見つけた、こわれた窓から内部へと入り、玉座の間へ直行した。焼け落ちた室内は、十三年たつても、死のにおいが色濃く残り、やはり不気味だ。自分の母は、死んでも死にきれず、ずっとここにいたのである。

「母さん、おれだよ、アレクスだよ。あんたが、ここから逃がした息子だ。帰ってきたんだよ。母さん、そこにいるんだろ。おれのそばにいるんだろ。姿を見せてくれよ。」

シンとしていた。レックスは、もう一度呼びかけてみる。

「おれが、わからないのか。ドーリア公はもういないんだよ。あれから、十三年たつてんだよ。おれは十八歳になつたんだ。母さんが知つてゐる五歳のおれは十八なんだよ。もう、大人になつたんだ。母さん。」

黒い影が、玉座があつたあたりに現れた。それが、おずおずと近づてくる。自分がだれか、たしかめてるようだ。レックスは、ゾクッとしたが、グッと恐怖をこらえた。

頭の後ろで、むすんでいた髪をほざいた。その髪を手にとり、

「せり、母さんと同じ色だ。この色、おぼえてるだろ。アランも、この髪を見て、おれがアレクスだとわかつてくれたんだ。母さんなら、なおさらだろ。」

モヤツとした手らしきものが、レックスの髪にさわる。冷たい感触が、背筋をとおりぬけたが、これもガマン。

（クソ、ライアスのときは、まるで感覚がちがう。でも、なんとかしなきや。母さんがこのままだつたら、マーブルだつて安心して、あの世に逝けないはずだ。）

影は、少し考へてゐようつだつた。十三年間、時間が止まつてゐるマルガリー・テにとつ、とつぜん現れた息子は、とまどひの対象でしかない。

レックスは、なんとか話ができないものかと考へた。

（目で見ず、心の目で見てみよ。意識を集中して、母さんを受け入れてみよ。）

不成仏靈相手に、こんなことをするのは危険きわまりない。下手すれば、のつとられてしまう。けど、このときのレックスは、ライアスのときほつまくいつたから、今度もつまくいくだらう、と単純に考へていた。

影が、レックスの内部に侵入してきた。いやな感触がし、体が気味の悪い冷たさにみたされる。

「アレクス、ほんまにアレクスか。わらわのかわいいアレクスか。」

金髪を高くゆい上げた女の姿が感じられた。心の田で見ているのだから、見えるよつは、感じると表現したほつがいいだろ？

「せうだよ、アレクスだよ。母さんの息子だよ。やつと、会えた。」

女は、

「他人のよつにも思える。わらわのアレクスは、こんなに小さかつた。なぜ、そのよつな姿になつたのじや。」

「だから、十三年たつたつて。おれはもう大人なんだよ。いつまでも子供じやないんだ。」

「ウォーレンはゞうした。そなたをあづけたウォーレンは、どんこおるのじや。」

「父さんは死んだ。だから、父さんのかわりに、おれがここにきたんだ。母さんをたすけるために。」

亡靈は、

「たすける、わらわを。そつじや、ドーリア公はゞうした。わらわの宮殿をうばいにきた、クリストンの鬼はゞいじや。」

「ドーリア公はもついない。何年か前に死んだ。」

「死んだ。あの男がか。それはまことか。そつか、天罰がくだつたのじやな。我が祈りが天にとどいたか。よくぞ、知らせててくれた。礼を言つれ、若いの。」

なんか話が、うまく通じない。自分のことを息子だと認識したはずなのに、もう他人あつかいだ。それに父が死んだと話したことに関心をしめたない。

マルガリーテは、

「アレクスとがもうしたな。わらわの息子もアレクスじゃ。同じ名のよしみじや、そなたを息子のそばにあがらせよ。だれか、アレクスをこいく。」

ポンポンと手をたたくと、マルガリーテのそばに小さな子供が出現した。レックスとおなじ金髪の男の子だ。

「わらわのアレクスじゃ。よろしくつな。」

レックスは、ギョッとした。十二年前の自分だ。男の子は、にっこりと笑いレックスの手をとった。

「お兄ちゃん、あそぼ。こいつきて。」

さすがに、氣味悪くなり、レックスは男の子の手をはじいた。男の子は、幻のように消え、レックスは現実にもどった。それきまで感じていたマルガリーテの氣配はない。だが、胸の辺りに、氣味の悪い感覚が残っている。

レックスは、富殿からでた。富殿の外に、ベルセアがいた。

「あれ以上は危険だと判断して、あなたからマルガリーテの靈をひきはなしました。これでわかつたでしょ。話が通じる状態ではな

いのです。」

「おれがいた。どうこう」となんだ、あれは。」

「あの子は、マルガリー・テがつくりだした幻です。死を認識していない彼女にとり、幼い息子がそばにいるのは、母として当然なのですから。」

「けど、おれを息子だと、少しの時間だけだつたけどわかつてくれた。大人になつたことは、あまり理解してなかつたようだけど、たしかにわかつてくれたんだ。」

「そうですね。あなたに興味を持ち、あなたが自分の息子だと認識することはできました。けど、ウォーレンの死まで認めるることはできなかつた。あなたが、彼の死を口にだしたとたん、彼女はまた自分の世界に閉じこもつてしまい、あなたを認識することを意図的にやめてしまつたのです。」

「なぜ、そうしたんだ。おれは、母さんを悲しませてしまつたのか。」

ベルセアは、目をふせた。

「自分にとり、ついの悪い事実は、すべて排除してしまつのです。現実を認めてしまえば、自分が得たものすべてが消えてしまつからです。」

なんども説得には行つたのです。でも、あそこから引きはなすことはできなかつた。現世に執着した人間の魂の、なれのはての姿でしょう。本人が自覚するまで、あのままにしておくしかないでしょ

うね。」

「あのままつて、どれくらいなんだ。」

「百年でも一百年でもです。本人が、幻の世界にあきあきするまで、放つておくしかないでしょう。」

レックスは、あぜんとした。

「あんた、女神なんだろ。すごい力もつてんだろ。なら、なんでもその力でたすけてやらないんだよ。口で説得できなきや、強引にひっぱりだしたらいいやないか。」

「人には自由意志があります。人はその意志により、己をかたちづくっている存在です。あなたは、父親やグラセンによく反発したでしょう。他人の意志をおしつけられるのはいやだって。それと同じなのです。」

「なら、おれがする。もう一度、あそこにもどって母さんと話をする。わかつてもらえるまで、なんどでも話をしてみる。」

ベルセアは、苦笑した。

「あなたもそりとつガソロですね。私がいくら忠告しても耳をかしてくれない。なら、これ以上私と話してもむだでしょう。私は、もう何も言いません。あとは、あなたにまかせます。」

ベルセアは消えた。レックスは、もう一度宮殿へと入る。玉座の間にきたが、今度は何度呼びかけても何もおこらなかつた。レックスは、モーガン宅へ帰ることにした。

帰り道、トボトボ歩いていると、やたら寒さが身にしみる。レッククスは、防寒用のマントを身につけた。まもなく春がくるところに、真冬とかわらない寒さだ。

（人が死ぬってどういう感じなんだろ。マーブルは、とつぜん死んでしまったし、母さんだって、まさかあんな死に方するなんて考えもしなかつたろうしな。）

人の死は、使い物にならなくなつた肉体から、魂が分離する作業だ。肉体は滅んでも、魂は生き続けるので、現世がすべてだと信じている人間は、なかなかその死を自覚できない。

（母さんにとり、自分が女王であり続けることが、すべてだつたつて、ベルセアは言つていた。侍女の娘に産まれて、いやな思いをいっぱいしてきたんだろうな。マーブルと出会い結婚して、おれが産まれて、母さんは幸せだったのかな。）

図書館で見た母の肖像。女王ではなく、ただの女優の肖像だ。拍手喝采をあび、満面の笑顔をふりまいている。女王という永遠のスターであり続けたかったのだろう。

そして、今も。

（母さんをたすけるには、おれが、母さんの息子だと、はつきりとわからせるしかない。そして、マーブルが死んだこともだ。百年も一百年も、あのままにしておけるか。おれを産んでくれた母さんなんだぞ。）

ずっと考え続けて歩いていたので、レッククスは違う道に迷いこん

でいたことに、やつと気がついた。いつのまにか下町に出でる。モーガン君とは逆方向だ。

（やばい。下町はとくに警戒がきびしいんだ。裏組織同士が、ケンカしてるので話だし。また、警察は『めんだ。とにかく、ここから退散しよう。）

レックスは走った。けど、角をまがったとき、だれかとぶつかってしまった。警官かと一瞬思つたが、自分と同じ防寒用マントをきた男だった。

男とぶつかった一瞬、レックスは何かハーブのよつの匂いを感じた。男は、チラリとレックスを横目で見ただけで、走り去つていく。レックスは、男から、ただよつてきた匂いにおぼえがあった。

（うの匂い。ジョアンナの茶の匂いだ。新しい男でもできたのかな。）

ピリリーツと警笛がなり、レックスはしまったと思った。この前同様、逃げ出すよゆうもなく、三、四人にかこまれてしまつ。

「連續殺人犯。もう逃げられないぞ。」

連續殺人犯、さつきの男か！

「ちがう。おれじゃない。さつき、ぶつかった男だ。あっちに逃げたよ。」

警官は、レックスの顔を見つめた。

「お前、たしかこの前、警察署に連行した男だな。レオンとか言つた。」

運の悪さにも限度があつてほしい。

「ちがうつたら。おれじやない。外出したのは悪かつたよ。知り合いが、死にかけてるつてきいたからさ。しかたないだろ。死に目に会えなかつたら、いやだしさ。」

「苦しまぎれのウソを言つたな。捕縛しろ。」

縄が出され、レックスは反射的に警官をなぐつてしまつた。ピリーッとつるむく鳴り、取り返しがつかなくなつたレックスは、警棒をふりまわす警官をふりきり、全速力で逃げた。

とんでもないことになつた。

(このマントかよ。防寒用マントなんて、みんな同じようなモンだから、これをきてるつてだけで、かんちがいされてしまつたんだ。けど、なぐつちまつた。これで、犯人確定だ。)

レックスの目の前に、警官が一人とびだしてきた。警笛が、しついく夜の下町に鳴り響く。レックスは、ええいとばかりに警官に体当たりをし、のびた警官をとびこえた。

(このまま、モーガンの家に行くのはまずいな。けど、ガードのやつら、いつにうに出でこない。おれが死にかけないと出でこないつてのかよ。めいっぱいピンチなのに、たすけてくれつてんだ！)

逃げこんだ路地にある家の戸が少しひらいた。レックスは、その

戸を無理にひきあけ、家の中へとおし入り、戸口にいたオケをもつた女の口をふねぐ。

「しずかにしてくれ。警笛をやつす」Jの家から出て行く。

」

女は、恐怖にふるえながら、うんうんうなずいた。レックスは、一聞しかない部屋の奥を見た。ベッドに子供が寝ている。うーんうーん、うなつていてるところを見ると、カゼで熱が出てこむようだ。

Jのあたりは、共同井戸をつかつていて、井戸端が多い。たぶん、夜中に熱をだした子供のために、水をくみに出来よつとしたのだね。レックスは、すまないと心でわびた。

どれくらい時間がすぎたね。うねたこくいう響いていた警笛がやんだ。少し明るくなつてきていてる。レックスは、女を軽くなぐり、そつと床に寝かせた。熱をだしててる子供は、意識がボンヤリしていふよつて、レックスには気がついていないようだ。

レックスは、警戒しつつ外へ出た。慎重に足をすすめ、モーガン

がついたのは、夜がすつかり明けてからだった。

第五夜、拉致（1）

夜間外出禁止令が出ているのに、今までどこに行っていたかと、モーガン父子に当然のごとく問いつめられたレックスは、正直に答えるしかない。

「富殿にどうしても行きたかった。昔の事を少しでも思い出したかつたからだよ。昼間だと、警官に見つかるから夜にしたんだ。けど、考え方をしてたら下町に出てしまって、そして・・・。」

アランはモーガンは、青くなつた。アランは、

「無謀むぼうにもほどがある。富殿は、だてに立ち入り禁止になつてゐるんじゃない。火事があつた場所は、崩落ほつらくしかけていて危険だからなんだよ。しかも、連續殺人犯に、まちがわれたつて？ 夜間外出が禁止されてるのに外出したら、まちがわれても当然だ。」

「おれがバカだつたよ。けど、おれ、犯人の男の顔、はつきりと見てんだよ。犯人つかまえれば、おれが無実だつて証明できるはずだよ。」

モーガンは、

「一度も夜間つかまれば、犯人にされても文句は言えませんよ。暴力をふるつて逃げたとなれば、ほぼ確定です。すでにあなたの似顔絵が作成され、マーレル中の警官が、あなたを血眼ちまなこになつてさがしているはずです。ここでかくまつっていても、近所の者があなたを見ているはずですから、すぐにでも見つかってしまうでしょう。」

レックスは、

「荷物をとつたら、ここを出て行くよ。そのつもりでもどつてきたんだ。おれがいた理由は、てきとうな言い訳でも考えてくれ。新しく使用人にやとつた男だったとかで、いろいろあるだろ。」

モーガンは、

「マーレルから逃げてください。あなたがマーレルから出れば、あなたを守ってくれているガードが姿を現すのでしょうか？ その者達に守つてもうつてください。マーレルの外まで、警官に見つからないよう、おつれしますから。」

レックスは、

「むだだと思うよ。荷物にかくれてたって、非常線はられていいたら荷物検査でばれてしまう。食料をわけてくれないか。宮殿に行こうと思う。」

アランは、

「あそこは、たしかに大きくて、うまくかくれれば、警官には見つかりにくこと思うけど、宮殿は、マーレルのほぼ中心地にあるんだ。下手すれば、どこにも逃げられなくなるし、かくれ続けていたって、食料がなくなれば調達しなきやならない。いづれは見つかってしまう。」

「宮殿にやり残したことがある。そのため、せめて、あと一寸だけでも時間がほしい。それがすんだら、自力でマーレルを脱出し、そのままクリストンにむかう。」

アランは、

「何をやり残したと言つんだ。あんな廃墟に。」

「大事なものをさがさなきやならない。おれの大事なものだ。」

カツとしたアランをおしどめたモーガンは、首をふつた。

「私達にとり、あなた様以上に大事なものはないのです。何をおさがしかば、ききません。けど、大変な事件にまきこまれてしまったあなた様を、素人の私達ではこれ以上、おたすけすることはできません。」

「いろいろと迷惑かけてすまなかつた。食料をたのむ。」

食料を受け取つたレックスは、マントのフードを深々とがぶり、明るい陽射しの中を足早に去つていつた。アランは、レックスの姿が見えなくなつても、窓からはなれなかつた。

モーガンは、氣落ちしている息子の肩に、そつと手をあてた。

「運を天にまかせるしかない。十三年、生き続けていてくれた、彼の強運を信じるしかない。祈りう、私達にできるのはそれだけだ。」

「こんな事態になつてまで、さがさなきやならない大事なものつて、なんなんだ。シエラ様と別れて、たつた一人でマーレルまできて、さがさなきやならないものつて。しかも、あんな廃墟で。なんにもないのに。」

「それはわからない。十二年という時間は、私達の想像以上に長かつたのかもしれない。」

朝の道は、どこそこへ通勤通学する人達でいそがしい。レックスがモーガン宅を出たのは、ちょうどそんな時間だった。レックスは公園の植え込みの中にかくれつつ、ラッシュ時間がすぎるのを、ひたすら待つた。

けど、通勤通学の波に気をとられていたせいか、背後からしのびよる警官には、直前まで気がつかなかった。ふりおろされた警棒を荷物で受け止め、逃げた。

警笛が響き渡る。通行人の視線があつまり、レックスはもうだめかと思ったが、逃げ切れるここまで逃げ切つてみるつもりで、ひたすら走った。

フワリと黒い影が目の前に現れ、レックスは、みぞおちに強い衝撃を感じた。気を失ったレックスをかかえ、黒い影は追いかけてくる警官の前から姿を消した。

ドサリ。レックスは、投げ出された勢いで田をさました。床は、やたらホコリっぽく、咳きこんでしまつ。ここは、どこかの建物の中で、数人の男が自分をにらんでおり、その中の一人に見覚えがあった。

「こんな若造が犯人なのか。この前の朝、店で見かけた客だ。」

「こいつは、ゼルムからきたばかりの、おのぼりさんだよ。たまたま夜、外出してただけで、犯人とまちがわれたのさ。」

レックスが見覚えがある男は、ジョアンナの父親だつた。たしか、闇商人のマロニーとかなんとか。そして、その闇商人と話している男にも、しつかり見覚えがある。コウモリ男だ。

「ウモリ男は、

「犯人ではない男を、なんでつれてきたつて？ 約束がちがうぞ、と言いたそうだな。たしかにおれは、あんたの依頼で犯人捜しをしている。まあ、依頼じゃなくて、金に、せっぱつまつたおれから、あんたに持ちかけた話だがな。」

そして、床のレックスの顔をグイと持ちあげた。

「と、言つことだ。しばらく、付き合つてもらうぜ。連續殺人犯はな、この親分さんの子分ばかりをねらうんだ。警察よりも早く真犯人をつかまえないと、子分を殺された親分としてメンツがたたないんだよ。お前、ゆうべ犯人とぶつかつたる。顔を見ているはずだ。」

「なんで、そんなことを知つてんだよ。」

「警官に化けて、あの辺りにいたんだ。お前さんが、ぶつかるのを見たつてわけ。」

レックスは、

「たしかに見たよ。三十前後の男だ。顔は、どつちかつていうと優男タイプだな。身長は男としては中くらい。おれより低いことだけは確か。警察みたいに、似顔絵かけて言われても、かけないぞ。絵はダメだからな。」

「ウモリ男は、

「中くらいの優男だけじゃわからん。髪の色は、目は。」

「フードをかぶってたんで、髪の色はわからないよ。暗くて目の中もよくわからない。けど、おれが直接見たらわかるよ。犯人さがしなら、おれも手伝うよ。」

「あんな、警察におつかれられている男を、わざわざ外にだすと思つてんのか。いくら、お前が顔をおぼえていても、こっちがわからなければ意味ないんだよ。おい、マローーさん。お前さんとこで、絵のうまいやつはいるか。」

闇商人は、いないとこたえた。ウモリ男は、

「顔の特徴とか、なんでもいい。でなきや、お前をすぐにでも警察に引きわたしてやる。いや、適当に始末でもするか。腹をすかせた犬は、たくさんいるからな。」

「ウモリ男は、うす気味悪くニヤニヤ笑つて。レックスは、ゴクリと生つばを飲みこんだ。

「顔の特徴は、目は切れ長で鼻筋は、えーとすつきり、かな。口は、そんなに大きくはない。あとは、えーと、匂い。匂いだ。ハーブティーだ。ジョアンナのこの茶の匂いだよ。あれとおんなじ匂いがしたんだ。

きっと、殺人の直前までジョアンナのとこにいたんだよ。ジョアンナは、強そうな男をさがしてたから、殺人犯ひつかけちまつたん

だ。早くしないと、ジョアンナがあぶない。」

闇商人の顔色が変わった。転がっているレックスの腹を、クツで思いつきり突く。レックスは胃液を吐いた。

「そいつをしばって、地下倉庫にでも入れとけ。」

第五夜、拉致（2）

闇商人は、コウモリ男とともに、ビルかへ行ってしまった。レックスは、しばられ、地下倉庫へとたたきおとされる。戸が閉められ、真っ暗になつた。

（クソ、マジテラのときとおんなじパターンかよ。けど、ガードの中、ほんとにおれを監視してんのかよ。犬のエサにされかけてんだぞ。）

けられたせいで、胃がいたい。また、ムカムカし、胃液を吐けるだけ吐いたレックスは、その場にたおれこんでしまつ。ツンとする吐しゃ物の匂い。そういえば、昨日から何も食べず、一睡もしてないんだつたけ。気分が、もうれつに悪い。

「どうやら、眠つていたらしい。目をさましたレックスは、闇の中で起きあがり、タルらしきものを背にすわつた。まだ、腹がいたむ。」（ビルにかして逃げなきや。母さんのことは、かまつてゐる余裕はないな。けど、どうやつて逃げたる。マジテラのときは、ミランダがたすけにきてくれたな。）

レックスは、なんとか縄をほどいていたが、ギッチリしめられていて、一人じゃ無理だ。

（最悪を通りこしている。こんなトラブルにまきこまれる可能性があつたから、ベルセアは、さつとクリストンへ行けと忠告したのか。けど、おれって、つぐづぐ無力だな。一人じゃ、なんにもできない。）

扉がスーと開いた。飯でも運んできたのかなと顔をあげたレックスに、何か光る物がふりおろされ、その瞬間、天井から黒い物がドサリとおちてきた。

カララと床にころがるナイフ。例のコウモリ男が、一人の男を羽は交い絞めにしている。そして、集まってきた闇商人と、その子分どもに突き出し、金を受け取つた。

闇商人は、

「やはり、お前だつたんだな。ジヨルジユ。」

男は、クスリと笑う。

「ずるいね、あんたも。その子をつかって、ワナをはるなんてね。ワナかもしれないと思いつつも、きてしまふ私も、ほんと、どうにかしてゐる。あんた、わかつていたなら、なんで今までだまつてたのよ。さつさとつかまえればよかつたじゃない。」

闇商人は、だまつていた。男は、

「甘いのね、あんたは。店から連れ出すだけで、解決しようとするなんてさ。」

「なぜ、こんなことをした。あんな店をやるより、ずっと儲かるんだぞ。贅沢な暮らしもできる。」

男は軽蔑のまなざしを、目の前の闇商人に向けた。

軽蔑
けいべつ

「私は、あの店でお茶をたてて暮らしていきたかった。小さくても静かな、何もない、つつましやかな暮らし。よい匂いのお茶にかかるで、お客さん達と楽しい話をして、笑って泣いて、そして眠る、ただそれだけ。

「こんな組織で、きたない手下どもを使って、きたない商売なんてしたくもない。そんなことで得たお金に、なんの価値があるの。こんな組織、なくなつてしまえばいい。」

闇商人は、

「だから、組織の者どもを一人ずつ始末したというのか。」

「下つ端^ばを始末しても組織はガタつかない。ねらつたのは中堅クラス。つまり、組織を実際に動かしている連中。あと、三、四人ねらえば、組織は機能しなくなるはずだった。だから、あんたはあせつた。このままでは、敵対勢力に負けてしまうからね。」

闇商人は、つれていけと手下に命じた。ジョルジューと呼ばれた男は、レックスに向かい、

「まさか、あんなところで、あんたとぶつかるなんてね。あんたが、私のかわりに、犯人にまちがわれたのが運のツキってことかしらね。」

化粧はしていない。女の格好もしていない。けど、まちがいなく、ジヨアンナだ。そして、みんないなくなつたあと、コウモリ男はレックスの縄をほどいた。

「ま、そういうことだ。警察には、おれの仲間が通報してるのはずだ

から、やつやとこんな町をおそればして、クリストンへむかつや。長居は無用だしな。」

レックスは、耳をうたがつた。コウモリ男は、

「ヌケたジラをするな。ヌケてるのは頭だけにしろ。お姫様から、頭が悪いときいてたが、ここまで悪いとは思いもしなかつたよ。一言で言えば、バカだ。」

「なんで、ガードのお前に、そこまで言われなきゃなんないんだよ。ガードは、だまつてガードだけに専念してればいいんだよ。」

「専念したから、じうじてお前の前にいるんだよ。おれの名は、エッジ。クリストンまでのガード兼案内役だ。お前を守るために、ずっとこの地下倉庫にいたんだが、お前の吐いたモンで気分が悪い。わざわざと外に出るわ。」

エッジにつれられ、レックスは外へと出た。けつこう、長い時間いたらしい。太陽がだいぶ傾いており、もうすぐ夕方だ。

周囲を見回した。建物がまばらなところをみると、下町のはずれのようだ。まばらな家の向こうには、広々とした農地が見えている。

エッジは、

「こじらあたりは、空き家が多い。十二年前の戦場が、そこから見える農地だからな。ドーリアの親父は、その農地でマーレル守備軍をやぶつて首都に入つたんだ。だから、町の住民は、この辺りには住みたがらず、それゆえ、裏組織の勢力図からもはずされていた。ま、犯人をさそいだすには、絶好の場所だつたつてことだ。」

「どうやつて、ジョアンナをさそいだしたんだ。」

「犯人にされたお前が、ここに逃げこんだのを見たと、うまい具合にジョアンナにきかせ、おびきよせたんだよ。ジョアンナにとり、顔を見られたお前は、やつかいだからな。ワナだとわかつても、こつするしかなかつたんだよ。」

「ジョアンナが犯人だつたなんてな。つかまらなかつたわけだ、昼は女だしさ。ジョアンナは、組織継ぐのをいやがつてたしな。けど、連續殺人犯できるつて事は、ジョアンナはかなり強いんだろ。なのに、どうして、男に守つてもらおうとしたんだろ。初対面の時だつて、父親に髪までつかまれたのに、なんにも抵抗しなかつたしさ。」

エッジは、ニヤリと笑つた。

「ま、そこが女『』口つてモンだ。お前が、助けにきてくれるのを期待してたんだよ。女つてのはな、気に入つた男の前じやあ、そういうモンなんだよ。お前は見目がいいからな。たとえ、守備範囲じやなくともな。」

見目がいいと言われ、レックスはムカツときた。

「悪かつたな。見た目だけでさ。けど、警察は、裏組織をなんとかしないのかよ。裏組織さえ、どうにかなれば、ジョアンナは、そこまですることはなかつたはずだ。」

「殺されたのは、下町の住民ばかりじゃない。貴族もだ。つまり、組織は、マーレル中に浸透してゐる。警察にも入り込んでゐるはずだ。だから、長居は無用と言つたんだよ。いくら、犯人捕まえて、お前

の無罪を証明したとしても、ついにうが悪くなれば、お前さんが再び犯人にされるかもしれんしな。まあ、とりあえず安全になつたという程度だ。」

レックスは、びっくりした。エッジは、

「ボス（シエラの叔父サイモン）が、お前をマーレルに行かせたのは、こういう理由があつたんだよ。聞くのと見るのじゃ、大違いだからな。現実を知つてもらいたかったんだ。どうだ、事件にまきこまれたおかげで、だいぶマーレルの事情にくわしくなつたる。」

レックスは、だまりこんでしまつた。エッジは、

「このまま、西の海岸へ向かう。そこから、船を使う。冬荒れしてた海が、静まつてきたころだから、船で海岸沿いにクリストンに入れるはずだ。まあ、船酔いするかもしれないが、雪でいっぽいの山脈をこえるよりは、まし、おい、何つたつてんだよ。さつさとついてこい。」

レックスは、動かなかつた。

「あ、あのさ、出発は明日にしよう。ほら、もうすぐ夜だしぃ。とりあえず、おれは安全になつたんだる。」

「お前、自分の立場をわかつてんのか。とりあえず、と言つたんだぞ。警察に見つかったら、証人として連行されて、そのままつて可能性もあるんだよ。下手すれば、身分だつてばれてしまつ。このまま、トンズラが一番平和なんだよ。」

「そこをなんとかたのむ。宮殿に行きたいんだ。心配なら、お前が

ついてきてくれ。一晩だけでいいんだ。」

「なんでそんなに宮殿に執着するんだ。あんな廃墟に。」

レックスは、顔をそらしたまま、何もこたえなかつた。じつとしていて、そこから動きそうにもない。Hッジは、やれやれと思つた。

「しかたないな。一晩だけだ。あんな幽靈屋敷はごめんだが、どうしても行きたいと言つたら、いつしょに行つてやつてもいい。けど、一晩だけだからな。」

レックスは、ホッとしたようだ。

「Hッジとか言つたな。お前、なんであそこが幽靈屋敷だつて知つてたんだ。」

「町のウワサなんだよ。火事のあつた玉座の間に女王の幽靈が出てた。その幽靈曰当てに、いつとき、宮殿での肝試しが、はやつた時期があつたんだよ。だが、火事あとに入るには危険だ。実際、天井が崩落して怪我人が出たんだ。それで、立ち入り禁止にしたんだ。お前、玉座の間が曰当てか？ 幽靈でも母ちゃんに会いたくなつたつてのかよ。」

「そ、そんなんじゃない。ちょっと考えたいことがあつてさ。」

「玉座の間だけはダメだぞ。わかつたか。」

「わかつたよ。だから、そんな怖い顔でにらむな。そんなに心配なら、おれのそばにへばりついてればいい。お前がいいと思つ場所でガマンするから。」

エッジは、ため息をついた。

「まあ、お前が何をしようが、おれには感知できない」とだ。けど、お姫様を悲しませるような真似だけはするな。あいつの悲しい顔は一度と見たくはないんだよ。もつ、一度とな。」

レックスは、え?と思つた。悲しい顔は一度と見たくはない。ライアスが死んで、シエラが泣いていたことを言つてゐるのだろうか、それとも。

第六夜、決着（1）

エッジの巧みな誘導のおかげで、警察には見つからず、すんなりと富殿に到着できた。エッジはレックスをつれ、富殿西にある密室へと向かう。

「ここは、火事があつた玉座の間から、だいぶはなれている。寝具はないがベッドはあるし、西日が入ってきてるせいで、だいぶ暖かい。今夜は、ここです」エッジ。

エッジは、一つあるベッドの方のホコリを軽く手ではらつた。そして、プロトンと横になる。

「ここから出るなよ。トイレに行きたかったら、おれに言つんだ。食い物と水は、おれの荷物の中にある。」

エッジは、それだけ言つと眠つてしまつた。レックスは、残つたベッドのホコリをはらい、すわる。そして、寝ているエッジを見つめた。

玉座の間に行こうとしてもムダだらう。眠つても、自分が部屋を出れば、すぐに目をさますはずだ。

とりあえず、夜まで待つことにした。エッジの荷物をあさり、食べ物を取り出す。パンと干し肉とバターだけだったが、ふだんから質素な食生活になれているので、これだけあればじゅうぶんだ。

「うーん、ミランダ、そんなに冷たくすんなよ。仕事仲間になるんだ。もうひょい親密にさ、待てつたら。」

『寝言うるさい。久々に心臓に悪い言葉をきいた。』

（な、なんで、あんな毒女がもてるんだよ。マーブルといい、こいつといい、毒つ氣にあてられんのも、いい加減にしりつてんだ。）

エッジは、いびきをたてて寝ている。そばで見ると、実にのんきな寝顔だ。なんだか、腹がたつてきた。

（こいつ、だれかに似てると感じたけど、マーブルにそっくりだ。荒っぽいとか、強引な命令口調とか。クソ、おもしろくもない。）

レックスは、ベッドにすわった。フワリと光るものを見えた。金色の髪が、エッジのそばでゆれているような気がする。目をこらして見ると、

「ライアス、ライアスだろ。ここにいるのか。」

ライアスは、笑った。が、すぐに消えた。そして、その晩、目をさましたエッジは、ライアスとの過去について語った。

「ライアスの幽霊が見えたんじゃあな。だれにも話す氣はなかつたが、ききたかつたら話してもいい。」

レックスは、ぜひとと言つた。

「・・・ライアスと出合つたのは、そつだな、やつが十四か五か、親父さん（ドーリア公）が、マーレルから手ぶらで帰つてきたあとだつた。ボス（サイモン）が連れてきてな。ライアスは、ここでし

ばらく暮らす」となったから、仲良くなってくれと言つてきただ。

「

「ううつて感じだ。サラサじゃないよな。」

「通称、訓練所。おれ達みたいな裏方仕事のスペシャリストをつくる施設だ。場所は、簡単には見つけられない、サラサから、うんとはなれた山の中にある。場所を知つてるのは、ボスと親父さんくらいのモンだ。ライアスは、ボスに連れられて、そこへやつてきただよ。」

ライアスは以前レックスに、ドーリア公のマーレル侵攻に反対し怒りをかい、塔に閉じ込められたと言つていた。サイモンが、ライアスを訓練所と呼ばれる場所に連れて行つたのはたぶん、ドーリア公から引きはなすためだつたのだろう。

レックスは、

「ライアスはそこで、しばらくお前といつしょだつたんだな。どんなだつた。」

「どんなつて、元気なかつたな。まあ、塔に閉じ込められて餓死しがければな。」

「ドーリア公つて、どんな男だつたんだ。話、きいてると、かなり怖い男みたいだけどもさ。けど、父親の話をするシエラの様子を見つると、そんなに怖い感じてもないしさ。」

ヒッジは、苦笑したよつだつた。

「男親は、たいてい娘にだけは甘いモンなんだよ。妹姫様の前じゃあ、ただの父親だったものな。だが、娘以外では、お前のいうとおりだよ。とにかく、恐ろしかった。この男だったら、カツとして息子を餓死させても不思議じやないってな。

まあ、それはそうとして、とにかくライアスは美形でな。おれをふくめてライアスをはじめて見た訓練生は、ほんとに男なのかよつて、びっくりしてたんだ。」

「シエラせつくりだつたる。」

「ああ、そつくりだな。けど、ライアスの方が上だ。妹姫様には悪いがな。でもつて、おれは、その日のうちに、女じやないかと確かめに行つた。あきれた顔するなつて。めちゃくちゃきれいだつたし、この目で実際確かめてみなければ、信じられなかつた。結果、やつに半殺しにされた。」

レックスは、なんだか頭が痛くなつてきた。エッジは、

「まあ、そんな事件があつたんで、ライアスのやつ、訓練所で一目おかる立場になつた。なんせ、訓練生のなかでもトップだつたおれを、ショックで呆然ぼつぜんとしていたとはい、半殺しにしたんだもんな。さすが神童つて事になつた。」

「だらうな。とにかくで、ライアスは訓練所で何をしてたんだ。」

「訓練生にまじつて、いつしょに訓練してたよ。やつは、体を動かすのが好きだつたからな。けど、おれをつぶしたんだから、ライアスの上達は早いのなんの。あつとこつまに、おれと互角に戦えるようになつちまつた。」

レックスは、どうりで強いわけだと思った。いつだつたか、川でバテントスと戦ったとき、ライアスは自分の体をかりて、その場で苦戦しているマーブルをたすけつつ、バテントスを撃退したつ。

「あのや、お前とライアス、どっちが歳が上なんだ。」

「一つ違う。ライアスは、おれの弟分だ。で、おれも必死になつて訓練した。やつに追いぬかれまいと必死だつた。そういうしているうちに、一年近くたつたな。ライアスは、サラサに帰つたんだ。」

エッジは、水筒から水を出して飲んだ。

「いなくなつたときは、さびしかつたな。胸の中にポカンと穴があいたよ。じばらぐ、なーんにもやる気がおきてこなかつた。それからまもなく、おれは訓練所を卒業したんだよ。何年かはボスの命令で、あちこち行つて、ライアスとは会えなかつた。」

「あちこちつて、どこに行つてたんだ。」

「そのうちの仕事の一つが、お前の搜索だよ。クリストンの情報部は、お前の生存を確かめてたんだ。まあ、お前をホゴしていく坊さんが法力もつてて、未来を先読みしてたんじや、どんなにがんばつて搜索してもムダな努力でしかなかつたしな。この話は、これくらいでカンベンしてくれ。ライアスの話にもどそ。」

「ライアスは、どんな領主だつたんだ。神童と呼ばれたくらいだから、すごかつたんだる。」

「切れ者だつたよ。けつこう、気性が激しかつた。気分屋っぽいと

こもあつたしな。まあ、親父さんほど恐ろしくはなかつたが、なんていふか、人には心を開かないやつだつたよ。いつも何か、カラに閉じこもつてゐると言つたか、別に世界に生きてゐると言つたか、価値観が、みんなと違つてた。

レックスには、その意味がよくわかつた。ライアスは靈能者だ。見えない世界がわかつてゐるのだから、価値観がちがつても当然だ。エッジは、

「人には心を開かないやつだつたが、どういうわけか、おれは信頼されててな。おれは、領主となつたライアスの直接の命令で、いろんな仕事をすることになつたんだ。まあ、情報部からのヒキヌキみたいなモンだ。仕事はともかくとして、あのときほど、楽しいことはなかつたな。」

「お前、いつからおれにそばにいるんだ。クラサからじやあないよな。」

「案内役を、お姫様から直接命令されたんだよ。ほら、お前が、ジヨアンナを助けようと飛び出しかけたときさ。あの朝、ちようどマーレルついて、お前の顔を^{おが}拵みに行つたんだ。そのとたん、あのトラブルだ。さすがにやばいと感じて、おれがお前のかわりに出たつて寸法や。」

「そつこつこつとだったのかよ。パンを宿に置いたのもお前か。」

「腹すかせて、また町に出られると困つたからさ。他のやつりじや、ここまではしないぞ。命令には入つてないからな。ぜんぶ、おれのその場の独断だ。だから、ライアスは、おれを案内役にしたんだよ。あ、言つちまつた。」

レックスは、やっぱりと思つてしまつ。

「シェラかサイモンか、どっちからか、きいてたんだな。」

「なーんにもきいてないよ。ボスは、必要以上のことは言わない主義だからな。けど、すぐに気がついたよ。お姫様に会つたとき、なつかしい風を感じたんだ。ああ、もどつてきたんだな、つて。」

「友達だつたのか、ライアスと。」

「兄弟に近いな。言葉をかわさなくとも、お互の気持ちはわかつたものな。すまん、おれがもう少ししつかりしていれば、ライアスを戦場で死なせなかつたかもしれない。」

「大砲の直撃つけたんだろ。どうしようもなかつたんじやないのか。」

「ライアスは、自分から大砲の的に出でていったんだよ。」

レックスは、びっくりした。エッジは、

「ライアスは、この戦争は技術差で負けるとわかつてたんだ。だから、被害が少ないうちに降伏して、チャンスを待つ氣でいた。けど、クリストンの大部分は、名譽にかけて最後の一兵まで戦うつもりでいて、若いライアスは、それをおさえることはできなかつた。」

ライアスは、がんばつたさ。バテントスとの技術差を、さまざまな戦法を駆使してねばつていたが、しょせん時間の問題だ。日に日にふえる戦死者と、救いきれない怪我人に苦しんだライアスは、領

主の自分が死ねば、クリストン軍は降伏すると考えた。

何も言わなくてもわかる仲だ。おれは、ボスにそのことをつたえ、ライアスにへばりつくことにした。けど、ライアスは、おれのすきをつき戦場へと行ってしまった。おれが気がついたときは、もうおそかつた。

そして、乗っていた馬の白竜とともに、この世から消えたんだよ。おれのせいだ。おれが、目をはなしたばかりに、あいつを死なせてしまった。」

エッジは、持っていた水筒をギュウッとじぎった。手が、かすかにふるえていた。レックスは、

「お前のせいじゃないよ。白竜に乗ってたんだ。なら、お前が目をこらしてライアスを見ていたとしても、ライアスは行ってしまう。白竜は、馬に見えてるけど、馬じゃない。竜という名前がしめすとおり、ドラゴンだ。伝説のドラゴンなんだよ。信じられないかもしないが、ライアスは、そういう馬に乗ってたんだよ。」

エッジは、

「その話も信じるぞ。あの馬はな、ライアスが五つのときから、そばにいたんだよ。ボスの話だと、ある朝、とつぜん宮殿の厩舎きゆうしゃにあらわれて、ライアス以外、絶対乗せなかつたらしい。

とにかく、ふしぎな馬だつた。年もとらないし、怪我や病氣にもならない。エサや水がなくても平氣で生きている。

一度だつたが、サラサ教会の坊主どもが、奇跡の馬だといつ」と

で、ベルセア国教会の法王への貢物みつぎものにしようとして、親父さんを説得して連れ出そうとしたらしいが、白竜には、さわることもできなかつたらしい。

けど、おれにとっては、馬よりもライアスの方がふしきだつたよ。あれだけ気持ちが通じていたのに、かんじんなことは、何もわからなかつたもんな。ライアスが何を思い、何を望んでいたかなんてな。今い今になるまでな。」

ヒッジは、レックスを見つめた。

「ま、そういうことだ。とにかく、無茶だけはするな。見える敵は、すべておれが片付けるが、それ以外の敵は、おれの手では無理だ。」

「おれが何をしようとしてるのか、わかつてゐのか。」

「お前も、ライアスと同じ匂いがするからな。出発は、夜明けと同時だ。それまでに終りせぬ。」

ヒッジは、また寝てしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7227w/>

千年王国ものがたりエイシア創記

2011年12月20日19時49分発行